

# 捨て魔法少女とリーゼント

雨魂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヤンキーが魔法少女を拾い、彼女と過ごす日々の中、ある家族は失っていた絆を取り戻す。

似たような物語を誰かが語り、或いは世界のどこかではもう描かれているかもしれない。ありふれた御伽話のような幻想譚。

# 目次

第一章／不良少年、魔法少女を拾う。

第一話	1
第二話	21
第三話	36
第四話	51
第五話	61
第六話	75
第七話	92
第八話	108
第九話	127
第十話	150
第十一話	161

第十二話

第二章／捨て魔法少女、捨て猫を拾う。

第十三話	193
第十四話	210
第十五話	223
第十六話	241
第十七話	255
第十八話	271
第十九話	280
第二十話	291
第二十一話	309
第二十二話	337
最終章／魔法少女が拾ったもの。	

第三十話	463
ゼント	
E p i l o g u e / 捨て魔法少女とリ	453
第二十九話	434
第二十八話	411
第二十七話	392
第二十六話	382
第二十五話	370
第二十四話	348
第二十三話	

# 第一章／不良少年、魔法少女を拾う。

## 第一話

### P r o l o g u e /

「ああ、その変な髪型のお兄さん。よかつたら、私を拾ってくれませんか？」

小雨が降るとある日の放課後。傘をささずに帰り道の公園を歩いていると、突然誰かに声をかけられた。

「あ？」

立ち止まり、メンチを切りながら返事をする。こうすれば大抵の人間はたじろぐか謝ってくるか、どちらかの反応を見せる。いずれにせよ、最終的には尻尾を巻いて逃げていくのがいつも通りの流れ。

だが、声をかけてきたそいつはそのどちらにも当てはまらなかつた。という事は、これは第三のパターン。俺に対して喧嘩を売ってきているに違いない。

「おや、どうしました？　もしかして、美少女に声をかけられてビックリしちゃいました？」

しかし、その想像も一瞬にして霧散する。

そこにいたのは、段ボール箱に両足を突っ込んでいる小学生くらいの女。その時点でもかなり予想外だったのだが、そいつの容姿と格好を目にして思考はさらに混乱した。

腰の辺りまで伸びた金髪に、緋色の目。胸元に大きなリボンが付いたピンク色のノースリーブシャツと、似た色のスカート。水晶玉のような球が三つ付いた白いベルトを腰に巻き、前腕には白と薄紅色のボーダー柄のアームカバーという超派手な出で立ち。そして、先端にハートのシンボルが付いた赤い杖を握っている。

これはあれか、新手的な風俗の勧誘だろうか。最近はコスプレを専門とする店もあるらしいしな。それなら話は分かる。だが何故こんな場所に現れたのが理解できない。

「ちよつとちよつと、無視はひどくないですか無視は。こんな可愛い女の子が雨に濡れ

ながら助けを求めてるんですよ？ 喜んで助けますよね、普通」

関わったら面倒くさそうな雰囲気が出まくっていたので、とりあえず無言で立ち去る事を選択。だが、コスプレ女はそれを許さない。俺が相当溜まつてるとでも思ったのか、腕を掴んで立ち止まらせてきた。

「触んじやねえクソガキ。ぶっ飛ばすぞ」

舌打ちをしてからそう吐き捨て、容赦ない威圧感をぶつける。相手が一般人ならこれだけで二、三人は殺れるはずだが、やはりそいつは怯む様子すら見せない。

「はいはい、人間風情があんまり粹がらないでください」

「んだとコラ」

「どうやらあなたは他の人間よりは強いみたいですね。でも、私としてはそんなのどうでもいいです」

などとほざく金髪の女。喧嘩を売られているのは火を見るよりも明らか。いくら相

手が女子供だったとしても、不良がなめられたままでいいわけがない。

「だから、あんまりなめた口をきくんじゃねえ！」

そして、完璧に決まる渾身の右ストレート。

「おっと危ない。——反reflect転——」

「ぐほ——ッ!？」

予想もしない角度から飛んできた右手をモロに食らい、俺は呆気なく地面に倒れた。

「あらら、痛そう。でも人間如きが私に立てつこうだなんて、たぶん一万年くらい早いです」

「……………何が起きた」

「今のは私の魔法です。あなたの腕をちよつと操らせてもらいました」

意味が分からず眩くと、女は赤い杖を左右に振りながらそう言うってくる。



「魔法？ なに言ってるんだてめえ」

「言い忘れてました。実は私、異世界から来た魔法使いなんです。ついさっきこの世界に飛ばされてきて、行く宛ても無かったので拾ってくれそんな人間を探してたんです」

意味不明な言葉を聞きながら立ち上がり、そのふざけた金髪を睨みつける。

「訳わかんねえ事ばっか言ってるじゃねえぞコラ」

「信じられません？ じゃあ、もう一回かかってきてください」

「上等だよ。後悔すんじゃねえぞ——っ！」

一分後、俺は再び地に伏せていた。

「だから言ったじゃないですかあ。どうやったって私には勝てませんよーう」

「……てめえ、俺に何しやがった」

「さっきも言った通り、魔法であなたを操ったんです。でもあなた、やっぱり人間にして

は強いですね。その変な髪型のおかげですか？」

容赦なく襲いかかってくる自分の拳に成す術もなく、この女に指一本触れる事さえできなかつた。不良を始めてからタイマンで負けた事など一度も無いというのに。

「くそ……マジでナニモンだ」

「だーかーらー、異世界からやってきた魔法少女です。せつかく私が拾われる相手に選んであげたんですから、あなたはそれを光栄に思うべきですっ」

金髪の女は見下しながらそう言ってくる。ドヤ顔なのが超ムカつく。ぶっ飛ばしてやりたいのは山々だが、あいにく身体が言う事を聞いてくれない。

「バカかてめえは。んな冗談を信じられる訳ねえだろ」

「ん？ じゃあまた性懲りもなく幼気な魔法少女を襲っちゃいます？ 私はいいですよ。あなたが信じられるまで、何回だって返り討ちにしてあげますから」

自称・魔法少女は杖をこちらに向け、幼い顔に微笑みを浮かべる。さすがにこの状態

でまたあれを繰り返すのは気が引ける。さすれば言うべき言葉はひとつ。

「……………今は見逃しといてやるよ」

一生の中で一度でも言うか言わないか微妙なラインの台詞を、こんなタイミングで吐き捨てた。

「賢明な判断ですねー。お利口なお兄さんには特別に、こんな魔法もかけてあげましょう。——治癒——」

再び赤い杖を振るう金髪の女。すると、突如として俺の身体は薄緑色の光に包まれた。

「……………」

そして数秒後。その光が消えたのと同時に和らいでいく全身の痛み。腕も足も、最初から何も無かったかのように動かせるようになっていく。

「今のは回復魔法です。で、どうです？　これで私が超絶かわいい魔法少女だって認めてくださいました？　えへへっ」

新幹線並みの速度で進んで行く目の前の状況に、思考がまったく追いついてこない。しかし、この身に起こった事実は紛れもない現実。こんなふざけた出来事を信じられるほど電波な脳は持ち合わせてないが、絶対に受け入れられない、なんて事は口が裂けても言えなかった。

「訳が分からねえ……」

そもそも、こいつはなんでこんな人気ひとけの無い公園で段ボールに入ってるんだ。超どうでもいいけど、この女が足を突っ込んでる段ボールの側面には『魔法少女、拾ってください！』という文字が書かれた張り紙が貼ってある。意味が分からん。ふざけてんのかこのガキ。

「自己紹介がまだでした。私はノーライナⅡヘレンⅡローゼリア。長いのでノラ、と呼

んでください。あなたの名前はなんて言うんですか？」

「主藤、魁人」

「カイトさんですね。ではよろしくです、カイトさんっ」

ムカつく金髪が満足そうにうんうんと上下する。教える気など一ミリも無かったのに、考え事をしている時に訊ねられた所為でうっかり口を滑らせてしまった。

「おい、その自称・魔法少女」

「むー、なんですかそのカイトさんの髪型みたいに変な名前は。私はノラですっ！」

「うるせえ。っーかお前、選りに選ってなんで俺に声をかけやがった」

「？ なんですかその質問は。もしかしてカイトさんは悪い人間なんですか？」

頭に浮かんだ質問をぶつけると、自称・魔法少女は不思議そうな表情をしてそう答えた。

「あたりめえだ。俺は不良だぞ」

「フリーヨ？ それはなんです？ 人間の種族みたいなものですか？」

「俺みてえな奴をそう呼ぶんだよ。見た目で分かんたら」

「ふーん。でも、私からすれば人間なんてだいたい同じです。あなたを選んだのは直感でしかありません」

「てめえは俺に何を感じたんだ」

「それはヒミツです」

「なんでだよ」

「女の子は謎が多い方が可愛く見えるらしいですよ?」

「五年くらい年取ってから出直して来い」

「話せば話すほど訳が分からなくなっていく。そもそも女とかいう歳じゃねえだろうこいつ。」

「それはそうと、あなたは私を拾ってくれますか? 拾ってくれないんですか?」

「逆に訊くが、てめえを拾って何のメリットがある」

「そうですねえ……可愛い魔法少女がカイトさんのお家に増えますつ。てへつ」

「俺は優しくねえから言ってる。全力でいらねえ」

「ちなみに断った場合、その変な髪型をもっと変な風にしちゃいます」

「どんな脅しだ。つーかてめえはさつきから喧嘩売ってんのかコラ」

髪型リゼントを何度デイスれば気が済むんだこのクソガキ。他の奴なら五回くらい死んでんぞ。

「とにかく、カイトさんは私を拾うべきですつ。むしろその選択肢以外選べませんつ」

「なんでてめえが決めてんだよ。嫌に決まってるんだろ」

「なんでですーっ！　こんなに可愛い女の子がお願いしてるのにーっ！」

自分を可愛いと称している時点でうさん臭くなっているのが、こいつには分からないのだろうか。

「ま、そう言うこつた。もつと良い奴に拾われるようにせいぜい頑張れ」

そう言つて踵を返し、再び帰り道を歩き出す。変な奴に出会ってしまったが、まあいい。とりあえずこの一件は忘れよう。

そんな事を考えながら数歩進んだ時、進行方向に制服の集団がいる事に気づく。

「——よう主藤魁人。こんな所で奇遇だなア」

「……………」

「なんか独り言をブツブツ言ってたみてえだけど、頭大丈夫かお前。あ、そのだせえりーゼントは大丈夫じゃねえなア。ぶははっ」

「この間はうちの佐久間さんがずいぶん世話んなつたらしいじゃねえか」

「あの人も意地が悪くてよ、『主藤魁人をぶつ殺して来い。やらなきやてめえらを殺す』なんて言われたら、従わないわけにやあいかねえんだわ」

十メートルほど離れた位置にいる、不良の群れ。正確な数は分からないが、おそらく二十はくだらない。そいつらの手には金属バットやらスパナやらが握られていた。

「ちっ、めんどくせえ」

奴らは不良が多い事で有名な北高の連中。一週間くらい前にその頭をはつてる奴をボコボコにした記憶がある。奴らの口ぶりからして、復讐でもしに来たんだらう。



「てめえを病院送りにすりや気も晴れるらしいからよ。わりいが黙ってボコられてくれや」

「はっ、リーダーがやられたら次はイキった雑魚が集まってくんのかよ。クソに群がる蠅みてえだな」

学ランの上着を脱ぎ棄てながら挑発すると、群がついていた北高の不良共は一斉にこちらへ向かつて駆けてくる。俺はその場から動かず、奴らを迎え撃った。

「——しっ」

バットを振り下ろしてきた茶髪の男の顎を右アッパーで捉える。それから警棒で頭を狙ってきた奴の攻撃を屈んで躲し、ローキックでがら空きの足を払って転ばせた。

「おせえんだよ」

続いてメリケンサックを付けたモヒカンの拳を避け、顔面にカウンターを食らわせる。坊主頭でがたいの良い男は襟を掴んで投げ技を試みてきたが、それも逆に大外刈り

で投げ返し、鳩尾を踵で思いっ切り踏みつけてやった。

たったそれだけで倒れる不良共。どうやら雑魚という表現は間違つてなかつたらしい。

「なめんじゃねえッ！」

しかし、いくら相手が弱くても圧倒的な数には敵わないのがこの世の理。よそ見をしていたところを狙われ、首の後ろに一撃を食らつてしまう。

咄嗟に前方に転がって距離を取りながら受け身を取り、すぐに背後を振り返つたのだが。

「い、ッ!？」

マズった。予想外の一撃だった上に当たり所が悪かった。上手く呼吸ができず、立ち上がれない。視界もブレて意識が朦朧とし始める。ヤバい、このままじゃ――

「やれやれ、仕方ないですね。人間同士で戦っている意味はよく分かりませんが、せつか

く見つけた拾い主を傷つけられては困ります」

そう思っていた矢先、傍らから届く聞き覚えのある声。さつきの薄緑色の光がまた全身を包み込み、再び身体が動くようになった。

「まだいたのか、てめえ」

「お困りなようなので特別に手伝ってあげます。貸一ですよ、カイトさん。――魔力強化  
――」

いつの間にか近くには立っていたコスプレ女が杖を振ると、今度は右腕が赤い光に覆われた。

「んだよこれ」

「強化の魔法をかけてあげました。試しに一人、軽く殴って来てください」

自称・魔法少女はそう言い、ちよいちよいと不良の方を指差す。

「なにブツブツ言ってるんでめえっ！」

木刀を振り下ろしてきたロン毛の男。それを避けた後、言われた通りにそいつの腹を軽く殴る。

その瞬間、ロン毛の男はトラックに撥ねられたように後方へ吹き飛んで行った。途端に不良共の動きが止まり、公園内に静けさが戻ってくる。

「おお。こりやすげえ」

「当たり前です。私の魔法をなめないでください」

自分の右手を見つめながら呟いていると、自称・魔法少女は得意げに腕組みをしながらそう言った。不良共は突然の覚醒にビビったのか、吹き飛ばされたロン毛とこちらを交互に見ながら徐々に後ずさりをしている。イマイチ状況は掴めないが、これはチャンスだ。

「さーて、そろそろ本気を出すか。で、次は誰がぶつ飛ばされてえんだ？」

口元を歪ませ指の関節を鳴らしながら歩み寄って行くと、不良共の顔が一気に青ざめていく。

「う、嘘だろ。あいつ、まだ本気出してなかったのかよっ」

「あれが花ヶ崎高の番長、主藤魁人……」

「てかあんな化け物とやり合ってなんで生きてんだよ佐久間さんっ」

「や、やべえよっ。俺はまだ死にたくねえっ！」

いい反応だ。あと一押ししてところか。

「カイトさんカイトさん。今度はその場で空気をパンチしてみてください」

後ろにいる自称・魔法少女からそう言われ、また奴の言う通りにしてみる。

「どうか？」

「「や、柳いいいいいい——っ!?!」」

途端、俺を中心にして発生する謎の旋風。シャドーした拳から繰り出された見えない衝撃波的な何かの風圧で、ロン毛の男がさらに遠くへと吹っ飛んで行った。

「マジかよ。最強じゃねえか、俺」

「だから、私の魔法のおかげですよ。カイトさんが予想以上に強いのもありますけど」

アメコミのヒーローのような力を手にした気分していると、後ろからそんなツツコミを入られた。

しかし、これは使える。

「よし、動くなよてめえら。今から一人ずつ吹き飛ばしてやるからよ」

「無理だ！ あんな奴に勝てるわけねえ！」

「お、覚えてろよ主藤魁人！」

俺がまた正拳突きを放つ姿勢を見せると不良共は全員、武器を放り投げて逃げて行った。

そして再び閑散とする公園。そこに立つのは二つの影。数時間前に降り出した小雨

はまだ降り続けている。

「怪我をしなくてよかったですねー。ま、勝てたのはこの強くて可愛い魔法少女のおかげですがっ」

顔を向けると、ドヤ顔の金髪女がこちらを見て立っていた。意味は分からないが、ピッチを切り抜けられたのはこいつのおかげ。それは認めざるを得ない事実だった。

「おい、その魔法少女（仮）」

「だからノラですーっ。カイトさんはイジワルです」

ふくれっ面の金髪少女に、俺は再び問いかける。

「いったいななんだ、てめえは」

これだけは何度問うても腑に落ちない。認めざるを得ない不可思議な現実を突きつけられても、訊ねないわけにはいかなかった。

「もう、さつきから何度も言ってるじゃないですか」

全身ピンク色のコスプレ金髪女は呆れ顔を浮かべ、こちらを見ながら口を開く。  
これは何でもない日の、何でもない出来事。

「私はノラ。異世界から来た魔法使いですっ！」

その日、俺は捨てられていた魔法少女に出会った。

——捨て魔法少女とリーゼント——



## 第二話



それから数十分後。

「ここがカイトさんのお家ですかあ。うん、思っていたよりも綺麗で安心しましたっ」

リビングに入るなり、偉そうな感想を述べる自称・魔法少女。

あのまま公園に置いていく事もできたが、成り行きに任せて連れ帰って来てしまった。やっぱり置いてくればよかったと後悔したけれど、それも今では後の祭り。気まぐれで似合わない優しきを見た過去の自分をぶん殴ってやりたい。

「おい、ホームレス魔法少女」

「ノラです。なんです、カイトさん」

俺はソファに腰掛け、輝いた目で家の内装を見渡しているクソガキに声をかける。

「お前、なんで俺以外の人間に見えてねえんだよ」

「あれ？ やつぱり気づいてました？」

「鏡でも見て来い。そのナリで町ん中を歩いてて、誰も気づかねえはずがねえだろうが」

公園から家に到着するまで、周囲の人間は誰一人としてこいつに視線を送ってこなかった。最初は偶然かと思っていたが、コスプレ女が不良と一緒に歩いていたら誰だつて一瞥くらいはする。それすら無かった事実を鑑みて、こいつが俺以外に見えていないと推理するのは三流ミステリー作家が書いた小説の謎を解くくらい容易だった。

自称・魔法少女はえへへ、と微笑みながらカーペットに座り、俺に向かって口を開く。

「じゃあ私を拾ってくれたカイトさんには特別に、私の秘密を少しだけ教えちゃいます」  
「拾ってねえ。てめえが勝手にしてきただけだ。雨が上がったら出てけ」

「またまたあ。そんなこと言ってどうせ内心は『こんな可愛い女の子を拾えてラッキー、

グフフツ』とか思ってるんでしょーう？」

「前言撤回だ。今すぐ出てけ」

そしてもつと強まれ、雨。

「ヤですつ。私はこの家とカイトさんを気に入りましたので、拾われ先はここにしますつ」

「てめえはどんな権限を持ってそのうるせえ口をきいてやがる」

世界が自分を中心に回転してるとでも思ってるのかこいつ。

「ま、そんな事は置いておいてー」

「置いとくな。どっちかというところの方が俺にとつては重要なんだよ」

「カイトさんの言う通り、私はあなた以外の人間には見えてませんつ」

「シカトすんじゃないやねえよ。吹き飛ばされてえのか」

そう言うが、自称・魔法少女は気にする様子も見せずに言葉が続ける。

「簡単に言うそうですね、私はこの世界に住む人間の内、三人にしか姿を見せられないんです。本当はもっと複雑な理由があるんですけど、その辺は面倒くさいので割愛します」

「いやそこは説明しろよ」

「ぶつちやけカイトさんに言っても分からなそうだったので端折りました」

「今すぐ元の世界に帰ってしまえ」

「こいつは俺をなめてんだな。ぶつ飛ばしたい気持ちは逆るほどあるけれど、またあの手品みたいな力を使われたら勝ち目は無い。俺は鋼の意思でその衝動を抑える。」

「続けまーす。私は三人にしか姿を見せられませんが、見せられる相手は自由に選べるんです。だからあの公園で一人で雨に打たれながら、拾ってくれそうな人間を探してたんです」

ぐすん、と泣き真似をする自称・魔法少女。他の少女なら心を痛める場面かもしれないけれど、こいつがやると単純にウザさが増すだけなのが非常に残念だった。

「そこで俺が現れたってのか」

「そうなんですよっ！」

嬉しそうに言う自称・魔法少女。対する俺の口から出るのは深いため息。

「ちなみに三人以上の人間に見られるとどうなんだ？」

「死にます」

「マジか。そりややべえな」

「私じゃなく、私を見た人間が死にます」

「てめえは死神にでも再就職しやがれ」

どんだけ理不尽な設定を抱えてんだこの女。

「今のは冗談です。えへへ、カイトさんは意外と純粹なんですなー」

「うるせえ。真顔で冗談言うんじゃねえっつーの」

本気で勘違いすんだろが。あと笑って誤魔化すな。

「つまり、私が何を言いたいかというんですね」

自称・魔法少女はそう言って、カーペットから立ち上がる。

「カイトさん、私はあなたに拾われなければならないんですっ」

それから左手を腰に当て、人差し指を立てた右手をビシッとこちらへと向けてくる。しかし、その言葉には違和感しかない。いったいこいつは何様のつもりなんだ。

「どうでもいいが、てめえはこの世界に何をしに来やがった」

「それはまだ秘密です。とにかく、私はこの世界で生きていかなければならないんです。とりあえず雨風を防げる場所を提供していただけるなら、それでかまいません」

「そんならやっぱ俺じゃなくてもいいだろうが。もっと優しい奴に拾われて来い」

「ヤですっ！ 私はカイトさんに拾われるって決めたんですからっ！」

「なんでだよ」

「私がカイトさんに拾われたいって思ったからですっ」

「だからそれが意味分かんねえって言ってるだよ」

「カイトさんは分からなくてもいいんですっ！」

「ああ、もうめんどくせえな。いい加減に——」

「魁、人……………?」

「しやが、れ」

口早に並べられた御託にムカつき、無理やり追い出してやろうかと思った時、リビングの扉の方からビニール袋が落ちる音と聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「……………」

「……………?」

「……………(滝のような汗)」

そして、リビングに流れる静寂。自称・魔法少女は突然現れた人間を驚いた様子で見つめていた。声の主も、この世の終わりを眺めるような目をこちらに向けてくる。

「……おい、文無し魔法少女」

「ノラです。なんですかカイトさん」

「てめえ、さつき俺以外の人間には姿を見せねえって言ったよな」

「はい、言いました」

「じゃあ、あの人間にはてめえが見えてねえんだよな」

身体の動きを止めたまま、俺はそう問いかける。

「ごめんなさい。あまりにも突然だったので、ギリギリ透明になれませんでした。てへっ」

すると、そんなふざけた回答が帰って来る。その時点で俺は覚悟を決めた。

「か、魁人が……」

リビングの扉の前に立つ人間は、顔を俯けながら小さな声を零す。数秒の間を置き、



露わになるその驚愕の表情。そして。

「魁人が、いけない趣味に目覚めちゃってるーっ!？」

普段よりも早く帰宅した母親は、見知らぬ金髪少女を連れ込んだ息子俺に向かつて、そう言った。



それからすぐに緊急家族会議が開始され、俺は母親に対して身の潔白を全力で主張。しかし、母親は涙を流しながら『不良に育てちゃったのも反省してるのに、まさかこんな犯罪にまで手を出しちゃうなんて』という独り言を零すだけで、話を一ミリも聞いてはくれなかった。

この女が異世界から来た魔法使いだ、と言えるわけもなく、咄嗟に思いついた嘘で目の前にある状況を説明。だが、俺の語彙力では上手く現実を湾曲させる事ができず、それが余計に犯罪臭を漂わせてしまうという最悪の結果に。なんてこった。

仕方なく腹をくくって真実を話すと、これが予想外に好感触で最終的には母親の納得

を得てしまった。これまたなんてこった。

「そう。つまり、ノラちゃんはこの世界に迷い込んだ魔法使いさん、なのね？」

「そうなんです、お母さま。そんな私を拾ってくれたのがカイトさんだったんです」  
「拾ってねえつつつてんだろ」

食卓に座り、俺たちは緊急家族会議を続ける。隣には話の中心にいる自称・魔法少女。テーブルの向かい側には、奴をめずらしそうな表情で眺める母親が座っている。

どうでもいいが、こうして母親と面と向かって会話するのは数カ月ぶりだった。

「でも、本当に信じてくれるんですか？」

自称・魔法少女は不安げな顔で母親に問いかける。

「もちろんよ。お母さん、昔からそういう話は得意なの」

そして、朗らかな微笑みとともにそんな答えが返ってくる。理由は分からないが、ど

うやらこの親は見知らぬ金髪少女の話を本気で信じたらしい。

「じゃあ、私を拾ってくれますか？　しばらくの間、ここに泊まってもいいですか？」

「もちろんいいわよ。好きなだけ泊まって行きなさい」

「おい、ちよつと待て」

とんとん拍子で話を進ませる二人の間に俺は割って入る。魔法使いという設定を信じたのは百歩譲って見逃せるが、その話に関しては簡単に通していい案件ではない。

「どうしたの、魁人」

「どうしたの、じゃねえよ。むしろあんたがどうしたんだよ。マジでこんなガキを家に住ませる気か？」

「ダメなの？　だって、ノラちゃんはカイトが拾ってきたんでしょ？」

「ちげえよ。こいつが勝手にそうほざいてるだけだ」

「あー、もう。またカイトさんはイジワルするー」

そう言いながら頬を膨らませる自称・魔法少女。事実を言っているはずなのに意地悪

と称される意味が、俺の思考回路では理解できない。

「てめえは黙つてろ。で、どうなんだよ。念のために言つとくが、こいつはでまかせを吐いてて、俺たちを都合よく利用しようとしてんのかも知れねえんだぞ」

横にいるうるさいクソガキを黙らせてから、再び問う。すると母親は俺の顔と自称・魔法少女の顔を交互に見て、もう一度口を開いた。

「別にいいじゃない。本当に他の誰にも見えていないのなら、困る事なんて無いでしょう?」

「カイトさん。この女性は本当にカイトさんのお母さまなんですか? こんな良い親に育てられたのに、どうして息子はこんなにやさぐれてるんです?」

「だからてめえは喧嘩売つてんのかコラ」

母親の声を聞いて超失礼な言葉を口走る自称・魔法少女。今すぐぶつ飛ばしてやりたいが、そんな事より大事な話があるのでこんな奴に気を取られてる暇はない。

「それに、こーんな可愛い子が嘘なんて吐くはずないじゃない」

「ほらーっ、言つたでしょカイトさん！」

「だからてめえは黙つてろっ！」

母親の発言により、この女が勝者になりそうな方向へと話は進んでいく。

「じゃあゆつくりしていつてね、ノラちゃん」

「はいっ。よろしくお願いします、お母さまっ」

「ふふ、そんなに他人行儀じゃなくていいのよ。気軽にお母さん、って呼んでちょうだい」

微笑みを浮かべ続ける母親に、自称・魔法少女は勢いよく椅子から立ち上がって言った。

「はいっ——おかーさんっ！」

その声がリビングに響いた瞬間。今まで笑い顔を絶やさなかった母親は、急に顔を背

けて目の辺りを手で触り出す。

「? どうしたんですか、おかーさん」

「え? ああ、ちがうの。ちよつとゴミが入っちゃったみたい。あはは……ごめんね」

母親の言葉に、自称・魔法少女は首を傾げる。それが、誰に向けた『ごめんね』なのか分からないというように。

「……くだらねえ。勝手にしろ」

「あ、ちよつとカイトさん。どこに行くんですか」

そんな母親の姿を見ていられず、俺は立ち上がり、リビングを後にする。後ろから自称・魔法少女の声は聞こえてきたが、追って来る事はなかった。

それから外に出て、宛もなく街を歩き出す。雨上がりの夕暮れ。橙色と藍色が混じり合う空はこの心情を映し出しているようで、見つめていると無性に腹が立った。

「よーし、家まで競争するぞっ」

「あー、待ってよお兄ちゃんっ」

すれ違う、ランドセルを背負った兄妹。足を止めて振り返り、走り去って行く二つの背中に向かって唾を吐いた。それから胸の中を占拠するこの蟠りを言葉にする。

「くだらねえ」

ああ。本当に、くだらない。

## 第三話



しばらく暇を潰すため、まずは近所にある行きつけのバイクショップへと足を向けた。

「ちわつす、雅さん」

「ん？ おう、魁人か。相変わらず怠そうな顔してんな」

ガラス戸を開いてガレージに入り、バイクを点検していた整備士に声をかける。

頬がオイルで汚れ、指先からは獲物を捕まえた猛禽類のようにグリースが滴り落ちている。黒いタンクトップに、下は薄汚れた藍色のつなぎ。工具を握り締めるためにある太い腕は格闘家さながら。しかし、顔は爽やかなイケメンという男なら誰しも憧れるよ



うな要素を持ち合わせている若い男。名前は乾雅史。ガキの頃から俺の兄貴的な存在。

「バイクはどんな感じですか？」

「ああ、あれか。いちおう一通り見てみたが」

雅さんはガレージの奥を一瞥し、再びこちらを見て呆れるような表情を浮かべる。

「エンジンが結構やられててな。手は尽くしてみるが、元通りになるかは分からんぞ」  
「マジっすか」

「つーか魁人。お前、どんな乗り方をすりゃあんな壊れ方すんだよ」

今度は雅さんが訊ねてくる。呆れ顔を浮かべていた理由はそれか。

「西高の奴らとやりあった時に、ちよつと」

「ちよつとって何だよ。海の上でも走ってきたのか」

「いや、初めてバイクに乗りながら空を飛びました」

数日前の記憶を思い出そうとしたが、やめた。あれはもう二度と思い出したくない。

「E. ○かお前は」

「とにかく、色々あつたんすよ」

そう言うと、雅さんは足元の工具箱にスパナを放り投げてから立ち上がり、呆れ顔を浮かべてため息を吐いた。

「魁人。俺もお前くらい頃はかなりやんちゃしてたけどな、さすがに命かけたライドは頻繁にしなかつたぜ。バイクは壊れても俺が直す、お前の命までは保証できないんだぞ」

「……すんません」

「せつかく俺の愛車を譲つたんだ。バイクも自分も大事にしてくれや」

そう言って肩をぽん、と叩いてくる雅さん。確かに、数か月前まで自分のものだったバイクを譲り渡した途端、何度も瀕死の状態でガレージに送られてくるのは元ライダーとして見てられないだろう。反省しなければとは思うが、たぶん俺はまたこの人のため

息を吐かせる。

「で、どうする。今んところの状態を見ていくか?」

「ああ、いや別にいいつす。それと、雅さん」

「ん?」

「あいつはまだ帰ってないんすか?」

ここに来た本当の目的を訊ねると、雅さんは何か納得したような表情を浮かべた。

「ははーん。魁人、お前バイクに託けてあいつに会いに来たのか。見た目はバリバリのヤンキーのくせに、そういうところは昔から変わんないな」

「ち、違いますよ。ただ、なんとなく気になっただけで」

「分かってる分かっている皆まで言うな。可愛い妹がお前みたいなヤンキーに取られるのはちよつとムカつくが、兄貴としてしっかり応援してやるからよ」

白い歯を見せてサムズアップしてくる雅さん。残念ながらこの人は何も分かってない。

「だから違いますって」

「まーまー、そう照れなさんな。あんない女はなかなかいないぜ？ 美人だし、家事もできるし、性格も良いし、なんと言っても超兄思いっ」

この人は最後の要素をどうしても強調したかったのだろう。

「胸はまだ丘みたいなものだが、これからすげえ事になるから早めに捕まえておけよ？」  
「どんだけ妹の観察に余念がないんすか」

この色男に弱点を見出すとすれば、それは重度のシスコン以外他に無い。十個近く歳が離れてる妹を過保護と呼べるほどに愛しているイケメン整備士。超モテるのになかなか結婚相手が見つからないのはその所為だと、この人はおそらく気づいていない。

「そういやさつき、『友達と遊んでくるから少し遅れる』みたいなメールが来てたな」

「そうっすか」

「あからさまに萎えた顔しやがって。まあいいけどよ」

そんな表情を浮かべていたらしい。顔に出てしまう癖は高二になっても治らない。

「んじや、帰ります。バイクはお願いします、雅さん」

「おう、気をつけてな。また遊びに来い」

爽やかな微笑みを浮かべる雅さんに頭を下げてから振り返り、ガラス戸を開く。

「魁人」

外へ出る直前に名前を呼ばれ、再び後ろを振り返る。

「あいつは大丈夫だよ。お前とあのバイクのおかげでな。ありがとよ」

その言葉を聞いてから、何も言わずにガレージを後にした。



行く宛てを失ったので、今度は駅前ゲーセンへと足を向けた。特に用があつた訳でもない。そもそも、ここはそういう奴が来る場所だから。

「ん？」

暇つぶしに格ゲーでもやるかと思ひながら店の奥に進んで行くと、道中のクレーンゲームコーナーの辺りで数人の学生が屯っているのが目に入る。こつちを見ているわけでもなかったので、無視して通り抜けようとしたのだが。

『——やめてください。私は急いでいるんです！』

『またまたあ、さつきは暇そうにしてたじゃん？』

『ちよつと俺たちに付き合ってくれればいいからさあ。カラオケとか好きつしよ？』

騒がしい店内の音をくぐり抜けて聞こえてくる、その声。立ち止まり、クレーンゲームが置かれた方に顔を向けた。

「だから、私にはあなたたちと遊びに行く暇はないんですっ！」

「ホントに少しいんだって、金は全部俺たちが奢ってあげるから」

俺が通う高校の制服を着た女子が、他校の男二人組に声をかけられている。どう見ても仲が良さそうな関係には見えない。百人に訊いたら百人がナンパされている、と答えるだろう。

だが別に喧嘩を売られてるわけでもないの、見なかった事にすれば厄介事に巻き込まれないで済む。一日に二回も喧嘩をするのはさすがに嫌だ。ぶっちゃけ面倒くさい。

「嫌っ、離してっ！」

「……………」

しかし、これも何かの巡り合わせなのかもしれない。

「ほら、早く行こうよ」

「ホントにちよつとだけでいいからさア」

「だ、誰かつ、助け——」

「おい、ちよつと待てや」

ナンパされた女子を連れて行く男の手首を掴み、その腕を離させる。必然、向けられる六つの目。四つは敵意に満ち、その他の二つには驚きの色が伺えた。

「んだてめえ」

「離せよ……つて」

「? どうした。どつかで会った事あったか」

チャライい二人組は俺の顔を見た途端、口を開けたまま固まった。その表情からしてこいつらは俺を知っているようだが、生憎こんなモブい奴らを覚えてられるほど記憶力はよくない。

「お、お前は花ヶ崎校の主藤魁人っ!」

「この街で不良のトップランカーに数えられる、あの狂犬のリーゼント……ッ!」



なんだそのダサイ二つ名。俺って他校の奴らにそんな風に呼ばれてんの？

「わりいが、この女に用があんのは俺の方なんだわ」

「え？ そうなんですか？」

俺の後ろに隠れた女子が何か言ってるが、無視して話を進める。

「こいつ、俺が狙ってた人形を先に取りやがったからよ、後でツラ貸してもらおうつもりだったんだ。それを邪魔しようってんなら、先にてめえらから片づけてもいいんだぜ？」

手首を掴んだ手に力を込める。こんなマツチ棒みたいな腕なら簡単に折ってやれる。

「痛つ……わ、分かった。俺らはそいつに何もしないっ」

「そりゃよかった。ならとつとと失せろ」

そう言つて腕を離すと、チャラ男どもは早足にゲーセンを出て行った。喧嘩っ早い奴

らじゃなくてよかったぜ。いずれにせよ瞬殺できた事には変わらんが。

また成り行きで人助けみたいなの真似をしてしまった。こんなの柄じゃねえのに。そう思いながら、再び格ゲーが置かれた方へと足を向けた。

「あいつ！」

しかし、予想通り声をかけられて立ち止まる。俺が本当に面倒くさいと思っていたのはナンパ相手を散らす事ではなく、助けた相手から話しかけられる事だった。

「本当に困っていたので助かりました。その学ラン、うちの生徒ですよ。先輩ですか？」

明るい茶髪を白いリボンでツインテールにしているその女。背は小さく、顔も幼い。見た目で判断する限り、入学したばかりの一年だろう。確かに、あのチャラ男どもが声をかけたくなるのも頷けるくらい整った容姿をしている。

「そうだよ。じゃあな」

「あ、待つてください狂犬先輩っ」

身を翻してその場を去ろうとするが、茶髪の女子は俺の進行方向に先回りしてくる。ああ、うぜえ。だから嫌だったんだ。つーかなんだ狂犬先輩って。恥ずかしいからやめろ。

「んだよ。まだ用があんのか？」

「はい。狂犬先輩、この人形を先に取ったから私に用があるって言ってましたよね。もしかして、先輩もこれが欲しかったんですか？」

茶髪の女子は腕に抱えたバカでかい人形を差し出してくる。頭にあんこの塊みたいな物体を載せたトカゲっぽい生物のぬいぐるみ。咄嗟に吐いたでまかせだったが、俺がこんなものを取ろうとしていたと本気で思っているのだろうか。

「あんなの嘘に決まってんだろ。んなもん興味ねえよ」

「そうなんですかあ、残念。私と弟以外にもこの『おはぎサラマンダー』が好きな人がいると思っただのに」

肩を落とす茶髪の子。どうやらこの人形の名はおはぎサラマンダーと言うらしい。狂犬のリーゼントと肩を並べるくらいだせえ。その名前を付けた奴らはどっちも階段で転べ。

「そりや悪かつたな」

「ああもう、だから待っててくださいって狂犬先輩っ」

「なんだよ」

そしてそのダサイ呼び方をやめろ、と続けようとしたのだが、その言葉に声が被せられる。

「何か私にお礼をさせてください」

「いらねえから気にすんな」

「いけません。お願いですからさせてください」

「なんでだよ。俺がいらねえって言ってんだから諦めろ」

「先輩に何かを渡したいのではなく、お礼をしなきゃ私の気が治まらないんです」

「言っちゃまったなお前。人として絶対に言っちゃいけねえ事をよお」

この女、なかなかいい度胸してんじやねえか。

「この人形は弟にあげるので渡せませんが、その代わりにこれを進呈します」

茶髪女子は制服のポケットから何かを取り出し、それを俺の手に握らせた。

「これはおはぎサラマンダーの限定キーホルダーです。大事にしてくださいね?」

そう言って微笑む茶髪の女子。それから何かを思い出すような顔をしてスカートのポケットから携帯を取り出し、そのディスプレイを見つめた。

「あ、いけないっ。もう行かないと面会時間が終わっちゃうっ!」

そして、慌てながらぺこりと頭を下げてくる。

「助けてくれてありがとうございます。今度学校で会ったら声をかけますね？」

茶髪の女子はゲーセンを駆け足で出て行く。その後ろ姿を見送り、掌の上に置かれたキーホルダーに目を落とす。

「……似合うかよ」

こんなもんをもらって喜ぶ奴の顔が見てみたい。そう思いながら、クレイゲームの透明なパネルに映る自分の顔を見つめた。

口許が少し歪んでいるように見えたのは、たぶん気の所為だ。

## 第四話



いつの間にか日が暮れ、町には夜の帳が落ちた。

本当にする事が無くなったので、仕方なく家路に着いた。その足取りがラクーンシテイを徘徊するゾンビのように遅かったのは言うまでもない。

何も言わずに家の中に入る。『ただいま』とか『行ってきます』という言葉を最後に吐いたのは何年前だろうか。少なくともこの髪型にしてからは一度も口にしていない。そもそも、両親とは会話さえしないのだから。

「……………ん？」

ローファーを脱いだところで、リビングから何やら騒がしい声が聞こえてくる。何気

なく庭を通ってきたが、駐車場には家を出て行く時には無かった車が停まっていた気がする。足元に目をやると、ピンク色のドレスシューズの隣に見慣れた革靴が並べられていた。

「——おとーさんおとーさんっ。見てください、おかーさんっつてばナイフを使って果実を動物の形に切る事ができるんですよっ。まるで魔法使いみたいですよっ！」

「はは、ノラちゃんは元気だねえ」

「もうノラちゃんったら、林檎を切つてあげただけなのにそんなにはしゃいじゃつて」  
「だつてだつてっ、こんなの私がいた世界の料理人じゃ絶対にできませんよっ!？」

リビングに入った途端、目に飛び込んできたのは人生で初めて見る我が家の光景。いや、ちがうな。ここは俺の家じゃない。間違えて別の家に入ってしまったんだろう。

「あ、カイトさんおかえりなさいっ！」

しかし、その幻想は俺の存在に気づいた自称・魔法少女に一瞬で打ち砕かれた。



「おお。魁人、帰ったのか。ノラちゃんも待つていたんだぞ」

「そうですよ。急に出て行つたので心配しました。でもその間におとーさんとおかーさんと仲良くなれたのでよしとします」

「おかえり、魁人。夜ご飯、もう少しでできるから待つててね」

出迎えたのは、俺が外に出ている最中に仕事から帰宅したであろう親父と見覚えの無い金髪の少女、それとエプロン姿の母親。どこかの誰かからすればなんら変哲の無い一家団欒の光景に見えるかもしれない。だが、十七年間この家に住む人間俺からすればどう考えても異質な状況としか思えなかった。

「おい、その魔法少女（笑）」

「ノラです。どうしました、相変わらず変な髪型のカイトさん」

「興味ねえけど訊いてやる。てめえ、何しれつとこの家に溶け込んでやがる」

「どうやら私は、この家の住人に好かれる魔法が使えるみたいなんです」

「安心しろ。ここの住人の一人はまだその魔法にかかつてねえ」

質問にドヤ顔で答える自称・魔法少女。どうでもいいが、服装がさつきよりも軽装に

なっている。デカイリボンの装飾や杖はどこかに消えていた。

「つーかなんでまだいんだよ。もう雨は止んでんぞ。早く出てけ」

「こら、魁人。せっかく我が家に来てくれた客人にそんな言い方は失礼だろう」

「そうよ、魁人。ノラちゃんは今日から家に住むんだから、優しくしてあげなさい」

「そうですよ、カイトさん。カイトさんはもつと私に優しくするべきですつ」

「この家にはバカしかいねえのか」

当然のようにこの家の風景になりつつあった自称・魔法少女に退却命令を下したのだが、頭のイカれた両親から横槍を入れられる。両親の声以外に調子に乗った女の声が聞こえた気がしたが、それはおそらく幻聴だろう。

「それに、ノラちゃんは魁人が連れてきたんだろう？ ならちゃんと責任を取りなさい」

「何の責任だよ。俺にはこいつを今すぐ外に追い出す責任しか思いつかねえよ」

傍らに立つ自称・魔法少女の頭を撫でながら親父はそう言ってくる。野良猫を拾ってきた子どもよりもその猫を愛でてしまうバカ親の構図が、俺の前には広がっていた。

「ノラちゃんは偉いのよお？ お洗濯もお掃除もやってくれるし、夜ご飯のお手伝いだってできるんだからあ」

訂正、もう一人バカな母親を追加。

「私はこの家に住むのですから、それくらいして当然ですつ。おとーさんとおかーさんのお手伝いをしないで外をほっつき歩いてるどこかのやんきーさんとは違いますつ！」

「よし分かった。今度は俺の手伝いをしろ。てめえは元の世界までお遣いに行つてこい」

そしてもう二度と帰つてくんじゃねえ。

「てかバカ親父。どことも知らねえガキになんつー呼び方させてやがる」

「ん？ ノラちゃんはうちに住むんだろ？ ならお父さんと呼ぶのが普通じゃないのか？」

こいつの鞆丸から生を受けた事実を、全力で葬り去りたい衝動に駆られた。

「そうですよ。私がおとーさんと呼ぶのは当たり前です。ねー？ おとーさん」

「ねー？」

「頼むから今すぐ生まれ変わって来いてめえら」

こいつらの馬鹿さ加減はきつと、何度輪廻を繰り返してもシャツに付いたカレーうどんの染みのように残り続けているだろう。

「それに、私はもう三人に姿を見せちゃったのでどこにも行けないんです」

「そうだよ。てめえ、それが分かかっておいてなんでこのクソ親父にまで見せた」

家を出る前にした会話を思い出して言う。突然現れた母親に見られるのは仕方なかったとしても、さすがに二度目は無い。

「おとーさんが帰って来る前におかーさんから聞いていたんです。この主藤家は三人家族だつて。だからちようどいいかな、つて思つて」

「全然ちようどよくねえっつーの」

「とにかく、選んでしまったものは仕方ありません。私はもうここに住むしかないんですっ」

腕組みをする自称・魔法少女。こいつが嘘を吐いている可能性はあるが、実際に魔法を使える事を知ってしまっているの、迂闊にそう捉えるのは軽率かもしれない。

「ほら、お父さんが高い高いしてあげるよ、ノラちゃん」

「わーいっ。おとーさんは力持ちですっ」

そもそも、なんでこの両親はこんな見知らぬ女を住まわせる事を許した？ 頭が悪いのは知っていたが、さすがに異世界から来た魔法使い、なんて事をほざく少女を容易く受け入れるほどバカじゃないのは理解してる。そこには何か、他の理由があるんじゃないのか？ 例えば、魔法であの女に操られている、とか。あり得るな。

「お待ちせー。夜ご飯できたわよ」

謎のスキンシップを取っているバカ親父と自称・魔法少女を眺めながら考え事をして  
いると、キツチンの方から母親がお盆を持ってくる。

そして、その料理を見てすべてを察した。

そうか。こいつらは——やっぱり。

「良い匂いですねえ。お腹が空いてきちやいましたっ。さ、カイトさんも食べましょ  
うっ」

「……………ぎげんな」

「え？」

「——ふぎげんじゃねえこのクソババアツ！」

俺は足元にあったゴミ箱を蹴り上げ、そう叫んだ。

それからリビングに静寂が落ちる。突然の激情に、誰も声を出せなかつたんだろう。

「か、魁人？ どうしたの。どうしてそんなに怒ってるの？」

「そ、そうだ、どうしたんだ魁人。ノラちゃんの前で、こんな」

間を置いてから焦った様子で言ってくる母親と親父。ああ、ようやくいつも通りの空気がだ。

くそマズい、溝屑みてえな腐った家族の空気だ。

「……カイトさん？」

黙って母親を睨む俺に、自称・魔法少女は声をかけてくる。心配するような声、ではない。ただ俺の行動を訝しむ声音。こいつが今の激情を理解できないのは分かる。

けれど、この両親が分からないはずは無い。

「くたばれ、クソ親ども」

リビングから出るとき、視界の隅で捉えた母親は俯いて手元にある料理を見つめていた。その艶やかなオムライスはきつと、誰かと重ねられた少女に食べられるために作られたんだろう。それが、本当に気に食わない。

二階にある自分の部屋に入り、学ランも脱がないままベッドに転がった。それから目

を瞑り、苛立ちに任せて独り言を天井に向かって吐く。

「くそつたれ」

だから嫌なんだ、こんな家。



## 第五話



これは、夢だと分かる夢。誰だつて一度くらいはそんなものを見た事があると思う。俺が見ているこの映像も、たぶん目覚めればすぐに記憶から消えて行く。だからこそ、カウチに座りながら見る映画のように、この夢を冷静に眺められたんだろう。

見覚えのある公園で、幼い頃の俺は誰かと遊んでいた。

『お兄、ちゃん……………っ』

誰かに後ろから呼ばれ、振り返る。そこには一人の女の子が立っていた。その子は両手を目の下に付けて泣いている。その理由が分かる訳もなく、夢の中の俺は泣いている女の子に近づいた。

『どうしたの』

問いかけに答えはない。餌を取りに行った親猫を待つ軒下の子猫みたいに、女の子は声を上げながら泣き続けていた。しゃがみ込み、背の小さいその女の子と目線を合わせる。それからその頭を優しく撫でた。

『……………たの？』

しばらくして、女の子が涙混じりの声で何かを問いかけてくる。だが、よく聞き取れない。夢の中の俺はその子の頭に手を置いたまま、何と言ったのかを問う。

すると泣いていた女の子は顔を上げ、その泣き顔を露わにしてもう一度口を開いた。

『お兄ちゃん。凜以外の妹ができたの？』



「——起きてくださーいっ!」

「ぐふおっ!」

腹の上に謎の衝撃を受け、文字どおり眠っていた意識は強制的に覚醒した。

カーテンが開けっ放しになっている窓からは、明るい日差しが部屋の中へと差し込んでいる。耳を澄ますと聞こえてくる、鳥の囀りや電車の遠鳴り。

そして、身体を揺さぶってくる何かお腹の上にいる。

「もう、いつまで寝ているんですかカイトさん。これでも起きないのであれば、あなたの変な髪型を私の一存でもっと奇抜なものにしてしまいますよ?」

「……朝っぱらからぶっ飛ばされてえのか、てめえは」

「あ、起きました。おはよーございます、カイトさん」

意識が徐々に鮮明になり、腹の上にいる何かをようやく認識した。そこにいるのは昨日、この家に迷い込んだ自称・魔法少女、だった気がする。つーかなんだこの起こし方。こいつがいた世界には寝てる奴にジャンピングプレスをする風習でもあんのか。

何か嫌な夢を見ていた気がするが、それもこの女のおかげで忘れてしまった。しか

し、俺としてはこの現実の方が夢であってほしかった。

「てめえ、なに勝手に俺の部屋に入ってきて来てやがる」

「おかーさんが家を出て行くとき『あんまり起きるのが遅かったら起こしてあげてね?』  
と言っていたからです。私は偉いのでちゃんと言う通りにしました、えっへん」

「あのクソババア……っ」

その光景がありありと目に浮かぶようだ。

「というわけで早く起きてください。私、お腹が空きました」

「知らねえよ。つてか、いま何時だ?」

「私がこの部屋に来る前に見た時は、短い針は9を、長い針は12を指していました」  
「……………つて事は、九時か?」

その言葉が確かならそうなる。腹の上に正座してる自称・魔法使いの所為で身動きが  
できないため、時間を確認する事すらままならない。早くどけ。

「カイトさんはいつもこんなに寝るんですか？ あ。寝ると言えば昨日はおかーさんと

一緒に寝させてもらいましたっ、えへへ」

「てめえが誰と寝たのかは米粒ほど興味ねえが、俺はそんなに眠らねえよ」

「ふーむ。だとすると、もしかしたら魔法の副作用かも知れませんかー」

「副作用？ なんだそりゃ」

問いかけると、腹の上に載った自称・魔法少女は右手の人差し指を立てて話し始める。

「言葉通りの意味です。たぶんですけど、この世界の人間という種族に魔法を使うと、カイトさんのように疲労が溜まってしまふんだと思います。簡単に言えば、新しい靴に慣れず靴擦れを起こしてしまつた、みたいな感じです」

「予想以上に分かりやすくてムカつく」

そんな分析ができれば普段から他人の心を読んで話しやがれ。

「人間に対して魔法がどんな風に作用するのか分からなかつたので、少し安心しました」  
「待て。つまりてめえは俺の身体を実験台としてその訳の分からねえ力を使ったのか

「？」

「そうですよ？ 私の姿を最初に見せたのはカイトさんだったんですし」

なに言ってるんだろカイトさん、バカなのかな？ と無駄に整った顔に書いてある。もし逆の立場だったなら、眠ってるこいつの腹に全力で拳をめり込ませただろう。

「ま、そんなどうでもいい事は置いておいて、早く朝ご飯を食べましょう」

「どうでもよくねえ。つーか、なんでまだ食ってねえんだよ」

「昨晩はカイトさんと食べられなかったので、朝ご飯くらいは一緒に食べてあげようと思いました。まったく、カイトさんはこんなに優しい魔法少女を拾えた事を感謝するべきです」

「んな事を感じするくらいなら今すぐ俺を殺してくれと祈った方がマシだ」

どの辺に感謝する部分があるのか。別に知りたくもないが。

「とにかく、早く起きて行きますよ」

「わーっつたよ。先に下りて待っつけ」

「ふふー、おかーさんの朝ご飯、楽しみですねえ」

そう言つて俺の腹の上から飛び降り、パタパタと部屋の外へ出て行く自称・魔法少女。その背中を見送つてから、ようやく自由になった上半身を起こした。

「……………なんだ、この朝」

目覚めたはずなのに、まだ夢の中にいるみてえだ。



学校に向かう準備を整えてリビングへと向かう。遅刻は確定だが、焦る事は無い。一分遅れても遅刻になるんなら何時間遅れても遅刻は遅刻。罪の重さは変わらない。

「むー、遅いですよカイトさんっ。何にそんな時間を取られたんですか」

「うるせえな。起きてやったんだから準備くらいゆつくりさせろ」

リビングに足を踏み入れると、食卓の椅子に座っていたふくれっ面の自称・魔法少女は机をバンバン叩きながら文句を言ってきた。確かに待たせた事は認めよう。しかし、謝るつもりは毛頭ない。

「もしかして髪ですか。その変な髪型を作るために私を待たせたんですか？」

「そのとおりだが、てめえにそう言われると喧嘩を売られてる気しかしねえんだよ」

俺の逆鱗に触れる言葉しか吐かないこいつは、マジでどうにかしないとイケない。

「それはそうと、おかーさんは私の分とカイトさんの分の朝ご飯を置いていきました」

自称・魔法少女はそう言って食卓を指差す。ひとつは目玉焼きとサラダ、それに紅鮭というスタンダードな朝食のメニュー。そしてもうひとつは『かいと』という文字がケチャップで描かれたオムライス。どちらがどちらのものであるかは一目見れば分かるだろう。しかし。

「こっちが私の朝ご飯です」



「待てコラ泥棒猫。てめえの目はどこについてやがる」

クソガキは迷わずオムライスに手を伸ばす。何を考えているのかはだいたい想像できた。

「お、おかーさんが言ってたんです。このオムライスが私の朝ご飯だつて」「おい、明らかな嘘を吐くならせめてこつちを見て喋りやがれ」

そつちには観葉植物しかねえよ。

「嘘じゃありません。どこに証拠があるんですか?」

「どつからどう見ても俺の名前が書いてあんだろうが」

「……………私はこの世界の文字を知りませんでしたので、ノラと書いてあるんだと思います」

「いま考えたよな。てめえはここに書かれてるのが俺の名前だつて知ってたんだよな」

ダラダラと汗をかき始める自称・魔法少女。俺が来るまでこのオムライスを手に入れ

るためにいろいろと考えたんだろうが、そんな安い嘘は通用しない。残念だったな。

「とにかく！ このオムライスは私のものですつ。カイトさんにはもつたいないですつ  
！」

自称・魔法少女はオムライスが載った皿を大事そうに抱えながら言ってくる。こいつの執着振りからして、昨日の夜に食ったオムライスが相当気に入ったらしい。ぶつちやけ俺としてはどつちでもいいんだが、ただでくれてやるのは何となく惜しい気がする。なので、ちよつとかまをかけてやる事にした。

「そうだ。なら良い事を教えてやるよ」

「良い事？ なんですか」

首を傾げて訊いてくる自称・魔法少女に、俺は咄嗟に思いついたでまかせを吐く。

「この世界にはな、他人の名前が書いてあるオムライスを食うとしばらくの間、その名前の奴と同じ姿になつちまうっていう伝説があんだよ」

「な、なんですとっ!？」

思った以上に簡単に引つかかった。どうやらファンタジックな話はいつに効くらしい。

「どうする? それでも食うか?」

「ぐぬぬっ。この世界にもそんな呪いがあつただなんて。確かにおかーさんが作ったオムライスは悪魔的においしかったですが………まさか、その魔力の所為でしょうか?」

「ま、てめえが俺と同じ見た目になつてもいいってんなら食つてもいいけどな」

ここまで言われたらさすがに渡してくるだろう。そう思っていると、自称・魔法少女は何かを決意したかのような目つきでこちらを見てきた。

「……………分かりました。それでも私はこのオムライスを食べます。しばらく目つきが悪くなつて髪型が変になるくらいなら、なんとか耐えられますっ」

「てめえは一生オムライスの呪いにかかり続けてろ」

こいつに悪気は無かったんだろうが、とりあえず一発ぶん殴ってやりたい。

「私は決めました。見た目がやんキーになろうとも、私はこのオムライスを食べますっ  
！」

意志を固めるように、真剣な目で語る自称・魔法少女。どんだけオムライスが食いてえんだよこいつ。

「……………はあ。しやあねえな」

「あつ、何するんですかカイトさんっ」

「てめえは黙ってろ。ったく、朝から騒がしいたらありやしねえ」

こんな事をしていたらいつまで経っても家を出られない。オムライスを死守する自称・魔法少女の手からその皿を奪い、スプーンで卵の上に書かれていた文字を消す。それから机の上に置かれていたケチャップで新しい名前を書き直した。

「な、なんですか。徐に私の名前を書いたりして。もしかして、カイトさんは魔法少女になりたいたんですかっ?」

「二千回くらい生まれ変わってもなりたかねえよ、んなもん」

オムライスにノラという文字を書いていると自称・魔法少女は引き攣った顔でそう言ってくる。ていうかやつば文字読めんじゃねえか。

こいつの望み通りにしてやるのは非常に腹立たしいが、これ以上こんな不毛な争いをしている暇は無い。だから、俺はそうしてやった。

「ほらよ」

「え? いいんですか?」

「ああ。そんなに食いてえなら勝手に食え」

皿を返してからそう言うと、自称・魔法少女は明るい笑顔を浮かべた。

「わーいっ! 私、カイトさんの事をちよつと見直しましたっ。ただの変な髪型のやんきーさんじゃなかったんですねっ!」

「前言撤回だ。返せ」

「ヤですよーうつ。えへへ、いただきまーすっ」

そう言つてオムライスを美味そうに食い始める自称・魔法少女。その姿を見ながら、一度ため息を吐く。

「……らしくねえ」

「うん？ 何か言いました、カイトさん？」

「なんでもねえよ。いいから黙って食え」

たぶん、あんな夢を見た所為だ。

## 第六話



朝食を終え、食器を流しにぶっこんだ後、俺は部屋に戻るためにリビングから出て行くとした。だがそう簡単に事が運ぶわけもなく、この背中をマークしていたであろう女の声がすぐさま飛んでくる。

「カイトさんカイトさんっ、今日は何をするんですか？」

「あ？ 学校に行くに決まってんだろ」

ぶっきらぼうに答えると、自称・魔法少女は首を傾げる。

「がっこう……学び舎の事ですか？」

「まあ、そういう言い方もあるかもな」

「カイトさんはまだ学生だったんですね。もう、そうならそうだって言つてくださいよ」  
「昨日から学ランしか着てなかっただろうが。逆にてめえは俺をなんだと思つてたんだ」

「ただの野良やんきーさんかと思つてました」

「表に出ろエセ魔法使い。今日のはてめえに勝てる気がする」

朝っぱらからゴリ押しされる喧嘩のバーゲンセール。上等だよ。まとめて百ダースぐらい爆買いしてやる。

「それはそうと、カイトさんはいま何歳なんですか？」

しかし、その購買意欲はさらりとスルーされた。

「十七だよ」

「なんと。この世界ではそんなに大きくなつてもまだ学び舎に通うのですね」

「てめえの基準が分からねえが、この世界じゃそれが普通だ」



俺がそう言うのと、自称・魔法少女は何かを納得したような表情を浮かべる。

「なるほど。人間は魔法が使えない分、成長してからも知能を発達させる事を選んだ、という事ですか。興味深いですねー」

「なにブツブツ言ってるんだ。気持ちわりいな」

「む、失礼な。私は観光大使として、この世界の事をもっと知ろうとしているだけです」  
「観光って言ったな。てめえ、もしかしなくてもこの世界に来たのはただの観光なのか」  
「よ」

それならこのちんちくりんの観光大使さまには早々にお帰りいただくかなければ。

「そんなの言葉の綾に決まってるじゃないですかあ。カイトさんはお馬鹿さんですねー、あははっ」

土産は俺の右手が名産のたんこぶでいいだろうか。特大のを三つくらいくれてやる。

「どうでもいいが、てめえは幾つなんだよ」

「お？ カイトさんが私に興味を持ってくれました。そんなに訊きたいですか？ カイトさんもそろそろ謎の魔法少女の秘密が知りたくなっちゃいました？」

「やっぱ答えなくていい。てめえは一生黙ってる」

「なんでですかーっ!? カイトさんが訊いてきたのにーっ!」

気まぐれで質問してみればこの有り様。だんだんこいつの性格が分かってきた気がする。

「仕方ありません。カイトさんがそんなにこの異世界から来た天才美少女・魔法使いの事を知りたいのであれば、特別にちよっとだけ教えてあげましょう」

どこにそんな奴がいるんだ？ 俺の目がおかしくなっちゃったのだろうか。

「私は十二歳です。ちなみに私がいた世界だと、学び舎に通うのは十歳になるまでと決まっています。それ以降はそれぞれの仕事に就く事になりますねー」

「ふーん。じゃあお前も働いてたんだな」

「あ……………それは、ヒミツです」

なんだ今の微妙な間と意味深な答えは。こいつは今、話とともに目も逸らした。それだけは訊かれたくなかったです、と幼い顔に書いてある気がする。

「なんでだよ。知りたくもねえけど教えてろ」

「だ、ダメです。それだけは言えません」

「自分から教えるとか言っつといて結局それかよ。どうでもいいけどよ」

教えるとか言っつたり急に教えないとかほざいたり。この自称・魔法少女は何を考えてるかよく分からん。分かりたくもないが。

「……………んだよ。なに見てんだてめえ」

すると、口を閉じたまま緋色の目に見つめられる。普段なら誰かにガンを付けられたら喧嘩を売られてると思ってしまうが、こいつにそうされると何かを見定められているような気がして、何故か落ち着かない気持ちになった。

「私、カイトさんのそういうところ、好きかもしれないです」

「あ？　どんなところだよ」

「教えません。言ったらカイトさんは変わってしまうかもしれませんから」

口を開くと、自称・魔法少女はそんな意味の分からない事を言い出した。

「とにかくつ、カイトさんがお出かけするのであれば私もついて行きますっ！」

「却下」

「なんでですかーっ!？」

気を取り直すようにドヤ顔で宣言されたが、俺はそれを即座に一蹴。残念だったな。てめえの思い通りにはならねえ。

「連れて行くわけねえだろ。てめえは一日中ここで大人しくしてろ」

「嫌ですよっ。私もカイトさんが通う学び舎に行きたいですっ」

しかし、自称・魔法少女は食い下がってくる。こんな奴が一緒に来たらどんな目になるか。俺の想像力では世紀末クラスの酷さになる未来しか思い浮かべられない。

「いいからついてくんな。めんどくせえ」

「ダメですつ、嫌だと言っても私はついて行きますつ。しがみついても行きますつ！」

「しつげえなてめえは。ダメだつってんだろうが」

「どうしてそんなに渋るんですか。何か私に見せたくないでもあるんですか!？」 あ」

自称・魔法少女は急に言葉を止め、したり顔でこちらを見つめてきた。殴りたい。

「ははーん。カイトさん、私に好きな女性を見られたくないんですね？ だからそんなに嫌がるんですね？ まったく、カイトさんも隅に置けませんねえ。野良やんきーのくせに」

「この世の果てまでぶっ飛ばすぞ」

そしてなに悟った顔してんだこのクソガキ。『分かった分かった、皆まで言うな』的な表情が、もうありきたりな言葉では形容できないほどムカつく。

「じゃあいないんですか？ 好きな女の子」

「……………いねえよ、そんな奴」

「む。いま何か意味深な空白がありましたね。他の人間は騙せても私は騙せませんよ？ 私は恋の魔法使いとも呼ばれていたんです。野良やんきーさんの嘘なんて一瞬で分かります」

「ませた口きくんじゃねえこのジャリ魔法使い」

口を開けば意味不明な言葉を吐きまくる金髪女。いつになれば追い出せんだこいつ。

「何はともあれ、私はカイトさんについて行きますっ。異論は認めませんっ！」

この自称・魔法少女はもう何が何でも俺についてくる気にいるらしい。こんなやり取りをいつまでもしていたら遅刻どころか学校自体終わっちゃう。

「ちっ、勝手にしろ」

だからここは俺が折れるしかない。非常に悔しいが、こうする他なかった。



「へー、ここがこの世界の学び舎なんですかあ。何だかちよつとしたお城みたいですねー」

それから家を出て俺は学校に到着する。このクソガキが通学路にあるものに片っ端から飛びついていた所為で、いつもより時間がかかってしまった。

「どうして外には誰もいないんですか？」

「授業中だからだよ」

「やんきーさんは遅刻してもいいんですね」

「よくはねえよ。つーか今日遅れたのはてめえの所為だろうが」

「失敬な。私はちゃんと起こしてあげたじゃないですか。気持ち良さそうに寝てるカイトさんを起こすのは、とても心が痛んだんですよ？」

「そんな葛藤をしながら最終的にジャンピングプレスをかましてめえの思考回路は、

「いったいどうなってやがる」

こいつは元の世界に帰る前に、腕の良い医者がいる精神病院にかかった方がいいかもしれない。それだけでもこの世界に来た意味はある。

「ちゃんと起きられたんだからいいじゃないですか」

「全然よくねえっつーの」

「それでカイトさん、私たちはこれからどこに行くんですか？」

「てめえは話を急に明後日の方向にぶっ飛ばすのが得意なのか？」

「コミュニケーション能力までバグってるこいつは、どうすれば救ってやれるのだろう。」

「学び舎に来たという事は、カイトさんはこれから勉強をするのですよね？」

「……………まあな。てかてめえはどこまでついてくるつもりだ」

「カイトさんの好きな女性を見るまでです」

「そんな奴はどこにもいねえから早く帰れ」



あの家ではなく元の世界に。そして金輪際、俺の前に現れるな。

「でも、勉強をするカイトさんの邪魔をするのは私としても本意じゃありませんね」

「ならてめえはなんで俺についてきた」

「お外に出たかったからですっ」

「一生外で暮らしてろ」

公園で段ボール箱の中に入ってりや、その願いも叶ったまままだただらうに。

「なので、私はカイトさんが勉強している間、この学校という場所を散策してきます。安心してください。勝手にいなくなったりしませんから」

「いや、俺としては勝手にいなくなってくれた方が安心できるんだが」

「ちなみにカイトさんが遠くに行ってもすぐに分かりますので、逃げてても無駄です」

「てめえは夫の浮気を疑う病んでる嫁か」

「え、カイトさん私と結婚したいんですか？ ごめんなさい。その髪型はちよつと無理です」

「頼むから会話くらい普通に成り立たせろ」

そうして何やかんや話しながら誰もいない学校敷地内を進み、昇降口に到着する。時間を確認すると、どうやら今は三時限目の最中だったらしい。

「それじゃあ私はしばらくいなくなります。カイトさんも勉強頑張ってください」

「あんま勝手な真似すんじゃないぞ」

「寂しくなったら呼んでくださいね？　すぐに飛んで行きますから」

「世界中の人間がいなくなっても、てめえだけは呼ばねえよ」

そう言って俺は自称・魔法少女と別れ、昇降口から校舎内へと足を踏み入れる。奴も宣言通り学校内を散策しに行ったらしい。あいつを一人にするのはそこはかとなく不安だが、一緒にいてやる筋合いは皆無に等しい。あの女が何をやらかそうが俺の知った事じゃない。

そんな事を考えながら下駄箱で靴を履き替え、静かな階段を上って行く。さつきまでずっと隣が騒がしかったからか、静寂がいつもより際立っている気がした。

自分のクラスがある三階に到着し、誰もいない廊下を進む。ここで教師に声をかけら

れても、いつものように無視してやるかメンチを切って脅してやればいい。俺がこんな時間に登校するのなんて、サラリーマンが朝に必ずコーヒーを飲む、みたいなもんだから。

廊下の掲示板の前を通りかかる。そこには先月あつた中間試験の結果が貼り出されていた。この学校じゃ成績優秀者十人の名前が掲示されるらしい。当然、俺の名前はそこにはない。ただ、一人だけ気になる名前が七番目に記されていて、俺はふと足を止めた。

『乾 あかり』

県内でも有数の進学校であるこの高校で上位十人に入るのは、誰もが憧れる名誉ある事だと、誰かが言っていた。俺のような不良じやたぶん一生かかっても達成できない。

その名前をしばらく見つめていると、だんだん腹が立ってきて舌打ちをした。その音は誰の耳に届くわけもなく、無機質なりノリウムに吸い込まれていく。

再び廊下を歩き出し、教室へと向かう。

この学校には俺のように遅刻してくる奴も、制服を着崩している奴も、髪型をいじる奴も、授業をサボる奴もいない。それは入学する前から分かっていた。俺は他校のバカな連中のように、自分と同じ劣等感を持つ奴らとつるみたくてこの高校に入ったわけじゃない。

教室の前に着き、俺は扉に手をかける。

なら、どうしてこんな優秀な高校で不良なんてやってるのか。あいつにはよくそう訊ねられる。いつも俺は答えないけれど、答えなんて決まっている。

俺は閉められた扉をスライドさせ、教室の中に入った。

「――」

途端、その箱の中に流れる緊迫した空気。それを一瞬にして作り出したのは他の誰ももない、いま教室の中に入ってきた男子生徒。誰一人としてこちらを見ず、クラスメイ卜たちは俺に気づかないふりをしてノートや授業の内容が記された黒板を注視している。

そんな異質な存在が足を動かすと、近くに座っている生徒はビクツと身体を震わせたり、数秒前まで必要も無かった筆記用具を筆箱から出そうとしたりする。

「い、い、い主藤。いま何時間目だと思ってる。とつくに始業時間は過ぎてるぞで」

教壇に立つ禿げた英語教師が俺に向かってそう言うてくる。名前は忘れたが、こいつ

は特に口うるさい教師でもない。だからこうすればすぐに黙るだろう。

「あ？　なんか言ったかハゲ」

「ひつ……いい、いや何でもない。早く席に座りなさい」

この通り。教師ですらこの程度で引いていく。ならば生徒たちは誰も近づいてこない。

一学期が始まった直後、問答無用で決めた窓際の一番後ろの特等席。そこに学生鞆を放り投げ、机に足を上げて座る。

「で、では授業を続けるぞ。三十六ページの始めから——」

そして、何事も無かったように再開される授業。

禿げた英語教師の声を聞き流しながら、俺は窓の外に顔を向けた。

これが、俺の日常。いつもと何も変わらない、普遍的な平日の光景。

別に楽しさを求めて学校に来ているわけじゃない。かと言って、勉強をするためでもない。じゃあ何をするために、こんな真面目な奴らしかない高校に通って不良をして

いるのか。

そんなもん、決まってんだろ。

「……………くだらねえ」

この世界にあるものすべてがくだらないから。理由はそれだけだ。

真面目で頭の良い学校に通いながら、真面目に勉強して良い成績を取る事。

不良ばかりが通う高校で、シンパシーを感じる仲間と一緒に不良をやる事。

そんなありきたりなもんを求めて生きる事に、何の意味がある？

誰だって自分が欲しいものを思い描く時はある。それを求めて自分が行きたい学校に進んだり、友達や恋人を作ったりする。それは当たり前前だ。

でも俺が欲しかったものは、誰かにとつての当たり前ではなかった。

い。こんなくだらない世界で、くだらないものをあえて欲しがらる意味なんて一ミリも無い。

だからこそ、俺はその矛盾を選んだ。頭の良い高校に入学して、そこで不良をやる事。そして、ありきたりなものを手にして喜んでる馬鹿な奴らに、唾を吐く事。

それが、俺が何よりも欲しいと願ったものだった。

## 第七話



そうして何もせず午前の授業を消化し、昼休みになる。

俺はいつも通り屋上へと向かい、そこで柔和な日光を浴びながら昼寝に勤しんでいた。

「学校というのはとても楽しい所ですねー。こんな場所に毎日通えるだなんて、カイトさんはまさか貴族なんですか？ おとーさんとおかーさんはお国の役人だったりします？」

しかし、今日はこの安寧の地を踏み荒らす輩がいた。



「でも、広くて全部は回れませんでした。今度はカイトさんが案内してください」  
「嫌に決まってるだろ、めんどくせえ」

「また出ました、カイトさんの面倒くさがり。カイトさんはもう少し私を優しくエスコートすべきです。そんなんじや女の子にモテませんよ?」

「余計なお世話だクソガキ。てめえにんな事を心配される筋合いはねえ」

「やれやれ。私の主はなんでこんなにあやぶれてるんでしょうか。他の人間とは大違いです」

寝転がっている俺の横に座ってべらべらと喋っている自称・魔法少女。

俺は寝歸りを打ち、奴に背を向ける。それから呆れるようなため息を聞いた。

「カイトさん」

「んだよ」

自称・魔法少女は名前を呼んでくる。俺はぶつきらぼうに返事をするが、続きの言葉が飛んでこない。そして数秒の間が空いてから奴の声は聞こえた。

「カイトさんは、どうして一人なんですか？」

「あ？ どういう意味だ」

質問の意味が分からず訊き返す。自称・魔法少女は間を空けずに答えた。

「言葉通りの意味です。人間という種族は、他者との繋がりをととても大事にしています。少しの時間でしたが、この学校という場所を見てそう思いました」

校庭の方から男子の騒ぐ声が聞こえてくる。少し遅れて、女子の笑い声が屋上に届いた。

「ここにいるほとんどの人間が、誰かと関わりを持っています。明らかに他人同士であるのに、まるで家族のように親密な関係を築いていました。私が生きてきた世界の基準からすれば、人間は孤独になる事を極端に嫌っている種族に見えます。だから、この学校にいる人間の中では、カイトさんだけが浮いているように見えるんです。それは、どうしてですか？」

俺は黙ってその言葉を聞いた。だが、すぐには答えない。

無視しているわけでもなければ、問いかけの内容が理解できないわけでもない。

たぶん、その意味が分かりすぎているからこそ、素直に答えたくなかったんだと思う。

「めんどくせえんだよ」

「もう、そうやってはぐらかさないでくださいよ。私は真面目に訊いてるのに」

「ちげえよ。そうじゃねえ」

少しの空白を空けてそう言うと、自称・魔法少女はそれを俺の常套句だと受け取った。

だが、俺が言いたいのはその質問自体が面倒くさい、という事じゃない。

「そういう繋がりとかが仲間とかがめんどくせえって言うてんだ。そんなくだらねえもんに現を抜かしてる暇があんなら、一人でツツパってる方が百倍マシなんだよ」

俺は背後にいるであろう女に向かって、そう言った。

「……………繋がりが、面倒くさい」

「そうだよ。なんか文句あつか」

自称・魔法少女は俺の答えを小さな声でリフレインする。

「なるほど。私、またちよつと分かったかもしれません、カイトさんの事」

「あ？ 何が言いてえんだてめえは」

「深い意味はありませんよ。ただ、やんきーつていう種族は面白いな、と思っただけです」

「バカにしてんのか」

「いいえ、むしろ褒めてます。ありきたりな人間よりも、変な髪型で多少性格が捻くれた方が、味があつて楽しいですから」

「だから、それをバカにしてるっつーんだよ」

こいつは頭が良いのか悪いのかが分からない。これをわざとやってるんなら相当頭が良いと言わざるを得ないのだが、そうも思えないのでたぶん普通にバカなんだと思う。

「さーて、そろそろカイトさんの好きな女性を探しに行きますかっ」

「てめえはもうちよいシリアスな雰囲気を感じ取る努力をしろ」

「なんですかそれ。そんな難しい魔法は使えませんかよ？」

「魔法じゃねえ。人間として兼ね備えてなきやいけねえスキルの話だ」

「ごめんなさい。魔法使いなので私には分かりませんっ」

「人間界で淘汰される前に帰れ」

「やっばこいつはただのバカだ。少しでも賢いと思ってしまった数秒前の自分を殴りたい。」

「ほーら、いつまでもゴロゴロしてないで早く私を楽しめる所に連れて行ってくださいっ」

「だーっ、乗ってくんたっつーのっ。てめえは発情期の猫かっ！」

「そうして自称・魔法少女は寝ている俺に向かって本日二度目のジャンピングプレスを披露してくる。それから間髪入れずウザ絡みの追撃。鬱陶しいったらありやしない。」

「えへへ、そんなに嫌なふりをしなくてもいいんですよ。私は誰にも見えないんですから」

「ふりじゃねえっつーの。つーかてめえが見えなくても俺の行動は見えんだろうが」

「その時はまあ、他のやんきーと戦う練習をしてたつて言えば誤魔化せますよ、たぶん」  
「なんだその俺が誰にどう思われても関係ねえ、つーような言い訳は」

俺の腹の上に正座して適当な事を言い始める自称・魔法少女。もし誰かがこんなところを見たら、そいつの目には頭がイカれた不良しか映らないだろう。

「だって、そんな事どうでもいいじゃないですかー……………つて」

「どうした。急にホームシックになったか？」

だったら今すぐ帰る準備をさせなければ。そんな事を思っていると、突然口を閉ざした自称・魔法少女は、俺の腹の上に載ったまま屋上の入り口の方へと視線を向ける。

「誰かが来ます」

「は？ 誰かって誰だよ」

「分かりません。でも間違いないです。気配的に、敵意を持つている感じではありませんね」

自称・魔法少女は俺の腹から降りる。それとほぼ同時に、屋上の扉は開かれた。

「——あー、やっぱりここにいた」

「げ」

「なによ『げ』って。もう、今日はいつもより遅かったから学校に来ないんじゃないかって心配してたんだからね？ あたしの心配を返してよ」

開かれた扉から入ってきたのは、見覚えのある女子生徒。俺がいる所為でこの屋上にはほとんど誰も来ない。が、どんな事にも例外はつきもの。それが、いま現れた女。

「何しに来やがった、このあばずれ」

「誰があばずれよ。つたく、またそんな髪をクロワツサンみたいにして。髪型を整える暇があるならちゃんと遅刻せずに来なさい」

「誰の髪がクロワツサンだコラ」

その女は俺を見るなりこの髪型をディスプレイしてくる。どいつもこいつも、なんでリーゼントの良さが分からねえんだ。少し離れた所に立って話を聞いていた自称・魔法少女は『くろわっさん？ 何かの聖遺物でしょうか？』と言いながら首を傾げていた。

女は一度ため息を吐いてからこちらに近づいてくる。

黒髪のセミロング。左のこめかみにいつも四葉のクローバーの髪留めを付けているのがトレードマークだと、こいつは自分で思っているんだろう。ブレザーには皺ひとつなく、スカート丈も校則通りで完璧に制服を着こなしている。たしか新入学生向けのパンフレットにモデルとして写真が載った、とかこの前誇らしげに話していた覚えがある。

生徒会の書記で、成績も優秀。友達も多く、真面目で生徒の模範としてこれほど適任な奴はたぶんこの学校に二人としまい。……これは認めたくないが、容姿も腹が立つほど整っている。俺とこいつは幼稚園の頃からずっと同じ学校に通っている。一言で言えば腐れ縁。

それが、この乾あかりという口うるさい女。



「友達から聞いたよ、また昨日も喧嘩したんだって？」

「……………それがどうした」

「どうした、じゃないでしょ。そんなに問題ばっかり起こしたら、またおばさんとおじさんに迷惑かけちゃうんだからね？ あのと二人は優しいから魁人に厳しくないだろうけど、その代わりにあたしがきつく言っただけであげるんだから」

俺の前に立って腕組みをしながら、あかりは偉そうに語る。

「俺がどこで何しようがてめえには関係ねえだろ」

「関係あるのっ。お兄ちゃんからも魁人を見張っておくように、って言われてるんだよ？」

こいつの兄貴である雅さんの顔を思い出し、俺はため息を吐く。

「それに、怪我とかしたらどうするのよ」

「大丈夫だっつーの。昔っから身体だけは頑丈なのはてめえも知ってるんだろ」

「分かってるよ。それでも、その……………もしもの事があれば心配するんだからね」

「あ？ 誰が心配するって？」

顔を俯けて語尾を小さくするあかり。問いかけると、今度は頬を赤くして睨みつけてきた。

「な、何でもないっ。バカ魁人っ。チョコクロワツサン！」

そして再び罵られる。離れた所からは『ちよこくろわつさん？ 聖遺物にも種類があるんでしょか？』という声が聞こえてきたが、それは迷わず無視した。

「で、用件は何だ。んなこと言うために俺を探してたんじゃねえだろ」

いくら心配性の雅さんの妹でも、これを言うためだけに俺の所にやって来るような真似はしない。腐れ縁という無駄な関係の所為で、そういうのはよく分かる。

俺の言葉を聞き、あかりは何かを思い出すように口を開いた。

「そうそう。おばさんから今日の事、聞いてなかった？」

「今日の事？ なんも聞いてねえけど」

むしろ今日は顔を合わせてすらいない。昨夜の件もあつたから、たぶんあの母親も俺と話したくはなかつたんじゃないだろうかと勝手に思つたりした。

俺の答えを聞き、あかりは何やら不敵な笑みを顔に浮かべる。

「そつかさつか。ふふつ、おばさんもよく分かつてるねえ」

「は？」

「あ。そろそろ予鈴鳴っちゃう。次の授業、実験の準備しなくちゃいけないんだつた」

あかりはブレザーのポケットからスマホを取り出して時刻を確認し、そんな事を言い出す。しかし、俺には奴の言わんとしている事の意味が一ミリも理解できなかった。

「じゃあ行くね。午後の授業はちゃんと受けるんだよ？」

「分かつたから早く行け」

「もう、言われなくても行きますよーつ、だ」

追い払うようにしてそう言うと、あかりは舌を出してから踵を返す。遠ざかっていく背中を眺めているとその足が急に止まり、もう一度こちらを振り返った。

「魁人」

「んだよ」

「楽しみにしててね？」

そして、頬にえくぼができるお決まりの笑顔を浮かべながらそう言い、駆け足で屋上から出て行く。俺は座ったままその姿を見送り、首を傾げてから息を吐いた。

「なるほど。今の超絶可愛い方がカイトさんの好きな女性ですね」

「てめえの目は節穴か」

こいつは俺が話している間、夢の中で甘いロマンスでも見ていたのだろうか。

「ふっふ、誤魔化しても無駄ですよ？ 恋の魔法使いである私にはすべてがお見通しで

す」

「誤魔化すも何も、存在しねえもんをどうやって見るっつーんだよ」

「またまたあ、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないですかあー、うりうり」

「殺す」

「できるんですか?」

本気で腹が立ったので有り余る殺気を出しまくりながらそう言ったが、自称・魔法少女はどこ吹く風。ひとつだけどんな願いでも叶えてくれると言う誰かがいま現れたのなら、俺はこいつをこの屋上からぶっ飛ばせる力を願っただろう。

肘を脇腹に当ててくるこの女をどうすれば痛い目に遭わせられるか真面目に考えていると、昼休みの終わりを予告する鐘が聞こえてきた。

「あれ? この鐘は次の授業が始まる事を示しているんじゃないんですか?」

「そうだよ」

「なのにどうしてカイトさんはまた寝る姿勢を取っているんでしょうか?」

「サボるからだ。てめえもとつとどっか行け」

鬱陶しいこいつのせいで俺の大切なリラックスタイムが無くなってしまった。

だから今日は引き続き、この屋上で昼寝に勤しむ。

「やんきーさんはずいぶん自由なんですなあ。じゃあ私はさっきの女性の後を追います」

「おい、あんま余計な真似すんじゃねえぞ」

「お、やっぱりあの女性が気になるんですね？ 大丈夫ですつ。私は誰にも見えませんから」

「だからこそ余計な事ができると言いたいのだが、どうやらこいつには伝わらないらしい。」

「勝手にしろ。あとそのまま帰ってくんない」

「それは無理です。私は主に従順なので」

「だったら俺の言う事を聞けクソガキ」

「はいはい。これからはちゃんと聞きますよーう」

今までは聞いてなかった自覚が一応あったらしい。

「さーて、あの女性のパンツの色は何色でしょうかねー」

「てめえの口からはでまかせしか出て来ねえのか」

「安心してください。後でしっかりカイトさんに教えますのでっ」

「俺が求めてる従順さはそんなんじゃないよ」

「ではしっかりと確認してきます、主さま」

「結局自分の心てめえの声にしか従ってねえだろうが」

自称・魔法少女はそう言って、スキップをしながら校内に繋がる扉へと向かって行く。  
俺はため息を吐き、屋上に寝転がったまま六月の晴れた空を見上げた。

## 第八話



「あかりさんは素敵なお女性でしたねー。野良やんきーのくせにあんな人間を好きになるだなんて、カイトさんはおこがましいです。ちよつとは反省してください」

「なんででめえにそんなこと言われなくちやいけねえんだ。ハリ倒すぞ」

時は過ぎ放課後。いつも通りの帰り道がいつもとは違う景色に見えてしまうのは、たぶん隣を歩いているこの金髪女の所為。それ以外の要因がどうやっても思いつかない。

あれから午後の授業はすべてサボり、普段と同じように学校での一日を終わらせた。

昼休みに姿を消した自称・魔法少女は放課後になっても現れなかった。そのまま居なくなってくれたら都合が良かったので、無視して家路に着いたその直後、謎の白い光とともに俺の前に登場。驚いて声を上げたら近くを歩いていた女子生徒が涙目で頭を下



げてきた。あの女子には本当に申し訳ない事をしたと思っ  
ていてる。それもこれも全部、このクソガキの所為。

「ところでカイトさん。このクレープという食べ物もおかーさんのオムライスと同じく悪魔的に美味しいのですが、どうすればこんなものを作れるのでしょうか。もしかして、特定の人間は美味しいものを作れる魔法が使えるのですか？」

「知らねえよ。つーか食いながら喋んな。舌噛むぞ」

「はっ、すいません。お行儀が悪かったです」

「わかりやいんだよ」

「まさかカイトさんに諭されるだなんて微塵も思いませんでした」

「そのままずっと喋ってる。勢いあまって舌を噛み切れ」

口もとに生クリームを付けたまま歩いている自称・魔法少女にそう言い、何度目か分からなかったため息を吐く。ちなみに、俺は左耳に携帯を当てながらこいつと喋っている。独り言を喋りながら町中を歩いたら確実に捕まってしまうので、これはそうならぬための冤罪対策。非常に面倒くさいが、こうするしかなかった。沈黙を知らないこの女を永遠に無視し続けるのは、きつと釈迦でも無理だろう。

家路を辿る途中、このクソガキは『カイトさん。そういえば私、お昼ご飯を食べるのを忘れていました』とか言い出し、面倒なのでシカトしていたら今度は『魔法で人間を全裸にする事は可能でしょうか……?』という不気味な呟きが聞こえてきた。

それからこいつは道中の公園内にあつた移動販売のクレープ屋を見つけ、あれが食べたい、と駄々捏ねを開始。反論するも『これ以上待たせたらカイトさんをここで全裸にします』という謎の脅迫を受けたので、仕方なくクレープ屋へ。注文した物が出てくるまでの間、バイトの女はなんか終始怯えてた。ガチガチの不良が一人でクレープを買いに来るなんて、地球が一日に二回転するくらいめずらしい出来事だったに違いない。

「カイトさんはあかりさんとお付き合いないんですか？」

「てめえは藪から棒つー言葉を知ってるか」

こいつの場合、藪からアイアンメイデンをぶん投げてくるレベルで話が突飛だ。

「ヤブカラ棒？ 何かの武器ですか？」

「武器じゃねえよ。知らねえならいい」

そう言うのと確かになんかの道具みたいに聞こえるけども。

「で、どうなんです？　男の人ならあんな女性とお付き合いたいんじゃないんですか？」

自称・魔法少女はキラキラした瞳で見上げてくる。控え目に言っつぶつ飛ばしたい。

「バカかてめえは。んなわけねえだろ」

「えー、恥ずかしがらなくていいじゃないですかあ。本音を言っちゃってくださいよ。『俺、本当はあいつを押し倒したい』とか恥ずかしい事も、私にだけは言ってもいいですからあ」

「てめえは何発殴られてえんだ」

今なら腕が上がらなくなるまで殴り続けられる気がする。

「だってえ、あんなに可愛くて性格が良い学生はあの学び舎にいませんでしたよ？」  
「何の根拠があつてんな事をほざきやがる」

「私はあそこにいる全員を見てきましたからつ。違う世界に住む種族が気になるのは当然ですつ。しつかり人間観察してきましたつ」

「人間観察のやり方が全然ちげえよ」

ドヤ顔でそう言うてくる自称・魔法少女。もしかしたら、こいつにとつて人間の価値は動物園にいる動物とさほど変わらないのかもしれない。

「あんなに素敵な女性なのに、カイトさんは恋人にしたいとか思わないんですか？」

「……………」

「ねーえ、カイトさんつてばー」

しつこいその声を意識からシャットアウトして家路を辿り、なんとか家に到着した。この女はマジでひっきりなしに喋りやがる。口にマシンガンでも付いてんじゃねえのか。

「お、そうこうしているうちに我が家に到着したじゃないですか」

「てめえの家じゃねえ。いいから早く元の世界に帰れ」

「ヤです。今はここが私の家ですからっ」

どうやらここまで潔く開き直られると腹も立ってこないらしい。いや、むしろ腹が立ちすぎてこれ以上立つ腹も無いのかもしれない。

空の駐車場を見る限り、両親はまだ帰っていない。普段なら気にならないが、今日は早めに帰って来てほしかった。あの二人ならサバンナを縦横無尽に駆け回るチーターのようなこいつを、上手く相手してやれるだろうから。

「さあ、早く入りましょうっ。中に入ったらあかりさんの事を話してもらいますからねっ!」

「うるせえなてめえは。どうやったらそのテンションを一日中保てんだよ」

「なに言ってるんですかカイトさん。これが私の普通ですよ?」

「てめえがいた世界は年中祭りでもやってんのか」

自称・魔法少女に急かされて俺は玄関の鍵を開け、どうすればこいつから解放されるのか、と考えながらドアを引いた。

「——やつほ」

しかし、高速で閉まる玄関のドア。

冷静になれ、俺。このクソガキと訳の分からない話をしていた所為で、頭が混乱しているのかもしれない。幻視と幻聴を同時に体験するとはさすがに思わなかった。

「ねえカイトさん。いま中に誰かいませんでしたか？」

「ば、バカかてめえ。んなわけねえだろ」

「でも、私には見えました。あれはたぶん、エプロン姿のあか」

と、自称・魔法少女が言いかけた時、閉めたはずの玄関のドアが内側から開かれた。

「ちよつと！　なんで閉めるのよつ！」

そして現れる不法侵入者。ていうかあぶねえ。うっかりこの女と喋つてるところを見られるところだった。咄嗟に携帯を耳に付け、俺はその不法侵入者に告げる。

「これから警察に通報するところだこの泥棒女。てめえ、人ん家で勝手に何やってやがる」

「なあに、その言い方。人がせつかく晩ご飯作ってあげに来たっていうのに」

「は？ お前、今なんつった？」

意味不明な供述をする不法侵入者に問いかけると、奴は勝ち誇ったような顔を浮かべる。

「だから、今日はあたしが魁人のご飯を作ってあげるの。昨日の夜おばさんに『仕事が遅くなるからお願ひ』、って言われたのよ」

「あのクソババア……………っ！」

嬉々としてこいつの携帯に電話をかけている母親の顔が目に見えかぶ。さつき屋上に来たのはこれを伝えるためだったのか。伝えられてねえけどな。

人の家に勝手に上がり込んでいた女——あかりは、どうやら俺が母親からその話を聞いてないかと悟り、あえてあの場で伝えず俺にサプライズしようとしたらしい。

「ほら、突っ立ってないで入るよ。今日はあたし特製のカレーを食べてもらうんだから」  
「はあ？　なんで俺がそんなもんを食わねえと」

む、殺気——？

「カイトさん。彼女のお願いを断ったら、どうなるかは分かっていますよね？」

背後から聞こえてくる、その脅迫。背中に杖を突きつけられているのが感覚的に分かった。

「もし断れば、この場でカイトさんを全裸にする魔法を使います。問答無用です。だから頷いてください。ほら早く。それとも、好きな女性の前で醜態をさらしたいんですか？　カイトさんはそんな変態やんきーさんなんですか？」

こんのクソガキ。俺が何も言えないのをいい事に好き放題言いやがって。

しかし、ここであかりの申し出を断れば、この自称・魔法少女は間違いなく何らかの魔法とやらと使ってくる。本当に全裸にさせられるかどうかは分からないが、それに限



りなく近い仕打ちを受けるだろう。さすれば、俺がしなければならぬ事はひとつ。

「ちっ……わーったよ。勝手にしろ」

「お、今日はめずらしく魁人が素直だ。なあに？ 何か良い事でもあったの？」

そう答えると、あかりは笑いながら顔を見上げてくる。俺の背後にいるクソガキの姿が見えたら、そんな言葉は口が裂けても言えないだろうに。

「ちげえよ。むしろその逆だ」

「うん？ まあいいや。まだ作り始めた途中だったから、もう少し待っててね」

あかりはそう言って、先に家の中へ入って行く。俺は声があいつに届かなくなるまでの間、その場に立ち尽くしていた。

「状況はなんだかよく分かりませんが、私としては好都合です。これであかりさんとカイトさんの関係を知る事ができますっ。じっくり観察させてもらいますからね？」

さつきよりもテンションを上げている自称・魔法少女。対する俺のテンションは厳しい現実に絶望して、奈落の底へと紐無しバンジージャンプしてしまったらしい。

「なんでこうなった」

「まあまあ、好きな女の子と一緒にいられるのならそれでいいじゃないですか」

「だから好きじゃねえつつつてんだろうが」

「はいはい。さあ、入りますよ。私はあかりさんを観察しなければなりませんからっ」

自称・魔法少女はそう言って、開けたままになっていたドアから家に入って行った。

「おっと。家では靴を脱がなければならぬでしたね。危ない危ない」

脱いだピンク色のドレスシューズを綺麗に並べる自称・魔法少女。

その姿を見て、俺はため息を吐いてから家に入る。

靴を並べるのなんていったい何年振りだ、と思いながら、脱いだ革靴を揃えた。



台所の方から聞こえてくる陽気な鼻歌。俺は黙ってソファに座りながらそれを聞いていた。センターテーブルの向こう側では、金髪のクソガキが俺とあかりの顔を交互に見比べながらニヤニヤしている。死ぬほどぶつ飛ばしたい。

自分の部屋で待っていてもよかつたのだが、それではこのクソガキが何をするのか分からない。そういう訳で仕方なくリビングで待つ事になり、今に至っている。

「暇ならちよつとは手伝つてよ」

「めんどくせえからやだ」

台所からそんな声が聞こえてきたが、即座に断る。手伝うのが嫌だつたというわけではない。俺が台所に行けば、もれなくこのサイコパス少女も一緒にいてくるからだ。

「ふーん。なら魁人のやつは辛くしちやおー、つと」

「おい、あんま余計なもん入れんじやねえぞ。普通に食えるもんを作れよ」

「どうしよつかない。手伝つてくれないならこの魔法の粉を入れちやうよ？」

「魔法の粉？ んだそれ」

「なんかね、耳かき一杯分入れるだけで魔王が倒せるくらい辛くなるんだって」

「てめえは俺を殺す気か」

ソファに座ったまま台所の方を振り向くと、緑のエプロンを纏ったあかりが何かが入った小瓶をこちらに掲げていた。どうでもいいが、魔法の粉と聞いた自称・魔法少女は『魔法の粉？ 魔王を倒せる？ まさか、あかりさんは魔女<sup>ウィッチ</sup>なんですか？ もしくは錬金術師<sup>アルケミスト</sup>？』と、興味津々な表情を浮かべてそう言い始めた。んなわけねえだろバーカ。

「ふふん。嫌なら手伝いなさ——いたっ」

「ん？ おい、どうした」

問いかけると、台所に立つあかりは困ったような笑みを浮かべてこっちを見てくる。なんとなく分かる。あれは、あいつが何かをやらかした時の顔。

「あはは、指をちよつと切っちゃった」

そうやって左の人差し指を立てるあたり。俺はため息を吐き、ソファから立ち上がった。

「ちゃんと手元を見て切れつつーの。余計なところを見てつからそうなんだよ」

「うん、ごめん」

「ちよっと待ってろ」

リビングの棚に移動し、そこにある救急箱を取りに行く。不良になってからは頻繁にこの救急箱には世話になってるので、置いてある場所はしっかり把握している。

「んっ」

そんな事を考えながら救急箱を開けると、ついこのあいだ大量に使ったはずの包帯や湿布が補充されていた。まあ、こんな些細な事を気にしていても仕方ない。

「ほら、見せてみろ」

「あ……う、うん」

確かに血は出ているが、傷は浅い。大騒ぎするような怪我では無かった。

「あんま深くはねえな。こんならすぐ治んだろ。ほれ」

持つてきてやった消毒液と絆創膏を手渡し、ソファに戻ろうとした。だが、俺の手からはその応急手当の道具が無くならない。どうしたのか、と訝しみ視線を上げる。

そこには、桃色に染まった幼なじみの顔があつた。

「……………やだ」

「あ?」

「だから——」

あかりは顔を紅潮させたまま、少し怒ったような表情を浮かべて口を開く。

「い、痛くてできないから、魁人がやってよ」

そして、あかりの口からそんな言葉が零される。途端、むず痒い沈黙が台所に流れ出す。

「うっ………な、何ですか今の男性を萌え殺しさせるような甘え方は。あかりさん、もしかしくなくても魔性の女ですか？　今のは女の私でもきゅんと来ちゃいました」

いつの間にか傍らに立っていた自称・魔法少女が、胸を押さえながら意味不明な言葉をほざいていた。黙ってる、とも言えず、俺は目の前にある赤い顔を見つめる。

「はやく。夜ご飯できるの、遅くなっちゃうから」

あかりはそう言って、切った指を差し出してくる。百歩譲って痛くてできない、という言い訳は分かるが、なんで照れてんだよこいつ。意味分かんねえ。

「ガキのまんまかよ、てめえは」

「い、いいでしょ別につ。沁みるの嫌なんだもん」

「舐めちゃいます？　そのままあかりさんの血を舐めちゃいます？　魔女の血は舐める

と永遠の魔力を手に入れられるんですよ？ 私の見立てだとあかりさんは間違いなく魔女なので、舐めればカイトさんも魔法使いになれちゃいますよ？」

なんか隣から雑音が聞こえてくるが、俺はそれを無視して消毒液の蓋を開けた。

「いくぞ」

「う、うん。いいよ、来て？」

「あ。なんか今の会話、ちよつとえつちです」

このクソガキは後でマジでシバいてやる。

「んっ、あ」

「変な声出すんじゃないやねえよバカ」

「い、痛いんだから仕方ないでしょ。もうちよつと優しくしなさいよね。この下手っぴ」「てめえはさつきからわざと誤解を招くような言葉を選んで喋ってるのか？」

口を開けば開く度に意味深なワードを吐き出すあかりに物申す。だが、こいつは何も



分からないというような表情を浮かべて俺の顔を見てきたので、たぶん特に何も考えていなかったんだろう。傍らで今の話を聞いていたクソガキは『下手つぴつ、カイトさんが下手つぴつ！』と言いながら死ぬほど笑い転げていた。そのまま笑い過ぎて死ぬ。

「ほらよ。次から気いつけろ」

それから絆創膏を巻いてやり、簡単な応急処置は終わる。ただそれだけだったのに、隣で立て続けに煽られた所為で俺のフラストレーションは爆発寸前。なんてこった。

「……ありがとう」

小さな声でそう言われる。だが俺は聞こえないふりをして台所から立ち去った。

こいつは昔から何も変わらない。ほんのかすり傷でも痛いだのなんだの喚き散らしては俺におんぶをさせたり、俺が漕ぐ自転車の後ろに乗ったりしてきた。そのくせ大人の前では強がって、何でもできる奴を演じたがった。それは高二になった今でも変わらない。

「……………変わらないのは魁人も一緒じゃん。ばか」

そして、後ろからそんな声が聞こえてくる。

余計なお世話だ、ばーか。

## 第九話



「ごちそうさまでした。どう？ 今日のは美味しかったですよ？」

それからあかり特製のカレーが完成し、俺たちは食卓で向かい合いながらそれを食った。

俺にしか見えてないこの自称・魔法少女が『私も食べたいです』とか超面倒くさい事を言い出すんじゃないかと不安だったが、その辺はこいつも弁えているらしい。奴は黙ってソファに座りながらこつちをガン見。

ときおり、『カイトさん。もっと積極的なアプローチをお願いします』などという意味不明な指示を出してきたが、あかりの前で反応できるわけがなく、俺はただ無心でカレーを食い尽し、このイレギュラーな夕食は終わった。

「別に。いつも通りだろ」

「まーたそんな可愛くないこと言う。せつかく誰かさんの好きなものを作つてあげたんだから、ちよつとくらい感謝しなさいよね」

バラエティ番組を眺めながら、あかりの質問に答える。たぶん、こいつは冗談でもいいから褒めてほしかったんだと思う。褒めればすぐ調子に乗るその性質をよく分かっているので、俺は今日も嘘を吐かない。

「……………いつも通り、美味かつたつつてんだよ」

「あ……………も、もう。なんであんたはそういう天邪鬼な言い方しかできないかなあ」

思っている事を口にしたのにも関わらず、向かい側からは文句が飛んできた。そもそも、はみ出し者に普通を求めている時点で間違つてる。

「飯食つたんなら早く帰れ。また変な奴に絡まれんぞ」

「何その早くあたしを追い出したい、みたいな言い方」

「その通りだ。お前が遅くなると俺が雅さんに怒られんだよ」

「余計なお世話。あたしだってもう大人なんだから、心配されなくても大丈夫だし」

「ほお？　んな事をほざいといて帰りに西高の奴らにナンパされた挙句、助けに行つた俺のバイクをお釈迦にしたのはどこのどいつだ？」

「それは……………あたしだけだ」

数日前の出来事を思い出しながら言うと、あかりはバツの悪そうな顔をして答えた。

「分かってんなら言う通りにしろ。お前はただでさえ変な輩を引き寄せんだから」

「そんな事、無いし」

「どの口が言うんだ？　知らねえ男どもにナンパされてるところを何度も助けてもらった事を、今さら忘れたとは言わねえよな」

い。そう言うとおかりは頬を膨らませる。その表情からして、少なからず自覚はあるらしい。

「そんなに言うなら、家まで送つてよ」

「嫌に決まってるんだろ、めんどくせえ」

ふてくされるような顔で言われるが、俺は即座に却下。すると特大のため息が吐かれた。

「なんで分かんないかなあ……ほんと、そういうところも変わらない」

「? なんか言ったか?」

何かを呟いていたが、俺の耳には届かなかった。あかりはこちらを見てまた口を開く。

「なんでもないし。とにかく、今日はもう少しいるんだからね。ちゃんと最後までお世話させなさい。じゃないと、おばさんになに言われるか分かんない」

「俺は一人じゃ何もできねえガキか」

「だから、おばさんはあたしにお願いしてるんでしょ?」

「どういう意味だコラ」

「ふふ、自分で考えなさい」

あかりは笑いながら、食卓に並んだ空の皿を集めて立ち上がる。それから逃げるように台所に向かった。俺はその姿を見つめ、それからまたテレビの方へと視線を戻す。

「そんなに心配なら、カイトさんが家まで護衛してあげればいいじゃないですか。あかりさんはそれを望んでいたんじゃないんですか？」

「しばらく黙ってたと思っただけで急にでてきやがったなてめえ。いいから失せろ……つて」

視線とテレビの延長線上に立っていた自称・魔法少女が話しかけてきて、ほぼ無意識に反応してしまった。咄嗟に台所の方を向くと、あかりは首を傾げながらこちらを見る。くる。

「魁人、いま誰かと喋ってなかった？」

ぎくり、と漫画のような効果音がどこから聞こえた気がした。あかりと話していた

所為で完全にこのクソガキの存在が頭から消えかかっていた。やべえ。

「何やってるんですかカイトさんっ。早く誤魔化してくださいっ」

てめえが急に話しかけてくるからだろうが、とも口に出して言えないのがもどかしい。事の発端はこの金髪女の所為かもしれないが、今は完全に気を抜いていた俺のミス。

「い、いや今のはあれだ。テレビに向かってツツコんだだけだ」

頭をフル回転させて何とか口にしたその言い訳。自分でも相当下手だと思った。

「ふーん。ていうかき、魁人」

俺の言い訳を流すあたり。マズい、これは完全に疑われてるパターンのやつだ。ならばはどんな風に誤魔化せばいい？ ダメだ。こんな時に限っていいアイデアが全然浮かんでこねえ。くそ、どうすりゃいい。



そして、新しい言い訳を吐く前にあかりは再び口を開いた。

「大きい平皿つてどこにある？ お母さんが林檎を持っていけつてうるさかったから、いっぱい持つてきちゃった。もつたいないからたくさん食べてね」

その言葉を聞いてから肺から二酸化炭素がすべて抜け切るんじゃないか、と思うほどデカい息を吐く。

「平皿？ 上の棚に入ってるんじゃないのか」

「ん、分かった。よいしょつ、と」

自称・魔法少女とともに安堵しながら、適当にそう答えるとあかりは何を気にするわけでもなく、頭上にある棚を開けて平皿を探し始めた。

「今のは危なかったですね。カイトさんはもう少し、私は何たるかを理解するべきです」  
ため息とともにぶつけられる、そんな悪態。ここで言い返せばまたさつきと同じ流れ

になつてしまうため、声帯の一ミリ手前まで来た言葉をグツと飲み込んだ。

「うー、ん……あつたけど取れない。ねえ魁人、ちよつとこれ取つてー?」

台所からそんな声が聞こえてくる。どうやら棚の位置が高くて皿が取れないらしい。

「はっ、いつになつてもチビのままだなお前」

「うわ、なんでそんな失礼な事を平然と言えるかなあ。もういいし。一人で取るから」

バカにするようにそう言うと、あかりはムキになつてさらに手を伸ばす。あいつは女子の中では平均だが、俺からすればやつぱり小さい。胸も魚が捌けそうなくらい平らだし。これを言ったら果物ナイフが高速で飛んで来そうな気がするので黙つておく。

仕方なく椅子から立ち上がり、台所に向かう。これ以上あかりを不機嫌にさせたら面倒くさい事態になるのは目に見えている。そうなる前に、たまには素直に言う事を聞いてやるのも悪くはない。そう思い、俺は背伸びをしているあかりに近づいた。

「あ——っ」

ああ、そうだとも。猿に烏帽子なんて諺があるように、身の丈に合わない真似をする  
と口クな事が起きないのも、ちゃんと分かつてる。

「あかりっ！」

台所に足を踏み入れた瞬間、棚から数枚の皿が降り落ちてきた。当然、その下には皿  
を取ろうとしていたあかりがいる。いくら落差が無いと言つても、そこから落ちてきて  
いるのは硬いガラス皿。それが頭に当たればどうなるかは、誰だつて想像できる。

咄嗟に前に向かって倒れ込み、棚の真下にいたあかりの身体を押し倒した。

「……………」

突然の事だったから、これ以外の方法を思いつけなかった。だから仕方ない。そう自  
分に言い聞かせながらあかりの上に覆いかぶさり、床に落ちた数枚の皿が割れる音を聞  
いた。

「だから気を付けろつつたろ、ばか」

超至近距離にいる幼馴染に向かって、俺は言う。しかし、これは体勢が悪すぎる。咄嗟の判断だったとはいえ、こんな押し倒したような姿勢のままではさすがに心が乱れる。

「ご、ごめん。大丈夫？」

「なんとかな。皿は犠牲になつたみてえだが」

謝ってくるあかりに、少しだけ緊張しながらそう答えた。この状態が悪いのなら、すぐに離れればいい。なのに、こんな時に限って俺の身体はここから動く事を拒んでくる。

目の前にある幼馴染の顔。見慣れているはずなのに、今はそこから目が離せなくなつた。

近くだからこそ感じる、甘い果物のような匂い。それが実際の果実ではなく、あかりのものだと認識した時、無意識に心臓が高鳴った。何やってんだ俺。らしくもねえ。こいつを女として見た事なんて、今まで一度も無かつたのに。なんでこんな時に。

それから数十秒間、むず痒い空気が台所に漂う。俺も動けずにいたが、あかりも仰向けになった状態のまま、頬を仄かに赤く染めてこちらを見つめてきた。

いつまでもこのままじゃ色々マズい。そう思い、金縛りにあつたかのような状態の身体を無理やり動かそうとした時、ひとつの声が静寂をそつと破った。

「……………魁人」

あかりは俺の顔を見つめて名前を呼んでくる。それがあまりにも切なげな声音だったため、こいつはもしかしたらこれから泣くんじやないだろうか、と少しだけ心配になった。

そうして数秒の間を空けて、あかりは再び口を開く。

「魁人はどうして、不良になっちゃったの？」

耳を通り抜けたのは、そんな突飛な質問。俺は答えないまま言葉の続きを待った。

「見た目を変えたって、何も変わってないよ。誰にも分からなくても、あたしは分かるも

ん」

「あ？ ……………んなわけ、ねえだろ」

その言葉を否定すると、あかりは首を横に振る。

「そんなわけある。こんな髪型にしても、他の高校の人たちと喧嘩ばかりしてても、学校で一人だけ浮いてても、魁人は魁人のまんまだよ」

そして幼馴染は言い切った。俺以上に俺を知っている、とでも言いたげな表情を浮かべて。

「だから教えてよ。何が魁人を一人にさせてるの？ 何がそんなに気に食わないの？」

それでも。

「誰にも言えないなら、あたしにだけ言つてよ。もつとちゃんと話をしてよ。魁人がいつも一人で居るの、見てるあたしだって悲しいんだよ？」

あかりは目尻に薄い涙を浮かべながら語りかけてくる。それを見て、本心でそう言っ  
てくれているのは痛いほど理解できた。これでもか、というほどに強く。

それでも。

「魁人が頼ってくれたら、あたしは何でもするよ？　後戻りできないっていうなら、あ  
しがちゃんと手伝うから」

それでも、俺は。

「……………言いてえ事は、それだけか」

こいつが欲しいと望んでいるものを、簡単に手渡すわけにはいかなかった。

あかりの声に被せるようにして、俺は言った。こいつはたぶん、黙っていたらその心  
情をいつまでも語り続ける。そんなもん、今は一言たりとも聞きたくない。

「余計なお世話だ。てめえにんなこと言われなくても、全部分かってんだよ」

「なら」

「だからこそ、俺に介入してくんじゃねえ。突き放してんのが分かってんなら、わざわざ近寄ってくんじゃねえよ馬鹿が」

そう言った瞬間、あかりは目を大きく開き、それから唇を嘯む。その目尻から透明な粒が落ちたのを、俺は見逃さなかった。

「……………どう、して」

「てめえには関係ねえだろ」

「関係あるよ。なんで、そんな悲しいこと言うの。おかしいよ」

涙声か耳を通り抜けた途端、思考は一気に冷たくなっていく。それを自覚して、少しだけ安心した。ああ。これでいつも通りだ。

いつも通り——最低の自分だ。

「てめえが俺をどう見ようが興味もねえけどよ、俺が変わってねえわけがねえだろうが」



あとはもう、機械的に喋ればいい。優しい幼馴染を傷つける言葉だけを選んで、ただそれを口にし続ければいい。それだけで、俺はいつも通りでいられる。

「俺が一人で居るのを見ると悲しい？ 笑わせんじゃねえよ。てめえに哀れまれたつて、こちとら悔しくもなんともねえんだよ」

誰が紡いでいるのか分からないこの言葉。だがそれは確かに、俺の口から零れていた。

「何がそんなに気に食わねえのかって？ んなもん決まってるんだろ。俺の身の回りにあるもん全部だよ。学校も、この家も、何もかもくだらねえから、こっちから離れてやってんだ」

言葉を吐く度に、透明な雫が流れていく。それを見ても心が痛まないのは、俺が普通の人間を辞めてしまったからなんだろう。

「なんで、そんな」

「改めて見損なつたか？　ならさつさと出てけ。もうこれ以上、俺に付きまとうんじゃねえ」

それが最後。そう言つて、立ち上がった。

「……………そつか」

そんな囁きが聞こえてくる。どこか諦観のようなものが含まれたような、その声音。

「ごめんね。あたし、そんなに魁人が苦しんでるなんて、知らなかつた。もつと軽い悩みなんだと思つてた。けど、ちがつたんだね」

「……………」

「分かつた。魁人があたしに近寄つてほしくないなら、そうする。またいつもみたいに見えるだけにするよ。……でもね」

あかりは立ち上がり、着ていたエプロンを脱ぎながらこちらを見つめてきた。その目はまだ、ここに立つ最低の男をしつかりと捉えていた。

「これだけは分かってて。あたしは、いつだって魁人の味方だよ。何回突き放されてもそれだけは変わらないから。だって、あたしは」

あかりはそこまで言って言葉を止め、ふつと微笑みを浮かべる。あんな最低な事を言われてどうして笑えるのか。その神経が、腐った俺にはどう頑張っても理解できない。

「なんでもない。じゃあ、帰るね。お邪魔しました」

そう言うってから、あかりは脱いだエプロンを学生鞆に入れ、足早に家を出て行く。台所に立ち尽くしたまま、玄関の扉が閉まる音に耳を澄ませていた。

やがて、家の中に静けさが戻ってくる。聞こえてくるのは点けっぱなしになっているテレビの音声だけ。ときおり聞こえてくる笑い声に、何が楽しいのか、と苛立った。

「どうして、あんな事を言ったんですか」

「……………」

「何も分からない私でも分かりました。今のは、どう考えてもカイトさんが悪いです」

いつの間にか傍に立っていた自称・魔法少女は、立ち尽くす俺にそう問いかけてくる。

「あんなひどい事を言われたら誰だって悲しみます。あかりさんはカイトさんを思っ  
てああ言ったのに、なんでそれを突き放したんですか」

だいたい予想していた通りの言葉をかけられ、心の中で笑う。

「てめえには関係ねえだろ」

「またそれですか。カイトさんも子どもですね。とりあえずそう言っておけば誰もあな  
たに近寄ってこないとしても、本気で思っているんですか？」

「なんだと？」

今度は予想しないベクトルの悪態を吐かれ、思わず反応してしまう。

自称・魔法少女は嘲笑うような笑いを浮かべ、俺の顔を見上げてきた。

「だってそうでしょう。本当はそんな事を思ってもいないのに、軽い一言だけで誰かを

突き放せると勘違いしてる。そんな人を子どもと形容せず、なんと云えばいいんですか？」

「——っ」

「ああ、やっと手を出してきましたね。いいでしょう。それでこそやんきーさんです。喧嘩は口ですするよりも、身体ですする方が好きなんですよから」

分かったような口をきくクソガキの胸ぐらを掴むと、奴は動揺など微塵も見せずにそう言ってくる。緋色の両眼に心を見透かされているような気がして、またさらに腹が立った。

「てめえに俺の何が分かる」

「分かりません。だから教えてください。あかりさんが諦めたのなら今度は私が訊く番です。カイトさんは、どうしてそんなに捻くれてるんですか？　なぜ、そこまでして一人になろうとするんですか？　それが分かれば、私はあなたを擁護できるかもしれません」

「だから、てめえには関係ねえんだよッ！」

淡々とした口調で語る自称・魔法少女に向かつて拳を振り上げる。俺は、本気でこいつを殴るつもりだった。脅しでも何でもなく、殴ってやるつもりだった。なのに。

「? どうしたんです、カイトさん。私を殴りたいんじゃないんですか? なら、早く殴ってください。今回は魔法を使わないでいてあげますから。ほら、どうぞ」

なのに、誰かの記憶が俺の邪魔をする。

「……解けません。あなたは結局、何がしたいんですか? 一人になんてなりたくないのに近づいてくる相手を突き放して、自分を虚仮にした相手を殴る事さえできないだなんて」

振り下ろすはずの腕は、どこに当たる事もなく宙に浮いている。

その拳のすぐ近くにある幼い顔は、目の前に立つ奇妙な男をただジツと見つめていた。

「私にはとうとう理解できません。あなたが何を考えているのかも、何を求めているの

かも」

その声を聞いても、止まった拳は動かない。どれだけ力を入れてもビクともしなかった。それはまるで、悪い魔女に石になる魔法でもかけられたみたいに。

「なるほど。またあなたの事が少し分かりました。その歪な生き方こそ、カイトさんをカイトさん足らしめているのですね」

「うるせえ……」

「だったらいつそ全部教えてください。さつきあかりさんに言った言葉が、カイトさんにとっては正しかったという事を。私を殴ろうとしても殴れない、その理由を」

「黙れつつてんだろツ！」

動かない腕を下げ、言葉だけで自称・魔法少女を威嚇する。当然、そんなものではないの女は動じない。それが分かっているのに、こいつの思い通りになるまいと喚き散らす。

それがどれだけ醜い姿に映るのかも、知っているのに。

「仕方ないですね。カイトさんが教えてくれないのなら、おとーさんとおかーさんに教えてもらう事にします。あなたを生んだあの二人なら、その理由を知っているでしょうから」

「……………勝手にしろ」

「はい、勝手にします。でも、ひとつだけ知っていてください」

自称・魔法少女は微笑み、こちらを見つめてくる。それはどこか、数分前にあかりが浮かべた表情に似ているような気がした。

「私の主は、カイトさんです。あなたがどんなに歪な人間だとしても、その事実だけは変わりません。この世界にいる限り、私もあなたの味方であり続けます」

その言葉に何も言い返す事はせず、俺はリビングを出てそのまま玄関へと向かった。

自称・魔法少女が後ろをついてくる気配はない。おそらく、あいつは両親の帰りを待つて俺が不良になった経緯をあの二人から聞こうとしているんだろう。

「……………くそが」



だけど、今はそんなのどうだっていい。

## 第十話

## ◇ Interlude

夜の駅前。人々の雑踏が溢れるその場所に、一人の少女が歩いてきた。

少女はフラフラと蛇行しながら、どこかへ向かっている。彼女が明らかに普通の状態ではないのは明らか。だが、気にかける人間はそこにいなかった。

少女は人目を憚らず両眼から雫を零し、頬を濡らしている。それでも慰める者は無い。ただひとつの風景として、彼女はそこに存在していた。

「かい、と……っ」

誰かの名前を呼ぶ。しかし、返って来る声はない。だと言うのに、少女は母親を探す迷子のように、その名を呼び続けながら歩いていった。

「おっと」

「——あ、っ」

「危ねえなあ。ちゃんと前見て歩かねえと怪我すんぞコラ」

「ご、ごめんなさい」

「大丈夫ですか佐久間さん。怪我は無いつすか」

泣いていた少女は、向かい側から歩いて来た制服の男子にぶつかり、立ち止まる。これが見知らぬ普通の人間同士のやり取りだったなら、何事もなく流されていた出来事だったかもしれない。

だが、ぶつかられた制服の男子はそうする事を許さなかった。

「お前、主藤魁人の彼女だな」

「え？」

その名前を聞いて少女は驚き顔を上げ、訝しむような視線をぶつかった男子に向けた。

そして、彼女は気づく。

「はっ、こりやちようどいい。あいつを誘き出すのにはこいつを連れてくのが一番手っ取り早いって、西高の安藤が言ってるからなあ」

金髪、モヒカン、刈り込みを入れた坊主頭。耳や鼻に開けられたピアス。周囲に漂う香水の匂い。それらが普通の高校生と異なっているのは、一目見れば分かるはず。

少女の前に立つ男子たちは全員、不良だった。

「あ……」

「主藤魁人の彼女……ひはっ、そりゃあよかったですねえ佐久間さん」

「やりましょうよ、佐久間さん」

「今度こそあの狂犬をやる時ですよ」

体格の良い金髪の男子に向かって、周りの不良達は囁し立てるかのようになんて言う。その声に賛同すると決めたであろう金髪の男子は、口元に不敵な笑みを浮かべた。

「いいじゃねえか、やってやろうぜ。連れて行け」

そして間もなく、駅前から少女の泣き声と複数の足音は消えた。

◇ Interlude End

派手な光が無数に交差するネオン街を一人歩く。周囲にあるのは千鳥足としつこい客引き。そんな中を宛てもなく進む。何か目的があるわけじゃない。ただ、今はこの町で一番騒がしい場所にいた方が、熱を持った心が冷えてくれる気がした。

だけど、それも気がしただけ。家を出て数十分が経っていても、沸騰した熱は下がらなかった。むしろ時間が経過するほど苛立ちは増し、思考はますます乱れていく。

『魁人はどうして、不良になっちゃったの?』

周りは騒がしいはずなのに、誰かの声が聞こえてくる。舌打ちをしても、その言葉は耳元から離れていかない。頭の近くを飛び回る小蠅のように怒りを加速させた。

『中身は昔と同じ、優しい魁人のままなのに。なんで周りの人たちから距離を取ってるの?』

また雑踏の中から聞こえてくる問いかけ。唾を吐こうが、声は俺を追い駆け続けてくる。

『またそれですか。カイトさんも子どもですね。とりあえずそう言っておけば誰もあなたに近寄ってこないとでも、本気で思っているんですか?』

次の言葉は声音が違った。聞き覚えのある、幼い女の声。

『分かりません。だから教えてください。あかりさんが諦めたのなら今度は私が訊く番です。カイトさんは、どうしてそんなに捻かれているんですか? なぜ、そこまでして一人になろうとするんですか? それが分かれば、私はあなたを擁護できるかもしれません』

近くに置かれていたゴミ箱を蹴り飛ばし、中身を歩道上にぶちまけても、腹の虫は叫

びを止めない。お前の苛立ちはそんなものでは治まらない、と虫は訴えてくる。

『これだけは分かつて。あたしは、いつだって魁人の味方だよ。何回突き放されてもそれだけは変わらないから。だって、あたしは』

『私の主は、カイトさんです。あなたがどんなに歪な人間だとしても、その事実だけは変わりません。この世界にいる限り、私もあなたの味方であり続けます』

「うるせえんだよっ！」

心の中だけでなく、実際に叫んでもその言葉たちは消えない。消えない。消えない。掻き消そうとすればするほど、大きな染みとなって俺の中に留まろうとしてくる。

昨日の夕方まで正常だったはずの感覚は完全に狂わされた。それもこれも、全部あのクソガキの所為。あいつと出会ってから、俺は俺じゃなくなってしまっている。

取り戻したいのに、それがどこに行ってしまったのか分からない。宛てもなく彷徨って見つかるものではないのは、痛いほど分かっている。

それでも、あの家に居続ける事は腐り切ったこのプライドが許さなかった。誰かに助けを求める事さえも、捻くれたこの性格が拒み続けていた。

『——お兄ちゃんっ!』

今度はそんな幻聴が聞こえ、自然と立ち止まる両の足。

そして、自分が今どこを歩いているのかを忘れていた事に気づく。飲み屋街の喧騒が少し遠く聞こえる、人が一人通れるくらいの幅しかない狭い路地。気づけば、そんな場所を歩いていた。

「……………何やってんだ、俺」

眩きを聞く者は誰もいない。あるのはゴミの山と誰かが放置していった数台の自転車。光り輝く人間がそういった明るい世界に引き寄せられるように、誰の役にも立たない屑は、こんなクソみたいな場所に引っ張られるのだろうか。

なんて、馬鹿な事を考えている時、静かな路地の中に携帯の音が鳴り響く。学ランの中に入れていたそれを取り出し、ディスプレイを見つめた。そして、そこに表示された名前を見た瞬間、思考は勝手に停止する。

——乾 あかり——



「……………なんだ？」

嫌な予感がする。どうしてこのタイミングであいつが俺に電話をかけてくる。この携帯に登録されている連絡先の中で、最も電話がかかってこないであろう相手があの人のはず。だというのに。

数秒間、震え続けている携帯の画面を見つめる。暗い路地に響く着信音は、俺に向かって『早く出ろ』と催促してくるような気がした。

気づかなかった、という理由で無視をすればここは何事もなく乗り切れる。だが、もしここで出なければ何か後悔するような出来事が起きる気がしてならない。息を吐き、それからディスプレイに表示されている通話の部分に触れた。

「……………」

沈黙が流れる。電話は確かにつながっているはずなのに、何も聞こえてこない。

俺からあいつに話す事は何も無い。たぶん向こうも同じ事を思っているのだろう。だったら、このまま声が聞こえてくるまで待つていればいい。

『主藤、魁人か?』

だが、聞こえてきたのは俺が待っていた女の声では無かった。

「……………あ? 誰だ、てめえ」

『はっ、分からねえのも無理はねえ。これはお前の彼女の携帯なんだからな』

低い声で話してくる電話口の相手に、再び問う。

「質問に答えろ。てめえは誰だ」

『まあ聞けよ主藤魁人。ついさつき駅前を歩いてたらよ、この女が俺にぶつかって来やがったんだわ。顔は悪くなかったから見逃してやろうかと思っただが、よく見たら西高の安藤から教えられたお前の彼女だったじゃねえか』

「……………」

『それで、いい機会だから遊んでやろうと思っただけで連れてきたんだよ。どうだ。お前もこっちに来いよ。今ちようど盛り上がりだ。はは、いい感じに弄ばれてる』

ぜオイ』

その下衆な声と笑い声が耳を通過した瞬間、全身にスイッチが入るような感覚がした。

こいつは北高の佐久間。そして、近くには奴の仲間がいる。あれだけ派手にしばき倒してやったのに、また性懲りもなく俺に喧嘩を売ってきているらしい。

しかも、今回関わっているのは俺だけじゃない。

あいつらは、あかりを人質に取っている。

「……………待つてろ。今からぶっ殺しに行つてやるよ」

『おお、やっぱやる気になったか。なら早く来い。俺らのアジトの場所は分かるよな?』

「あの薄汚れた廃工場だろ。すぐに行くからその間に遺書でも書いてろ」

電話を切り、俺は路地に捨てられてあつた自転車を立たせ、それに跨る。どうやら左ブレーキが壊れてるだけで、自転車としての役割は果たしてくれそうだった。

「だから早く帰れつったんだ、バカ」

お前は何回連れ去られれば気が済むんだっつーの。

## 第十一話



捨てられていたおんぼろの自転車を飛ばし、街外れにある廃工場を目指す。そこは俺がいた繁華街から距離にして五キロくらい位置にある。普通なら十五分以上はかかるだろうが、今日は十分もかからなかった。

溢れてくるアドレナリンのおかげで疲れを感じない。考えていた事もすべて忘れた。今はただ、あかりを連れて行った北高の連中をぶん殴る事しか考えられない。

そうして人気の無い廃工場の前に到着し、自転車を放り投げて奴らが待つ場所へと走る。

「あかり………」

あいつが不良共に何をされてるのかは、だいたい想像がつく。さっきの電話からして、まず間違いないだろう。それを考えるだけでさらに全身に力が入った。

そして、突き当りにある鉄の扉を蹴り破り、俺はアジトの中へと足を踏み入れた。

「——やったあつ！ あーがりがいいーっ！」

「うわっ、またあかりちゃんが大富豪かよー」

「かーっ、あかりちゃん引き強すぎだろ。二連ちゃんて革命返しとかあり得なくね？」

「ふふんっ、運の良さなら負けなんだからっ。ほら大貧民の佐久間くん、早く私に良いカードを渡しなさ………あ、魁人だ」

そして、アジトの状況を目にする。そこには想像を遥かに越える酷い現実が待っていたという事も知らずに。

「……何してんだ、てめえら」

「おお、来たか主藤魁人。なんだよ、思ったより早かったじゃねえか」

「悪いがちよつと待ってろ。次のゲームでラストにするからよ」

「てかお前の彼女、運良すぎな。もう十回以上やってんのに貧民にもならねえんだよ」

と、俺の質問を無視して奴らはそう言い、机の上に置かれたトランプの方へと顔を向ける。今の言葉だけでこの状況を理解できる奴がいたら、そいつはきつと魔法が使えると思う。

「……………大富豪？」

「だから、あかりちゃん楽しんでるつつつたる」

「みんな楽しんでるって言ったら大富豪以外あり得なくね？ なに考えてんだお前」

「てめえらが何を考えてるかの方が理解できねえつーの」

そう言つて俺は頭を抱えた。しかし、そんな俺を見ても、廃工場で屯していた不良たちは挙つて首を傾げるだけだった。マジで何やってんだこいつら。頭大丈夫か。

アジトの中に入った直後、目にしたのは北高の不良たち数人と人質に取られていたはずのあかりが丸机の前に座つて大富豪をしていた光景。他の不良たちはその後ろに立ち、繰り広げられるそのゲームを応援で盛り上げていた。意味が分からない。ヤクでもやってんのかこいつら。

「俺に仕返しするためにあかりを攫って、手箆めようとか考えてたんじゃねえのか？」

「は、はあ？ んなこと俺らがするわけねえだろ」

「こ、こんな可愛い子にそんなひどい真似できるかよ」

「お前こそなに変な事考えてんだよ。変態」

などなど。見た目だけは不良の男共が吐く言い訳の数々。間違いない、こいつらは全員童貞だ。こんな時に世界一どうでもいい事実を知った。頬染めんなつーの、気持ちわりいな。

「じゃあなんでそいつはてめえらについてきてんだよ」

「ん？ なんか普通に遊ぼうぜ、って言ったたら来てくれたぞ」

「お前を誘き出すつもりもあつたんだよ。途中から大富豪大会になつたけどな」

聞けば聞くほど、理解できなくなっていくこの状況。帰つてもいいだろうか。そう思いながら、俺をここに呼び寄せた張本人に顔を向ける。



「……………」

あかりは目を背け、こちらを向こうとしない。たぶん、というか確実に、あいつはさっきの事を気にしている。こんな場所でもそうしているのはつまり、そういう事。

「だがまあ何にせよ、お前を誘き出す事はできた。あかりちゃんには悪いが、俺たちの目的は主藤魁人をボコる事だ。ここに来た以上、お前も覚悟はできてんだろな」

北高のリーダー・佐久間は手に持っていたトランプを机に置き、立ち上がる。それを見た他の不良たちも、こちらを見ながら臨戦態勢を整えていた。

「上等だよクソ野郎。またこの前みてえに返り討ちにしてやる」

「言うじゃねえか。けど、今回するのはタイマンじゃねえ。お前に負け続けて俺ら北高のメンツも潰れまくってんだわ。だから、今日はここにいる全員で相手してやるよ」

佐久間が学ランを脱ぎながらそう言うと、近くでそれを聞いていたあかりが顔を上げる。

「ま、待って佐久間くんっ。それは」

「悪いねあかりちゃん。いくらあいつが彼氏でも、俺たち不良には守らなきゃならないプライドってものがあるんだよ。同じ相手に負けたままじゃいられないんだ」

声をかけたあかりに、佐久間は優し気な口調で答える。

「それはあいつだつて同じ。何人相手だつて、不良は逃げるわけにはいかないんだ。それが自分の彼女の前ならなおさら。そうだろ、主藤魁人」

「うるせえバーカ。あと彼女じゃねえっつーの」

「え、マジ？ そうなの？ じゃああかりちゃん、俺と付き合ってくださいっ！」

「ごめん佐久間くん。無理です」

「佐久間さんが倒れた!？」

「おいっ、誰か起こしに行けっ！」

あかりに一瞬でフラれてぶつ倒れた佐久間を、不良数名がダツシユで立ち上がらせに行く。喧嘩でしか関わった事は無かったが、あいつは思ったより良い奴なのかもしれない

い。つて、やり合う前になに考えてんだ、俺は。

「……く、やるじゃねえか主藤魁人。喧嘩の前に精神攻撃で俺を弱らせてくるとはな」  
「ここにいる奴ら全員知ってるかも知れねえが、俺は何もしてねえよ」

不良たちに支えられて立ち上がり、吐血した血を手の甲で拭いながらそう言うってくる佐久間。奴を見る部下たちの顔は明らかに死んでいた。

「よし、じゃあ行くぞお前ら。相手はあの狂犬のリーゼントだ。手加減したらどうなるか、お前らが一番分かかってんだろ」

その名で呼ぶんじゃねえよ、と心の底から叫びたがったが、場がシリアスな雰囲気になったのを察し、開きかけた口を閉じた。それから俺はいつもの姿勢を取る。

ざっと見て、相手は二十人弱。昨日、公園でやり合った時と数はほぼ変わらないが、その中にはリーダーの佐久間がいる。奴とやり合うのはこれで二度目。前はタイマンで俺が圧勝したが、喧嘩のやり方は既に知られている。加えて、今回は他の不良たちも相手にしなければならぬ。いま分かるのは、無傷ではここから出られないという事だ

け。

離れた所に立つあかりがこちらを見ている。だけど、俺はそつちを向かなかつた。いま顔を見てしまえば、また揺らぎが出てしまう。言いたい事は後で話せばいい。

「来いよ、佐久間」

俺が右手でかかってくるようアピールすると、北高の連中は一斉に駆け寄ってくる。ああ、分かっている。こんな大人数を一人で相手にして、勝ち目なんて最初から無い。でも、しょうがないだろ。俺には、どんな状況でも立ち向かう選択肢しか選べない。それが、大切な奴の前でならなおさらだ。

「魁人っ！」

あかり  
あいつの前で、みつともなく逃げる事だけはしたくない。俺がここで喧嘩をする理由は、それだけだった。



喧嘩が始まって数分が経過した。興奮している所為か、時の流れが遅く感じる。俺としては数分の出来事かもしれないけれど、本当はもつと長い時間が経っていたのかもしれない。

「な、なんだこいつ。なんで倒れねえんだよ」

「こっちはこの人数だぞ。しかも何発も当ててんのに、なんで立ってられんだ」

肩で息をしながら、そんな声を耳にする。周りには十人ほどになった不良たちが俺を困うようにして立っている。残りの奴らは離れた所で地に伏せていた。誰がそうさせたのかは、血だらけになったこの拳を見りや分かるだろう。

始まってから数分で何人かノックアウトしたが、その勢いが最後まで続かないのは自明の理。マラソンランナーがスタートから全力で飛び出したら終盤でペースが落ちるように、俺も全員を倒す前に疲れ果てていた。

だけど、一度も倒れてはいない。何度殴られようとも、蹴りを入れられようとも、身体を地面につける事だけはまだしていなかった。これはたぶん、男の意地。そんなくだらない言葉でしか、こうして立っていられる理由を説明できない。

「んだよ、もう終わりか。主藤魁人」

「……るせえ、まだまだ行けるに決まってる」

前に立つ佐久間に言われ、条件反射のように強がった。俺ほどではないが、佐久間もかなり疲労している。前のように一対一だったら確実に勝てる。それは何度やつても同じ。でも、この大人数を相手にしながらではあまりにもハンデが大きすぎる。しかし、そうも言っていられないのが辛いところ。

「らあッー」

右斜め前から来た奴の蹴りを躲し、鳩尾に右腕を叩き込む。奥まで届いた、確かな感触。予想通り、そいつは気を失うようにして仰向けに倒れた。

「……ほら、どうだ佐久間。てめえら全員をぶっ飛ばすまで、俺は絶対に倒れねえ」

顔に無理やり笑みを浮かべながら、俺は言う。このでまかせがどれだけ奴らに響いた

のかは知らない。少なくとも、数人が驚愕の表情を浮かべたのは目に映った。

「やっぱ強えな、お前は。狂犬のリーゼントと呼ばれるだけはある」

「その名前で呼ぶんじゃねえ。ダサくて恥ずいんだよ」

「だが、それもここまでだ」

「あ？ どういう意味だ？」

「こういう事だ」

佐久間はそう言って、スマートフォン画面をこちらに見せてくる。

「ゲームオーバー。この時間まで俺たちを全滅させられなかった、お前の負けだ主藤魁人」

そこに映っていたのは、何かをカウントしていた時間。それがちょうどゼロになった瞬間、スマートフォンからアラーム音が鳴り響く。

そして、その音に反応するように、どこからともなく現れた不良たちが俺を取り囲んだ。ここに来ての増援。その数はおそらく、ここまで倒した三倍以上はいる。

「お前を倒せば俺たち北高の名前は腐らねえ。だから今日は潔く負けれくれや」

この疲労感と怪我の状態で、こいつら全員を相手するのはどう考えても不可能。それは他の誰でもなく、俺自身が一番分かってる。今までは何人が相手でも、なんとか形勢逆転する手段を見つけてきた。そして、俺はそのすべてで勝ってきたんだ。

「魁人っ！」

あかりが俺の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。それが少し鼻声だったのはきつと、あいつが泣いている所為だろう。泣かせているのはたぶん、俺なんだろうけれど。

ガキの頃、上級生数人にいじめられていたあかりを助けたあの時だって、俺は絶対に倒れなかった。泣きながら、ボロボロになってもガキ大将共に立ち向かっていた。

「……………ははっ」

やっぱり、あいつが言った通りかもしれない。今の俺はあの頃と何も変わってない。



髪型を変えても、何をして俺は俺のまま。いくら虚勢を張っても、そう簡単に人間は変れない。

だから、こんな状況でも絶対に負けは認めない。

「なめんじゃねえぞクソ野郎ッ！」

そう叫び、俺は不良の群れに突っ込んで行く。

そして、声に呼応するようにその群れはこちらに向かってくる。

絶対に勝ち目はない。それでも立ち向かうのは、果たして利口と言えるのだろうか？

今はそんな事はどうでもいい。ただ、限界を迎えるまで戦い続ける。

それが、どんな状況であろうとも。俺はそうやって現実を見ないようにしてきたんだ。

大切なものばかりを奪って行くこんな世界と縁を切るために、俺は現実から目を背けて生きていこうとした。

それが間違いだって事も、分かっていたのに。

それが、自分から地獄に向かって歩いて行く行為だっていう事も、知っていたのに。

「——やれやれ。私の主はどうしてそんなに無鉄砲なんでしょうか。手助けが要るのなら、素直に助けを求めてくれればいいというのに」

「……………あ？」

「知っていますか？ 無謀と勇氣は異なるものなんです。あなたがやっているのはただの無謀です。そんなもの、私の主であるあなたには必要ありません。そうでしょうか？」

唐突に聞こえてきた、その声。次の瞬間、周りにいた不良たちが爆撃を受けたかのように吹き飛んで行く。俺はすぐに声がした方向へ顔を向けた。

そこには予想通り、ピンクの衣装を身に纏った金髪の女が立っていた。

「……………てめえ、何しに来やがった」

「懐いた動物は主が敵に教われている時、主を守るために敵に噛みつくという話を聞いた事があります。だから私も、カイトさんを守るために噛みつくこうと思っただけです」

微笑みながら馬鹿みたいな事を言うその女。例の如く、ここにいる他の奴らにこの会話は聞こえていないけれど、どうやら北高の連中はそれぞれでは無いらしい。

「な、何が起きたっ!？」

「気を付けろっ。こいつ、昨日みてえにまた何かやるつもりだ!」

金髪女の魔法によりぶっ飛ばされた奴らを見て、北高の連中は明らかな焦りを見せ始める。今のは俺が何かをやったわけではないが、あいつらにはそう見えたんだろう。

「ちっ、余計な真似しやがって」

「戦いを好むやんきーさんには、こういう時にこそ私が必要なんじゃないやありませんか？  
だというのにこんな無謀を犯すだなんて。カイトさんはもう少し、私を頼るべきだと思います」

自称・魔法少女は腕組みをしながらそう言ってくる。奴の言っている事は十割正しい。だが、俺の中にある固定観念やプライド、その他諸々が心を素直にさせてくれなかった。

「うるせえ。こんな奴ら、俺一人で十分だっつーの」

「ふふ。じゃあこのまま何もせずに見ていいですか？ カイトさんがあかりさんの前で情けなく他のやんきーさんに負けていくところを、じっくり眺めてあげますよ」

「嘘だ。黙っててめえも手伝え」

「それでこそ我が主です。いいでしょう。その願い、私が果たしてみせます」

この捻くれた性格もこいつは二日で理解してくれたらしい。ありがたいが、ムカつく事に変わりはない。

「行くぞ。足引つ張ったら後でぶっ飛ばしてやる」

「カイトさんは誰にもものを言っているんですか？ いったい私を何だと思っっているんです」

手の関節を鳴らしながらそう言うと、気に食わなそうな声が返って来る。俺はその質問にすぐには答えず、少しの間を空けてから口を開いた。

「どっかの世界から来た、クソ生意気な魔法使いだろ」

「ぶつぶー、不正解です。もう、帰ったらちゃんとレクチャーしてあげますからね」  
「誰が聞くんだっつーのそんなもん」

そして再び、不良たちは散り行く桜の花びらの如く、派手に宙を舞った。

——この喧嘩の後、俺は数十人の不良を一人で倒した伝説の男として、この町の学生たちに名前を覚えられる事になる。

そして狂犬のリーゼントという二つ名は、伝説のリーゼントに格上げされたらしい。

## 第十二話



それから一時間ほど経過し、俺はあかりを自転車の後ろに乗せて廃工場から離れた。結果的に俺は自称・魔法少女の力を借りてあそこにいた不良たちを全員叩きのめし、二度とあかりに近づかないようリーダーの佐久間にこれでもかというほど釘を刺してからアジトを後にした。でもなんとなく、あいつはまたあかりに接近してくるような気がする。

深夜の町を自転車で進んで行く。既に眠りに落ちた町はシンとしていて、日中では感じられない涼しさを含んだ夜風が吹いていた。

あのアジトに着いてから今まで、あかりとは一言も口をきいていない。言いたい事が無いわけではないけれど、いま何かを言えばこいつは北高の奴らに付いて行った事に対して、罪の意識を感じてしまうんじゃないか、と思った。

だから、今日のところは何も言わないでおく。あかりから俺に言いたい事が無いのならそれで構わない。とにかく、二人とも無事でよかった。

そうして、俺たちを乗せた自転車はあかりの家の前に到着する。

「ほら、雅さんが心配すつから、早く家に入れ」

「……………」

「おい」

反応が無かったので呆れながらその名前を呼ぼうとした時、後ろから両腕を身体にまわされる。あまりにも突然の事過ぎて、一瞬だけ息が詰まった。

それからすぐ、背中に顔を当てられる感触がして、鼻をすする音と泣き声のようなものが耳を通り抜ける。辺りが静かだからこそ、それはよく聞こえた。

しばらくのあいだ俺は何も言わず、頭上にある街灯がアスファルトに映し出す二人の影を見つめる。そうしながら、その小さな泣き声に耳を澄ましていた。

「ごめんね、魁人」

それから耳に届く、涙混じりの声音。

「また、魁人に迷惑かけちゃった。あんなに気を付けろって言われてたのに、少し魁人に冷たくされたくらいで、もう自分の事なんてどうでもよくなっちゃった」

黙ったまま、その独白の続きを待つ。

「あたし、本当に嫌な女だ。あの人たちについて行ったら、また魁人が助けに来てくれるんじゃないかと思って、わざと断らなかつた。そうすれば魁人があたしを見てくれるって、魁人に優しくしてもらえるって」

そう思ったから、とあかりは小さな声で付け足した。

「でも、すごく不安だった。魁人があたしの事なんてどうでもいいって思ってたらどうしよう、とか。魁人が来るまでの間、ずっとそんな事ばかり考えてた。あんな風に魁人を怒らせちゃったあたしなんて、助ける価値も無いだろうから」

「んな事、ねえよ」



「うん。でも、魁人はやっぱり来てくれた。昔みたいに、あたしを助けてくれた。そんな魁人にね、言わなくちゃいけないって思った事があつたの」

「? なんだよ」

そう問いかけると、数秒の間を置いてあかりは口を開いた。

「……本当はね。あたし、魁人が不良になった理由、分かつてたんだ。さつきあんな事を言つたのは全部、魁人が自分でそれを認めてるかどうか、確かめるためだつたの」

「……………」

「でも、魁人はそれを認めなかつた。だから、今度はあたしから言うね? 魁人は――

――」

そしてあかりはその答えを語り、俺は何も言わずその声に耳を傾けた。

あまりにも的確な言葉の羅列に、ただ黙っている事しかできなかつたのだと思う。

「あたしは全部、分かつてるよ。魁人がこの世界を恨んでる事も。だからこそ、不良になつちやつた事も。いつも、一人で居る理由も……………それでもね」

あかりはそこで言葉を止める。それから腕を解き、自転車の後ろから降りて横に立った。

「魁人がどれだけこの世界をくだらないと思つていても、一人になりたいつて我が儘を言つたとしても——あたしはいつだって、魁人の隣にいるよ」

そして、あかりは俺の横で背伸びをする。

その直後、腫れた頬に柔らかな何かが当たった。

「なーんてね……………えへへっ」

そう言つて、あかりは俺から離れていく。いつもの笑顔を浮かべて、恥ずかしそうに頬を染めながらこちらを見ていた。涙の痕なんて、どこにも見えなかった。

「ばいばい。また助けなくてありがとう。格好良かったよ、ちよつとだけね」

「ちよつ、待つ」

停止していた思考が元通りになり、咄嗟に立ち止まらせようとしたが、あかりは逃げのように家に入って行く。それから俺は街灯の下に一人取り残された。

「……………マジかよ」

熱くなった顔を俯けてしばらく悶絶する。自分が不良になった理由を見破られていた事が恥ずかしくてたまらない。そして、あんな風に言い合いになってもなお、連れ去られた現場に突入した事で、俺があいつをどう思っているのかを知られてしまった。

だから、あかりは最後にあんな事をしたんだろう。ああ、恥ずかしくて死ぬる。

むほおおお、と胸の辺りを掻きむしっていると、誰かが近づいてくる気配に気づいた。

「そういう事、だったんですか」

「……………お前」

「それならそうと、最初から言ってくればよかったじゃないですか。私だって、何もかも不思議に思っていなかったわけじゃないんですからね？」

いつの間にか消えていた自称・魔法少女は、俺の前に立ってそう言ってくる。こいつは今の会話を聞いていたんだろう。

まあ、わざと聞かせるように話してやったんだけどな。

「カイトさん、あなたは。いや、あなたたちは」

「ああ、そうだよ」

何かを言おうとしてきた自称・魔法少女の声を遮り、その言葉を奪う。

既にこいつが知っているなら改めて言わなくてもいい。

でもなぜか、この事実だけはどうしても自分の口からカミングアウトしたかった。

俺が、こいつを家に招いたのは。

両親がこいつを家に住まわせる事を許したのは。

この手でこいつを殴れなかったのは。

そして、俺が不良になったのは。

それは、何もかも。

「俺には——妹がいた」

本当にただ、それだけの理由だったんだ。

「……………だから」

「勘違いすんな。それだけが原因だったわけじゃねえよ。妹がいなくなっただけからもしからくは真面目に生きてるふりをした。あの高校に入れたのも、そのおかげだ」

「それなら、いつからカイトさんはやんきーさんになったんですか？」

「高校に入学すんのが決まってからだ。この髪型にしたのも、ちょうどその頃だった」

自分の頭に手をやり、過去を思い出しながら語る。

今さら隠す事は何も無い。毒を食らえば皿まで、なんて言葉あるように、少しでもその事実を知られてしまったのなら、全部吐き出してしまえばいい。

「家族が三人になったのに、あの両親は何も変わらなかった。あいつらが無理に明るく

振る舞おうとするとところを見ると、世界が全部、欺瞞にしか見えなくなつたんだ。だから俺は、世の中にあるくだらねえもんには中指を立てるために、高校では不良をやるつて決めた」

自称・魔法少女は黙つてこの言葉に耳を傾けている。

「喧嘩なんてあかりに近づいてくる男としかしたこと無かつたけどよ、やつてみたらこれがまた気分が良かったんだ。目の前にいる奴をぶん殴ると、自分が世界から少しずつ離れていく気がした。俺が強い事が分かると、誰も向こうから近寄つて来なくなつた。喧嘩で強え事を証明すればするほど、俺は欺瞞に満ちたくだらねえ世界から切り離されていった。ほんと、マジで最高の気分だったよ。ただ髪をリーゼントにして、喧嘩を売つてくる奴を殴るだけで、こんなクソみたいな場所から自由になれたんだからよ」

皮が剥けて血が滲んでいる右手の拳を見つめながら、言う。

こんなの柄じゃねえのは百も承知だ。けど、こいつには俺を理解する権利がある。

「あの両親が最初からてめえに優しくかつたのも、妹の所為だ。あの二人は間違ひなく、て

めえと妹を重ねて見てた。昨日の晩飯がオムライスだったのは、それが妹の好物だったからだ」

「あの時カイトさんは怒ったのは、そういう理由だったんですか」

「そうだ。だからこそ俺は、お前にあの家から出て行ってほしかった」

「どうしてです」

「死んだ娘と重ねられて見られてんだぞ？　気分が良い訳ねえだろうが。そんな気持ち

悪い家に住みてえなんて、誰が思うんだよ」

妹と重ねて見ているのは両親だけではなく、目の前にいる男も同じ。そう言う事もできず、黙ってその緋色の瞳を見つめた。自称・魔法少女は微動だにせず、ただ俺の目を見つめ返してくる。

そして、しばらくしてから首を横に振った。

「……………いいえ。それは、私があの家から出て行く理由にはなりません」

「は？　なに言ってるんだお前」

「だって、そんなのは些細な事です。あなたたちが私をどう見ていようと、それは私には知れない事。あなたたちが私を受け入れてくれた事実に、変わりはありません」

自称・魔法少女は微笑みながら言う。だが、俺にはその心情が理解できなかつた。

「おかしいだろ。てめえはあの家に住む人間にとって、誰かの代わりでしかねえんだぞ？」

「だから、それは私には関係ありません。あなたたちがどんなファインダーを通して私を見ていても、その景色は私には見えないのですから」

「――」

「私は、あなたたちがどんな過去を抱えていようとも、あの家にいたいんです。もし、私がああの家にいる事で皆さんが妹さんを思い出して笑ってくれるなら、それは嬉しい事です。決して悲しい事じゃありません。違いますか？」

その言葉を聞いて、ずっとこいつを誤解していた事に気づいた。

「カイトさん。あなたの話を聞いて、私はもつとあなたとあなたの家族の事を知りたくなりました。」

「だから、改めてお願いします」



自称・魔法少女はそこまで言つて、こちらに頭を下げてる。  
そして。

「どうか私を——拾つてください」

そんなおかしな願いを、また口にした。

頭を掻き、未だに頭を下げている女を見つめる。

それから少し考えてから言葉を紡いだ。

「そういやお前、腹減つてんだろ」

「え？ ええ、まあ。あのクレープなるものを食べてからは何も食べていませんから」

「そうか。なら、早く行くぞ」

「？ どこにです？」

「ばーか。んなもん決まってるんだろ」

自転車を押して少し進んでから振り返り、俺は言つた。

「俺たちの家に、だよ」

「……………あ」

「ああ、それと言い忘れてた」

その言葉を聞いた自称・魔法少女は、茫然と立ち尽くしたままこちらを見ていた。

「助けてくれて、ありがとう」

そう言うと、自称・魔法少女はやつと顔を綻ばせる。

その笑った顔はやつぱり、もうこの世のどこにもいない誰かに、よく似ている気がした。

「……………カイトさんは、優しいですね。さすがはあの二人に育てられただけではありません」

「うるせえ。さつさと歩け」

「あ。いま照れました？ 照れましたよね？ ね？」

「吹き飛ばすぞクソガキ。照れてねえっつーの」

「ふふ、嘘はいけませんねえ。さつきもあかりさんにちゅーされて顔を赤くしてましたしー」

「てめえはぶつ殺されてえんだな。帰ったら見てろよ」

「いいでしょう、かかってくるってください。もつとも、カイトさんがあかりさんにちゅーされた事は何がなんでもおとーさんとおかーさんに報告させてもらいます」

「よし、さつきの言葉は訂正する。てめえは一生公園で暮らしてろ」

「照れてるカイトさんは意外と可愛かったですねえ。ちよつときゆんと来ちやいましたー」

「おいてめえ、待ちやがれっ」

「嫌ですよーう。えへへ、悔しかったら捕まえてくださいーい」

「ちよ、おまつ。飛ぶのは反則だろ飛ぶのはっ」

「飛べない魔法少女はただの魔法少女なんです」

「元ネタ知らねえのにその台詞を使うんじゃねえっ！」

——なんて、馬鹿みたいなやり取りをしながら俺たちは家路に着く。

これはきつと、何でもない日々の事。

俺の日常に突然訪れた、不思議な出来事の一部始終。

第一章  
終

## 第二章／捨て魔法少女、捨て猫を拾う。

## 第十三話

## ◇ 第二章

夏休みを三週間後に控えた平日の朝。この時期の学生は学校が一秒でも早く終わる事だけを考えて家を出て行く。それは俺も例外ではなく、面倒くさい登校が日常から消える事を心待ちにしながらいつも通りの時間に起きて、いつもと同じ時間をかけて髪型リセットをセツトした。

「——おかーさんおかーさんっ、次は何をすればいいですかっ?」

「じゃあこれを持って行って行ってちょうだい、ノラちゃん」

「分かりましたっ。おお、今日の朝ご飯は美味しそうなお魚ですねっ!」

「ふふ。ノラちゃんは本当にお手伝いが好きなのねえ。お母さんも嬉しいわあ」

「当然ですつ。いつも頑張ってるおかーさんのお手伝いをせずにこの家に住むだなんて、そんなの万死に値しますつ。つまり、何もしないカイトさんは死ぬべきですつ」

「朝っぱらからなに物騒な事ほざいてんだクソガキ」

「あ、噂をすればなんとやら。おはよーございます、カイトさんつ」

「おはよう魁人。朝ご飯できてるわよ」

リビングに足を踏み入れると、台所から和やかな会話が聞こえてくる。そこには母親とその手伝いをしているTシャツとホットパンツ姿の金髪クソガキ。どうでもいいが、両親が毎週のように服を買ってくる所為でこの女の身なりは徐々に世俗に塗れてきている。見るだけでムカついてくるあのピンクのど派手衣装は最近目にしていない。

「今日は早起きですね。カイトさんもようやく早起きの大切さが分かって来ましたか。関心関心つ」

「毎朝あんな風に叩き起こされてりや冬眠中の熊でも目覚めるつっーの」

俺は食卓の椅子に腰掛け、焼き魚が載った皿を持ってくる自称・魔法少女に言う。し

かし、奴に悪びれた様子はない。どうしよう、朝からストレスが溜まる。

「よく分かりませんが、早起きができるようになったのは良い事です」

「あ？　なんでだよ」

「だって、カイトさんが早く起きればみんな朝ご飯が食べられますからっ」

えへへ、と嬉しそうに笑う自称・魔法少女。その笑顔から目を逸らし、テレビの方へと顔を向けた。今日も晴れか。

「おはよう……」

「おとーさんっ、おはよーございますっ」

「っ……ああ。ノラちゃん、おはよう。今日も元気だね」

「もちろんですっ。朝に元気を出すと一日中元気でいられるんですよ！」

寝ぼけ眼を掻きながらリビングに入ってきた明らかに低血圧の父に、アクセル全開の挨拶を食らわせる自称・魔法少女。どんな理屈だ。むしろこの女が元気じゃないところを一度も見た事が無いんだが。

「魁人もおはよう。最近はお父さんより早起きだな」

「……………おう」

「この頃、学校から電話がかかってくる回数が減って安心してるよ。この前は『魁人くんが最近遅刻しないんです。何かあったんですか』って、先生から驚いた様子で言われたんだ」

向かいの席に座り、微笑みながらそう言ってくる親父。俺は黙ったまま、テレビに映っている東京で話題のタピオカミルクティー特集を目に映していた。

「はい、おとーさんっ。新聞とコーヒーですっ」

「おっと、ありがとうノラちゃん。よしよし、今日もお手伝いごころうさま」

「えへへ。おとーさんに褒められましたあ」

「……………」

「はは。魁人が変わったのは、やっぱりノラちゃんのおかげかもしれないね」

「うん？ どういう事ですか？」



親父はいつものように新聞とコーヒーカップを持ってきた女の金髪を撫でる。だが、それ以前の会話を聞いてなかった自称・魔法少女は首を傾げていた。

「なんでもないよ。さあ、みんなで朝ご飯を食べようか」

「そうですね。ほら、カイトさんもテレビばつかり見えていないで朝ご飯を食べますよっ」  
「ああ、分かっている。分かっているからためえも早く座れっ」

俺の顔を両手で掴み、無理やり食卓の方へと向けようとしてくる自称・魔法少女。

こいつはこの頃、何かと俺の世話をしたがるようになってきた。いや、最初からそうだったかもしれない。いずれにせよ、それがウザいのは言うまでもない。

「お待たせ、ノラちゃん。じゃあいつものよろしくね」

「はい。それでは——いただきますっ！」

食卓に四人が座り、それから明るい声がりピングに響いた。

これがこの家の日常になったのは、今から約一カ月前。

北高の連中とやり合ったあの日からこの女は正式に居候として迎えられ、様々な出来

事を経て今日に至っている。実際は『様々な出来事』、という六文字で済ませるほど薄い一カ月では無かったのは、この全身で体験した俺が一番分かっている。

まず予想通り、両親はこの女を実の我が子のように溺愛した。口には出してないけど、この二人がこいつといなくなった娘を重ねて接していたのは間違いない。

でも、そのおかげで物事は思っていた以上に上手く回った。親父も母親も、こいつが来てから笑顔を絶やさなくなった。あの日から作り笑いにしか見えなかったそれが、今は確かに本物だと思える。

住む場所を探していた自称・魔法少女と、娘を亡くした悲しみを埋める何かを求めていた両親。この家にはそれらを補完するものが揃っている。win-winの関係が成り立っていると言えれば分かりやすい。そうなった原因は、俺がこの女を拾ってきた所為なんだけど。

「お母さん今日は早く帰って来るから、一緒にお菓子を作りましょうね、ノラちゃん」

「そうなんですかつ!? カイトさんっ、今日は寄り道しないで帰って来ますよっ!」

「帰りが遅くなんのはいつもてめえの所為だろうが」

「はは。魁人とノラちゃんは仲良しだなあ」

「あ? どこに目えつけてんだクソ親父」

そうしてまた、いつも通りの一日が始まる。



「いやあ、今日もあかりさんは可愛かったですねえ。うつかり透明になる魔法を解いてしまうところでした。何なんでしょうね、あの悪魔的な可愛さは。カイトさんが惚れてしまう気持ちがよく分かります。私が男性ならば我慢できなくて襲ってしまうかもしれません」

放課後の帰り道。俺はいつも通り携帯を耳に当てながら、隣を歩く自称・魔法少女が垂れ流すクソみたいな話を聞いていた。

こいつは家に両親がいない平日は毎日、学校に行く俺の後をついてくる。魔法とやらのおかげで他の人間には姿を見られないので、学校にいる間は俺の隣でつまらなそうに授業を聞いてたり、あかりのクラスに行つてあいつを眺めに行つたり、誰もいない図書

室でこの世界の事を勉強していたりして。どうでもいいが、こいつがあかりの所に行くのは毎日のルーティン。その感想を帰り道で俺に語るのもいつもの流れ。

今日もあかりが可愛かった、という話を右から左へと流して聞きながら、帰り道を進む。

そうしていると、ふとある疑問が頭に浮かび上がってきた。

「おい、ストーカー魔法少女」

「ノラです。どうしました？」

名前を呼ぶと、先を歩いていた自称・魔法少女は立ち止まってこちらを振り返る。

「お前、他に何かやる事ってねえのか」

「? やる事って? 体育の授業の前にあかりさんが着替えてるところ見に行く、とかですか? さすがにそれは申し訳なくてできませんよ。まあ、カイトさんがどうしてもあかりさんがどんな下着をつけてるのか知りたい、っていうならやりますけど」

「外れた宝くじのナンバーより知りたかねえよ、んなもん」

いや、それはちょっと言い過ぎたかもしれない。

「では、何の事です?」

「だから、俺についてくる以外にやる事ねえのかって話だ」

「ありませんよ?」

「即答かよ」

まさかの回答に脳が追いついてない。真顔で言うって事は本気で無いのだろう。

「でも、なんでそんな事が気になったんですか?」

「そりゃ、あれだ。魔法使いなら困ってる奴を魔法で助けるとか、いろいろありそうだろう」

抽象的に答えると、自称・魔法少女はため息を吐いて呆れるような目で俺を見てきた。

「カイトさんは日曜朝のアニメを見すぎです」

「そろそろぶち殺されてえのかてめえ」

んなもん一回も見た事ねえっつーの。つーか見てんのかよこいつ。

「いいですか、カイトさん。この地球という星は、私のような魔法使いがいなくても平和です。もし必要があればカイトさんの言う通り魔法を使ってあげますが、残念ながらここはそんな事をしなくとも最初から大丈夫な場所なんです」

「……まあ、そりやそうだけだよ」

「私がこの世界で守らなくてはならないのは、カイトさんとおとーさんとおかーさん、あとはあかりさんくらいです。それ以外の人間は知った事ではありません」

自称・魔法少女の言葉を聞いて、妙に納得してしまう。でも。

「なら、てめえは何をしにこの世界に来たんだ」

ずっと思っていた事を何気なく問いかけてみる。だが返ってくる言葉は無い。緋色の両眼はジツとこちらを見つめてくる。だから俺も黙って、その目を見つめ返した。

ジョギングをしていたおっさんが横を通り過ぎ、ランドセルを背負った小学生数人が

立ち止まっていた俺たちを後ろから追い越して行く。

それから一筋の夏風が公園に吹いた時、答えはポツリと零された。

「……………その話をするのは、もう少し経ってからではいけませんか？」

「んなら、いつか喋る気はあるのか」

「はい。でも、まだ話せません。それを言えば、私はあの家にいられなくなってしまいました」

「そうかよ。なら、別にいい」

「ありがとうございます。でも……………いつか、必ず」

と、自称・魔法少女がそこまで言いかけた時、近くから何かの鳴き声が聞こえてくる。俺たちは同時にその方向へと顔を向けた。

「……………捨て猫？」

小さな段ボールから顔を覗かせてこちらを見ている小動物。にやーにやー、と忙しなく鳴き声を上げるその姿は、ちょうど一カ月前にこの公園で見たような気がする。

すかさず自称・魔法少女は段ボールの方へと駆けて行き、俺もすぐにその背中を追った。

「か、カイトさん。なんですか、この毛むくじやらの小さな動物は」  
「猫だ。なんで知らねえんだよ」

顔を驚愕に染めて問いかけてくる自称・魔法少女に俺はそう答える。あれだけ町を歩き回っておきながら、猫一匹も見た事なかったのかこいつ。

「ねこ………なるほど。これが巷で神の化身と呼ばれている、あの猫ですか」  
「てめえはどこでその話を聞いたんだ」

自称・魔法少女は『拾ってください！』と書かれた段ボールの中にいる捨て猫を両手で持ち上げ、そいつと目を合わせるようにして見つめ合う。

「ヤバいですカイトさん。私、運命の出会いをってしまったようです」



そして唐突に意味不明な事を言い出した。猫を見つめるその目がハートマークになっっているように見えたのは、最近疲れてるからだと自分に言い聞かせる。

「あなたも、誰かに捨てられたんですか？」

自称・魔法少女が猫に向かって言うと、にやーという返事が返ってくる。

その鳴き声が『そうだ』、なんて言っているように聞こえたのも、たぶん気の所為。

「どっかの馬鹿とそっくりじゃねえか。こっちはずいぶん愛らしいが」

「え。誰です？ カイトさん、もしかして私以外に誰かを捨てた事があるんですか？」  
「てめえの事を言っただっつーの」

なに他人事みたいな顔してんだこの女。こんな生意気なクソガキを捨てるくらいなら捨て猫を捨てる方が百倍マシだった。改めて自分の運の無さを呪いたくなる。

確かにかわいそうだが、それをどうこうできる話じゃない。こうして捨てられるのがきつと、この猫の運命だったんだらう。やっぱりこの世界はくだらない。責任も負えない馬鹿ばっかだ。

「ほら、そろそろ行くぞ。今日は早く帰んなきゃ行けねえんだろ」

そう言つて振り返り、再び家路につこうとしたのだが。

「……………おい、なに掴んでんだ。離せ」

歩き出そうとした直後、自称・魔法少女に腰の辺りを引かれ、必然的に足が止まった。

「先に言つとくが、ぜってえに飼わねえからな」

そう言つた瞬間、ビクツと身体を反応させる自称・魔法少女。やつぱりな。この一月でこいつの思考パターンを読めるようになったおかげかもしれない。

「凶星かクソガキ」

「だ、誰も飼うとは言っていないません。ただ、このままではかわいそうなので、この子を家でいそろーさせさせてあげようと思っただけです」

「現在進行形で居候しててめえがそれを言うか」

自分どころか捨て猫までも拾って住まわせるとか、マジで何様のつもりだこの女。

「とにかく、この子をここに置いてはいけません。さつきカイトさんが言った通り、魔法使いの私は困っているこの子を助けますっ。異論は認めませんっ」

「さつき俺とかあかり以外の奴は助けねえとか言ったのはどこのどいつだ？ あ？」

矛盾している事を言ったのに気づいたのか、自称・魔法少女は大粒の汗をかき出す。

「あ、あれは言葉の綾です。カイトさんやあかりさん以外でも、この子だけは助けますっ」

「ダメなもんはダメだ。置いてけ」

そう言うと、自称・魔法少女は急に真面目な顔になってこちらを見つめてきた。具体的に言うと、俺の頭を注視している。なんだ。またこの髪型を馬鹿にするつもりか？

「……仕方ないですね。カイトさんがイジワルするのなら、私は魔法を使うしかありません」

「……てめえ、なに考えてやがる」

「時にカイトさん。この前、おとーさんがお仕事の帰りに『チョコクロワッサン』なる食べ物を買ってきてくれたんです。そのシルエットは以前あかりさんが言っていた通り、カイトさんの髪型と瓜二つでした」

「何万回死にてえんだてめえは」

淡々とした口調で喧嘩を売ってくる自称・魔法少女。そして何故か目が死んでいる。

「その美味しいチョコクロワッサンを食べながら、私は思ったんです。『ああ、これきつとカイトさんの頭に乗せても絶対違和感ないだろうなあ』、って」

「十万回くらい死んでもてめえの性格は治らねえだろうなあ」

自称・魔法少女はどこからともなく赤いステッキを召喚し、それをこちらに向けてくる。

「だから今日は特別に、私がおチョコクロワッサンをカイトさんに進呈します」

「……………てめえ、まさか」

「そのまさかです。覚悟してください。——i l l u s i o n 譎詭変幻——」

奴がそう言った直後、向けられたステッキの上に付いたハートマークが輝き出す。どうせ今回もお得意のでまかせだろう。さすがのこいつでも、人目のある場所でそんなふざけた真似は——

「はっ、なめんじゃねえ。そんな脅しはきかなああああああああああアツ!？」

「ふんっ。イジワルなカイトさんにはそれがお似合いですっ!」

そして遭えなく、俺のリーゼントはチョコクロワッサンへと進化を遂げた。そこからダッシュで家へ帰る羽目になったのは言う間でもない。

## 第十四話



「いらつしやい、子猫さん。ここにいる人間と魔法使いは一人を除いてみんな優しいので、緊張しなくてもいいですからね」

「もういつそ俺を殺せ……………」

それから家に到着し、自称・魔法少女はカーペットの上に座りながら拾って来た捨て猫に向かって言葉をかけていた。対する俺はソファに腰掛けながら人生というやつに絶望していた。ちなみにチョコクロワッサンは絶賛継続中。リビングには甘く香ばしい匂いが漂っている。

「カイトさん、何かこの子が食べるものは無いでしょうか？」

「欲しいならまず俺の髪を直しやがれ」

「それは無理です。時間で解ける種類の魔法なので、少なくともあと一時間はそのままです」

「マジかよ。てめえ、なんつー魔法を使いやがったんだ」

「いいじゃないですか別に。色も黒くて形もその通りなので、よく見ないと分かりませ  
んよ」

「そういう問題じゃねえんだつーの」

「あ……………」

「んだよ、そんなにじろじろ人のこと見やがって」

そんな話をしていると、自称・魔法少女は口を閉ざして俺のリーゼント、もといチョココクローワツサンをガン見してくる。それからキラリ、と目を輝かせた。

「食べ物、見つけました」

「待ちやがれクソガキ。てめえ、いま何を閃きやがった」

「ちょうどいい食べ物があるので、それを子猫さんに食べてもらおうかと思ひまして」  
「本当に期待を裏切らねえなてめえは」

それから超恐ろしい事を口走ってくる。ていうか。

「このクロワツサン食えんのか？」

「食べられますよ。ただ、私の魔力で元ある物質をまったく違うものに変えているだけなので、無くなった分が元に戻る事はありません」

「てめえ、それが分かかっておきながらなんで食おうとしてんだ」

「いや、少しくらいなら大丈夫かなって」

なんて事を自称・魔法少女が口にした瞬間、ぐーっという音が聞こえてくる。

「時にカイトさん。この前、おかーさんと一緒に映画を見ていたのですが、どうやらアメリカという国には髪の毛の無いヤンキーさんが沢山いるみたいなんですよ」

「だからどうした」

「カイトさんもそろそろいめちえんの時期かな、と思ひまして」



「食わせねえからな。このクロワツサンはてめえにもその猫にも一口もやらねえ」

再び死ぬほど恐ろしい言葉を吐く自称・魔法少女。食われてたまるか。この歳でスキンヘッドとか、そんなもんリーゼントよりも引かれちまう。

「えー、ちよつとくらいいいじゃないですかあ。そんなに大きいんだからそう簡単には無くなりませんよお。お願いしますカイトさん。先っぽ、先っぽだけでいいですからっ、ね？」

その言葉を女から言われるのは、これからの人生でも今日が最後だと思う。

「ダメに決まってるんだろばーか。……はあ、ちよつと待つてろ」

猫を抱えている自称・魔法少女にそう言つて、ソファから立ち上がる。台所になんかあんだろ。それをやればこいつが俺の髪を狙ってくる事は無くなる。たぶんだけど。

そう思いながら台所に移動し、棚の中をガサゴソと物色すると、賞味期限切れした鯖の缶詰を見つけた。猫にやっていいものなのかは分かんが、おそらく大丈夫だろう。

少なくともチョコクロワッサンよりは身体に良いに違いない。

「これでも食つとけ」

「おおつ、さすがはカイトさんつ。これでクロワッサンを食べるのは私だけになりましたっ」

「てめえにも食わせねえつーの」

もう一匹、腹を空かせたデカイ捨て猫がいる事をすっかり忘れていた。

フローリングの上に鯖缶を置くと、自称・魔法少女の膝の上に乗っかっていた子猫はぴよん、とジャンプしてこちらに駆け寄ってくる。そうして匂いを嗅いでから、小さな口で鯖を食べ始める。よほど腹が減っていたのか、かなりいい食いつぶりだった。

「ふふつ、美味しそうに食べています。いっぱい食べていいんですからね？」

鯖を食べている猫の前にしゃがみ込み、その姿を微笑みながら見つめる自称・魔法少女。俺は猫ではなく、嬉しそうにしている女を眺めながら、少しだけ笑ってしまった。

昔もこんな事をした気がする。それがいつの出来事だったのかは、思い出せないけれ

ど。

「カイトさん、この子の名前は何にしましょう?」

「あ? 名前? んなもん何だっぺいいだろ」

そうしてしばらく、猫を観察してる自称・魔法少女を観察していると、唐突にそう訊ねられる。何も考えず適当に答えたが、それはどうやら奴の逆鱗に触れたらしい。

「よくないですっ! 名前っていうのはかけがえのないものなんですよ!?! カイトさんだっぺクロワツサンやんきー、とかいう名前を付けられたら嫌でしょうっ!?!」

「死にてえなら素直にそう言え」

確かにそれは嫌だが、まずもって例えに悪意があり過ぎて殺意しか湧いてこない。

「いいからちゃんと考えてくださいっ。じゃないとまたクロワツサンにしますからね?」

「わーっつたよ。……ったく、うるせえったらありやしねえ」

「何か言いました？」

「なんでもねえよ。だから早くその用途の分からねえステッキを仕舞え」

そう言うってから、鯖缶を食っている捨て猫に目を向ける。

どこにでもいそうな雌の三毛猫。目立った特徴はどこにも見られない。何かがあればそれを名前にしようかと思つたが、こいつの見た目は本当に普通の猫。

なら、それ以外のものでも連想すればいい。例えば、こいつがいた場所とか。そういや段ボールの中に入ってたよな。あの段ボールに描かれてたのは、確か。

「……………みかん」

そう呟くと、自称・魔法少女はハッと顔を上げてこちらを見つめてくる。どうした。

「みかん……………みかんっ……………みかんっ！ それですカイトさんっ！」

「てめえはいちいち距離が近えんだよ」

自称・魔法少女は興奮した面持ちでそう言うてくる。わりと適当な感じで口にしたの

に、どうやらこいつ的にはかなり好感触だったらしい。

「決めましたっ。この子の名前はみかんちゃんですっ。えへへ、これからよろしくお願  
いしますね、みーちゃん」

「いきなりあだ名で呼ぶのかよ。っーか、まだ飼うとは一言も言っつてな——」

「……………魁、人？」

どき、とビニール袋が床に落ちる音が聞こえてくる。なんかデジャヴ。  
てか、まるつきりこの前と同じパターンのやつじゃねえかこれ。

「あ、おかーさん。お帰りなさい」

——そして言うまでもなく、すぐさま第二回家族会議が開会。今回の議題は捨て  
猫を拾ってきた事について。しかし、拾ってきた張本人は離れた所で猫とじゃれ合っ  
ていた。

「魁人。これはどういう事なの？」

「いや……その、帰り道に捨てられてて」

「それで、かわいそうだから連れて帰って来ちゃったの？」

「まあ、そんな感じだ」

誤魔化す感じでそう答えると、母親はティッシュを何枚か取って涙を拭い始める。

そんな姿を自称・魔法少女は蚊帳の外から見ている。てめえもこっちに来いっついの。

「魁人はいつから色んなものを拾うのが好きになっちゃったの？」

「好きになった覚えはねえよ」

「ノラちゃんの次は猫？ 次は何を拾ってくるの？ 馬なの？ 鹿なの？」

「あんたは俺を馬鹿にしてんだな」

なかなか高度なディスプレイられ方だったがすぐに理解できた。つーかなんで泣いてんだよ。

「それで、あの猫ちゃんはどうするの？」

「俺は別にどうでもいいんだが、あいつがどうしても飼いたいてうるせえんだよ」

親指で奴がいる方を指すと、母親はそちらに顔を向ける。それに気づいた自称・魔法少女は、遊んでいた子猫——みかんを抱き上げてこちらへと歩いてくる。

「おかーさん。この子、公園に捨てられていたんです。こんなに小さくて可愛いのに、一人でやーにやーって、お腹を空かせて鳴いていたんです」

「うーん。でも、うちではペットを飼った事ないから、心配だわ」

魔法少女は飼ってるけどな、という言葉が駆け上がったが言う直前に全力で堪えた。

渋っている母親を見て、自称・魔法少女は断れてしまうと判断したのだろう。後ろ向きな言葉を聞いた瞬間、奴の目が細められたのを俺は見逃さなかった。

「ノラちゃん？ どうしたの？」

胸にみかんを抱いている自称・魔法少女は突然俯き、その表情を隠す。

母親に声をかけられても顔を上げる事は無い。それからしばらく沈黙を守った。

「……………おカーさん」

「うん？ なあに？」

数十秒の間を置いてから、満を持して奴は口を開く。  
そして、母親に最も効くであろう魔法を繰り出した。

「だめ、ですか？」

上目遣い＋涙目＋震えた声、という超攻撃魔法の三連撃。

それはきつと、この女を溺愛する母親にとっては凄まじい破壊力を持つていたはず。

「ぐ、っ……………うん」

案の定、どこから出たか分からない意味不明な声を出して胸を押さえる母親。  
それを見た自称・魔法少女はニヤリ、と不敵な笑みを浮かべた。



「おい、大丈夫か」

「……お、お母さんにその顔はダメよ、ノラちゃん。古今東西、お母さんの弱点はいつでも娘の涙なんだから。ノラちゃん、可愛すぎワロタ……もうダメ」

「なに言ってるんだクソババア」

瀕死の状態でうわ言のようにブツブツと何かを唱える母親。昔からそうだったけど、子どもに甘過ぎだろ。もうちよつと厳しくしねえと不良に育ちちまうぞ。誰かさんみたいにな。

「おかーさん」

「うーん、そうねえ。なら、お父さんが帰ってきたら相談してみましようか」  
「分かりましたっ。じゃあおとーさんにもお願いしてみますっ」

——それから約一時間後、親父が帰宅した。

「よーしっ、じゃあ新しい家族のために今すぐ必要なものを買って来ようっ！」

「そうねっ、パパ」

「わーいつ、おとーさんもおかーさんも大好きですっ！」  
「……………」

ほんと、この家にはバカしかいねえのか。

## 第十五話



ひぐらしが鳴いている夕暮れの公園。季節は来年へと旅立つ春と梅雨を見送り、次に扉をノックしてきた夏を快く引き受けていた。

昨日や一昨日と何も変わり映えのしない学校での一日を終え、家路と辿る途中の事。

「あははっ、くすぐったいですよ、みーちゃんっ。あんまり私の顔を舐めないでくださいっ」

俺は芝生の上で不良座りをして、公園の広場で猫と戯れる金髪女を見つめていた。

帰り道に突然、『今日はここでみーちゃんと遊んで行きますっ』と言われ、仕方なく付き合ってやっている。あれからあの女は、捨て猫のみかんをどこにでも連れて行くよう

になった。

どうやら奴は他の存在すらも透明にできるようで、自称・魔法少女と戯れるみかんも俺以外には見えていない。

「もう、甘えんぼさんなんですからあ。そんな子には肉球ぷにぷにの刑ですつ。ぷにぷに」

みかんは拾い主が特殊能力を使える事にすぐ気づいたらしく、姿を透明にされても魔法で宙に浮かされても平然としていた。子猫であるが故の無知の所為か。かわいそうに。

「カイトさーん。カイトさんも一緒にこっちで遊びましょうようっ」

俺がつまらなそうな顔をしているのに気づいた自称・魔法少女は、こちらに向かつて手を振ってくる。そんな姿や声音も、相変わらず周囲の人間には見えていないし聞こえてもない。

声を無視してため息を吐き、茜色に染まる空を見上げる。

あいつとこの公園で出会ってから、約二か月。あの日から俺の日常は色彩をだいぶ奇抜なものへと変化させていた。塗り替えたのは間違いない、あの金髪ピンクのふざけた女。あいつが塗った濃すぎる絵の具の所為で、元が何色だったのか既に忘れかけている。

あれから両親ともよく話を交わすようになった。俺が高校に入ってから腫れ物に触るように接してきていたのに、最近はそんな素振りすら見せてこない。あの女がいる所為で家の中じゃ親子喧嘩すらもできなくなった、っていうのが正しいか。

とにかく、両親はよく笑うようになった。何よりもそれが一番の変化だと思ってる。

「おい、そろそろ帰んぞ」

「えーっ、もう少し遊んで行きたいです」

考え事をやめて立ち上がり、歩み寄りながら言うが返ってくるのは不満そうな声。

「我が儘言うんじゃないよ。もう充分遊んだらうが」

あの家に門限があるわけではないが、あまり遅くなると面倒な事になるので最近は陽が暮れる前には帰宅するように心がけている。具体的には母親が携帯へ『どうしよう。暗くなったのにノラちゃんが帰って来ない（：|：）』、『ノラちゃん不足。早く帰らないとお母さん、寂しくて死んじやいます（大泣）』、『ああ、ノラちゃん。ノラちゃん。ノラちゃん。ノラちゃん……』などという呪いのメールを十秒おきに送信してくるようになる。

「むう、仕方ありませんね。じゃあ帰ったらカイトさんも一緒に遊んでください」

「嫌に決まってんだろ。なんで俺がんな事しなくちゃいけないんだ」

「私がいーちゃんの主であるように、カイトさんは私の主だからです。主は拾った魔法少女と遊んであげなくちゃならないんです。じゃないとストレスが溜まっちゃいます」

「勝手に溜まってイラついてろ」

「ちなみに、ストレスが溜まると魔法少女はかまってほしくて主に魔法をかけます」

「てめえ、次に俺の髪に魔法をかけたらどうなるか分かってんだろうな」

みかんを飼う事になった一件から、このクソガキは気に食わない事があると魔法で俺の髪を様々なものに変えるようになった。ちなみに昨日は風呂に一緒に入るとか入ら

ないとかで言い合いになり、最終的に髪が特大のフランスパンになった。

「いいから私をもっと甘やかしてください。カイトさんからの愛が足りないんですっ  
！」

「だったら少しくらい普段の行いを改めようとは思わねえのかてめえは」

自称・魔法少女は頬を膨らませながら文句をタレてくるが、俺はそれを即座に一蹴。

「もうっ、カイトさんは魔法使いが何たるかを全然分かっていませんねっ」

「教えられてねえからな。知りたくもねえが」

「じゃあ教えてあげます。魔法使いは誰かから優しくされると強くなるんですっ」

なるほど。ならこいつに優しくしなければ俺にも勝ち目があるって訳か。良いこと聞いたぜ。

「いま何か変な事を考えませんでした？」

「金輪際てめえを甘やかさねえってこと以外は何も考えてねえよ」

「むーっ！ カイトさんはイジワルですっ！」

「待て待て待て。ここで魔法を使おうとすんじゃねえ。せめて人目が無い場所で……つて」

「知りませんっ。カイトさんの頭なんて、モンブランにでもなればいいんですっ……つて」

暴走モードに突入しかけた自称・魔法少女が赤いステッキを向けてくる。

さすがにここで魔法を使われたらひとたまりもないと思い、ふと周りに目を向けた時、何かがおかしい事に気づいた。自称・魔法少女もすぐにその異常に感づいたらしい。

「……………なんだ？」

公園にはついさつきまで遊んでいる小学生や散歩している老人たちがいたはず。

なのに、今はその影ひとつない。偶然そういうタイミングなのかと考えてもみたが、それはあり得ないとすぐに理解できた。耳を澄ませても、話し声どころか物音ひとつもない。

それらの変化を、異常と捉えない方が難しかった。



「……………これは」

自称・魔法少女は真面目な表情を浮かべながら、黙って周囲に目を向けている。そして気づけば服装が私服から魔法少女モードへと変わっていた。

みかんはその足元に立ち、ふーつと唸りながら毛を逆立てている。まるで、近くに狂暴な大型犬がいるかのように。

「おい、すかんぴん魔法少女」

「ノラです。こんな時くらい名前ですんでください」

誰もいなくなった公園を眺めながらそう呼ぶと、気に食わなそうな声が返って来る。

「うるせえ。そんな事より、なんだこれ」

「……………」

「おい、聞いてんのか」

自称・魔法少女はその質問に答ええない。ただ俺と同じように変わり果てた辺りを見渡している。無言なのが余計にこの異常の答えを知っている、と物語っているように思えた。

しばらく公園に深い沈黙が落ちる。風が木の葉を揺らす音すらしない。自分の身の回りに、何かただならぬ事が起こる予感がする。それは喧嘩をして手に入れた危険を察知するための第六感みたいなもの。言葉では形容できない。でも、何か確かに起ころうとしている。

「なあ、これって」

「伏せてカイトさんッ！」

再び問いかけようとした瞬間、自称・魔法少女はそう叫んでくる。その視線は俺の背後へと向いていた。振り向くと、何かが高速でこちらに迫ってくるのが視界に入る。

時間にして、おそらく瞬きの半分以下。遅れていれば確実にその攻撃をモロに食らっていただろう。異常のセンサーを張り巡らせていたおかげで、なんとかそれを躲せた。

「大丈夫ですか、カイトさんッ」

前回り受け身をした俺の前に移動し、その前に立ってステッキを構える自称・魔法少女。

その声に返事をしようと、顔を上げた時。

俺は、その異常を目にした。

「なんだ、ありゃ」

自称・魔法少女と俺が立つ場所から十メートルほど離れた位置に佇む、二つの何か。この目が確かならば、それは何かの動物のように見えた。

一匹は、全身が薄い灰色の蠅螂。そしてもう一匹は朱色の飛蝗。俺が知っているものとは色が違うけれど、間違いない。だが、それ以外にも明らかにおかしいところがある。そいつらは、百八十を越える俺の身長よりもはるかに大きかった。

蠅螂と飛蝗は鳴き声を上げる。鼓膜を通り抜けた瞬間に背筋が凍るような、気色悪い声。

「……………なんで、ハイハイ」

俺の前に立つ自称・魔法少女は零す。その表情を拝む事はできないが、声のニュアンスでなんとなく分かった。こいつは焦っている。何故かは知らない。でも、そう感じた。

「おい、しつかりし」

動かない自称・魔法少女の背中に向かって声をかけようとしたのとほぼ同時に、俺たちの前にいた飛蝗が跳躍する。咄嗟に上空へと視線を向けた次の瞬間、さつき俺が避けた真空波のような何かが、螞螂の刃からこちらに放たれた。

「つ、――反転――ツ！」

自称・魔法少女は咄嗟に腕を前へと伸ばし、すぐさま透明な壁を召喚。目には見えな  
いが、こちらにその斬撃が届かないという事は防御には成功しているらしい。

しかし、いま相手をしているのは螞螂だけではない。今度は跳躍したデカイ飛蝗が俺たちの脳天めがけて高速で落下してくる。危機を悟ったであろうみかんが俺の身体を

駆け上がった、シャツの胸元へと逃げるように潜り込んだ。

「どうすんだよあれっ」

「焦らないでください」

頭上を見上げながら言うと、自称・魔法少女は落ち着いた声でそう言い、右腕と視線を前方に向けたまま、左の手の平を落下してくる飛蝗の方へと向けた。

「吹き飛びなさい、——風 air lance 槍——」

その声が吐かれた直後、俺たちの数m手前まで落ちてきていた飛蝗は再び上空へと高く舞い上がる。電話ボックスくらいの大きさがあつたはずの飛蝗が、今は米粒のようしか見えない。この女が何かをしたのは確かだが、それを見極める事まではできなかった。

「あまり、私をなめない方がいいですよ」

頭上を気にする必要が無くなった自称・魔法少女は左手を下げ、両手でステッキの柄を握る。それから呪文のような何かをブツブツと唱えた後、顔を蠅螂の方へと向けた。そして。

「安心してください。カイトさんとみーちゃんは、私が守ります」

その声が聞こえた途端、赤いステッキの上部から赤い光線のようなものが射出される。それは離れた位置に立つ蠅螂まで一瞬で到達し、灰色の身体の一部を吹き飛ばした。それからまたあの耳障りな鳴き声が聞こえてくる。今度は痛みに悶えるような悲痛な叫び声。聞いているだけで何故か吐き気がしてくる、あまりにも不快な声音だった。

「煩いですね。少し黙りなさい。――steamroll重圧迫――」

ぐしゃ、と何かが潰れる音がして、それと同時にその気持ち悪い声は止まる。見ると、蠅螂は誰かに踏まれたトマトのように、その中身をぶちまけながら平べったくなっていた。

「うお」

「少し離れましょうか。そろそろ落ちてきます」

目に映ったグロテスクな光景に思わず顔をしかめていると、自称・魔法少女は淡々とした口調でそう言い、俺の手を引いて早足で元いた場所から離れていく。みかんは変わらず、顔だけを外に出して俺の胸の中に隠れていた。

それから数十秒後、自称・魔法少女の魔法に弾き飛ばされた飛蝗が広場のど真ん中へと落下してくる。衝撃とともに綺麗に生え揃っていた芝が抉れ、半径五メートルほどのクレーターができていた。その真ん中で明後日の方向を向いた足をぴくぴく、と動かし、いる朱色の飛蝗。遠目から見ても、あいつはこれ以上動けないと思った。

「……………マジ、かよ」

思わず呟く。突然始まった戦いに呆気を取られたから？ それもある。

だがそれ以上に驚いたのは、あんな化け物たちを圧倒した——この女の強さだった。

「大丈夫ですか、カイトさん。怪我はありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「よかった。どうやらみーちゃんも無事みたいです。よしよし」

自称・魔法少女は微笑みながら、俺の胸元から顔を出しているみかんの頭を撫でる。そうしながら、服装をさつきまで着ていた私服へと戻していた。

まず何から訊ねればいいのか、頭の中でまとまらない。どうでもいいけれど、自分の手が震えていた事に、今さらになつて気づく。

「何が起きた」

広場の中心部付近に倒れる蟻螂と飛蝗の化け物の方を見つめながら、言う。自称・魔法少女は何も言わずにそいつらの方へと歩き出した。

立ち尽くしている訳にもいかず、俺もみかんを胸元に入れたままその背中を追った。

二つの亡骸の近くで立ち止まり、それらを交互に一瞥する金髪の女。

俺は後ろで立ち止まり、黙ってその小さな背中を見つめた。



「どうして、ここが分かったんでしよう。それに、わざわざこんな結界を張るだなんて」  
数秒の静寂が流れた後、小さな声が紡がれる。

「何なんだよ、そいつら」

問いかけると、自称・魔法少女は前を見たまま答える。

「これは、私が居た世界に住む魔物です。しかも野生の魔物ではありません。この魔物たちは、戦うための調教を受けた戦闘用の魔物です」

「戦闘用の、魔物？」

「私がいた世界にはこういった生物が飼われているんです。問題は、これが私の」

そう言いかけたところで、女は言葉を止める。

しばらく待つてみても、続きが零される事は無かった。

「なんでそんな奴らがここに現れたんだ」

「私がこの世界に来る時に通ってきた通路が、開いたままだったのかも知れません。この魔物たちはそこを偶然見つけて、この世界に来てしまったのでしよう」

「な。つつー事は、こんな化けモンが他にもいる可能性があるって事じゃねえのか？」

自称・魔法少女は首を横に振り、それから乱れた前髪を触る。

「たぶん、それは無いです。私はそうならないよう、細心の注意を払ってこの世界へとやって来ました。ですから、この二匹は例外だと考えていいでしょう」

「……………『絶対にありえねえ』、とは言わねえんだな」

奴が言葉を濁しているのは、こいつの仕草を見ればすぐに分かった。

「カイトさん、そういうところには鋭いですね。さすがはやんキーさんです」

「うるせえ。ヤンキーは関係ねえだろ」

「まあ安心してください。少なくとも、この魔物たち以外の気配はこの辺りからは感じられません。それに、調教された魔物は狙った相手にしか牙を剥かないんです。だからよっぽどの事が無い限り、人間に対して襲いかかったりはしないでしよう」

自称・魔法少女は振り向いてそう言う。だが、また俺は台詞の行間を読んできました。調教された魔物は、狙った相手にしか牙を剥かない。

だとすれば、こいつらは意図を持って俺たちを狙ってきたって事じゃないのか？

「さあ、帰りましょうカイトさん、みーちゃん。遅くなるとおかーさんが心配しちゃいます。それと、今日はおとーさんに肩叩きをしてあげなくちゃならないんです」

訊ねようとした時、自称・魔法少女はそう言って先に歩き出す。

タイミング外されてしまい、訊きたい事を口に出せなかった。それが何故か、俺に質問をさせないように思えたのは、気の所為だったんだろうか。

『ヒ…………メ…………サ、マ』

『…………ワ…………スレ、ダ…………マ』

「……………あ？」

後を追おうとして歩き出した時、倒れた化け物たちが何かを言った。

だが、先に歩き出した自称・魔法少女はその声に気づいていない。

ヒメサマ？　ワスレダマ？　もしかしたら聞き間違いかもしれないけれど、確かにそう聞こえた。それが何を意味しているのかは、俺に分かるはずが無い。

にやーお、とみかんが鳴く。

『今の言葉を忘れるな』、と言われたような気がした。

そんなの、あるはずもないのに。

## 第十六話



気づけば、俺はどこかの城の中にいた。

無数の煉瓦が積み重ねられてできた建物の中。床には赤いカーペットが敷かれ、それが長い廊下の向こうまで延々と続いている。窓の無い壁には火が灯された松明のようなものが等間隔に設置されており、外の光が入らない廊下を照らしていた。

しばらくそこに突っ立っていると、若草色のドレスを着た若い女が奥から歩いてくる。

そいつは俺に気づく事なく前を通り過ぎ、少し先にあつた部屋の扉をノックした。

「失礼します、姫さま。少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

ドレスの女が声をかけると中から返事が返ってくる。女は扉を開き、部屋へ入って行った。

次に気づくと、俺はその部屋の中にいた。そこにはさっきの女と、もう一人の女がいる。

「報告です。姫さま、先ほど別大陸の国から共和を求める内容の文が届きました」

「ふーん、そうですかあ」

「戦争の激しさを増したこのタイミングでこんな願いを申し出てくるとは。何か裏があるに違いありません。その点、姫さまはどうお考えですか？」

「まあ、勝手にすればいいんじゃないですか？ どうせまた今度も頃合いを見て相手側に寝返り、私たちを貶めようっていう頭の悪い作戦でしょうから」

広い部屋の奥に置かれた机に座る、首元に白い大きなファーが付いた服を着る金髪の少女。頭の上には黄金のティアラ。そいつは気だるげな表情を浮かべて、机の上に乗る小さな動物の頭を撫でながらドレスを着る女にそう言った。ああ、あれは間違いない。

俺は、あいつを知ってる。

「姫さま。いくら先の戦闘で疲労しているとはいえ、最近は何げすぎているように見えます。お言葉ですが、そんなご様子ではまた国王様も呆れてしまわれるかと」

ドレスの女は小さなため息を吐き、見るからにやる気の無い金髪の女にそう言った。だが、姫さまと呼ばれる女はそう言われても怠そうな姿勢や表情を正さない。

「別にいいじゃないですか。私に与えられた仕事は戦う事だけです。戦わない間、少しくらいだらけたってバチは当たりません」

「そのような心意気だから、国王様は未だにどこの国の縁談もお引き受けしないのです。姫さまはもう十二歳。立派な大人です。とつくに結婚をしてもおかしくない年齢なのです。もっとこの国の姫である自覚を持って業務に励んでください。それに――」

「あーはいはい。分かりました分かりました。そういうのいいですから、届いた文書だけその辺に置いていってくださいーい」

「……かしこまりました。それではまた数時間後に参ります。その時までには明確な方針を決定していただくませ」

「はい。さようならー」

そう言い残し、ドレスの女は頭を下げてから部屋を出て行く。あの金髪の女に分かったかどうかは微妙だが、ドレスの女は出て行く前に舌打ちをしていた。

それから部屋の中に一人になる金髪の女。

奴は小さな動物を抱きながら、椅子の背もたれに寄りかかって大きな息を吐いた。

「……はーあ、面倒くさいです。なんで、私がこんな事しなくちゃいけないんでしょうか」

そして、気だるげな表情を浮かべたまま。

「本当——くだらない」

胸に抱いている動物に向かって、そう言った。





目が覚める。視線を壁に掛けられた時計に動かすと、時刻は八時少し前。急いで学校に行く準備をしなくてはならない時間だが、今日は日曜日なので遅刻を気にしなくていい。というか、俺はいつから目覚めた時間を気にするようになったんだろう。

そんな事を考えながら、腹の上に乗る金髪の女に目を向けた。

「おはようございます、カイトさん」

「何してやがんだてめえは」

「朝ご飯ができたのでカイトさんを起こしに来ました。あと少し目覚めるのが遅かったら、鼻を爪もうかと思つてたところです」

「てめえは俺になんの恨みがあんだ。つーか毎回毎回腹の上に乗ってんじやねえ」

「失敬な。私はそんなに重くないです」

「誰もてめえの体重の話はしてねえよ」

腹の上にいる自称・魔法少女を下ろし、ベッドから起き上がる。

なんか変な夢を見てた気がする。誰かさんと同じ顔をした女の姿が、頭から離れな

い。

「さあ、今日は日曜日ですカイトさん。朝ご飯を食べたら遊びに連れて行ってください」

自称・魔法少女はそう言ってから先に部屋を出て行こうとする。

俺はその金髪を見つめながら、頭の中に浮かんだ言葉を何気なく零した。

「姫さま、か」

——その瞬間、自称・魔法少女は勢いよく振り返る。顔に浮かんでいるのは驚いた表情。緋色の目が大きく見開かれ、ベッドの縁に座る俺を凝視してくる。

どうしてその名で私を呼ぶんですか、と驚愕に染まる顔に書いてあるような気がした。

「あ、いや。今のは違う。変な夢を見た所為だ、忘れろ」

誤魔化すようにそう言うが、奴の視線はこの顔に癒着したまま。

嘘を言っているわけではない。でも何故か、心の中を見透かされている感じがした。数秒間の沈黙。それに耐え切れなくなったのは、めずらしく俺の方だった。

「ほら、行くぞ。飯が冷めてマズくなっちまう」

ベッドの縁から立ち上がり、固まった自称・魔法少女の髪を追い越しざまに少し撫でてやった。するとようやく、奴は身体の動かし方を思い出したように顔を上げる。

「そ、そうですね。はい。早く行きましょう」

それから前髪を触り、笑顔を浮かべる。その仕草を見て、すぐに分かった。こいつは今、作り笑いを浮かべている。欺瞞に敏感になったこの目は騙せない。でも、何故こいつが無理して笑っているのかは、俺には知る由もなかった。

◇

「おとーさん、新聞を持ってきましたっ」

「今日もありがとう、ノラちゃん。よしよし」

「おかーさん。パンに塗るジャムはイチゴとブルーベリー、どっちにしましょうか」

「ノラちゃんの好きな方でいいわよ？」

「分かりましたっ、じゃあ両方にしますっ！」

数分後、リビングにはいつも通りの風景が流れていた。相も変わらずこの自称・魔法少女は完全にこの家に溶け込んでいる。むしろこいつがない生活風景がもう想像できない。

「はい、みーちゃんもご飯ですよー。いっぱい食べて私みたいに大きくなってくださいね」

「……………」

「ふふ、そんなに急がなくてもカリカリは逃げないから大丈夫ですよ」

みかんにエサをやりながら笑っている自称・魔法少女。今はさつき見せた作り笑いを浮かべてはいない。その様子を眺めていると、夢で見たあの金髪女の姿が無意識に再生される。

「? どうしました、カイトさん。そんなに私をジロジロ見て」

「あ? ——ああ、いや。何でもねえよ」

「んー? あ、もしかして見惚れちゃってました? それともみーちゃんに優しくして  
る私を見て、カイトさんも餌づけされたくなっちゃいました?」

「てめえはみかんと一緒にキャットフードでも食つてろ」

やっぱりこいつはいつも通り。平常運転過ぎて殴りたくなってくる。

「そうだ魁人。今日は何か用事があるのか?」

「用事? 別にねえけど」

向かいから飛んできた質問にそう答えると、親父は新聞から顔を上げてこちらを見てくる。

「なら、今日はみんなで遊園地にも行かないか?」

「は? なんで俺がなんここに」

行かなきゃなんねえんだ、と言いかけた時、近くにいたクソガキが声を被せてくる。

「ゆーえんちっ！ それってあれですよね、鼠のキャラクターの絵を他の場所で許可なく描いちやったりすると夢の国へ連行されて、永遠にそこから出られなくなるっついでう」

「てめえの知識はどんだけ偏ってやがる」

その噂自体はあながち間違いではないが、そこまでひどくはないだろう。

「今日はお父さんもママも休みなんだ。たまにはみんなで出かけてみようじゃないか」  
「そうね、パパ。ノラちゃん、まだそういう所に行った事ないものね」

「はいっ、私も行ってみたいですよっ。……………でも」

明るいい声で親父と母親の言葉に答える自称・魔法少女。だが、そう簡単な話でもないのが事実。それが分かっているからこそ、こいつは最後に残念そうな声を零したんだろう。

しかし、両親はこうなる事を予測していたかのように、顔を見合わせてから口を開く。

「ノラちゃんは周りの人に見えないから、それを気にしなくちゃいけないんだよね？」  
「……はい。だから私はあんまり大勢の人間がいる所には行けません」

シユンとした声がフローリングに落ちる。俺の記憶ではほぼ毎日、大勢の生徒がいる学校に行っているような気がするんだが、それについてはツツコまない方がいいのだろうか。

「それは大丈夫よ、ノラちゃん」

「?」 どうしてですか?」

「この前、どうすれば人前でノラちゃんといっても不自然に見えなくなるか、魁人にコツを教えてもらったんだ。お父さんとママは今日のために、一生懸命練習したんだよ」

「え……………」

親父の言葉を聞いた瞬間、自称・魔法少女はこちらを見てきたが、俺は咄嗟に目を逸らす。

「そうなのよお？　しかも、魁人から教えてくれたんだからあ。自分ばかりノラちゃんとかけてるから、今度はお母さんとパパも一緒に出かけられるように、ってね」

エプロン姿の母親は頬に手を当てながら嬉しそうに語る。

それを聞いた自称・魔法少女は俺の顔をグイッと覗き込んできた。近いっつーの。

「本当ですか、カイトさん」

「ばーか。んな訳ねえだろ。てめえが俺にばつかついできてうぜえから、たまには仕事場にも連れて行ってっていう意味で教えたんだけ」

「ん？　そう言う割にはかなり真面目に教えてくれたよな。ねえ、ママ」

「そうね、パパ。魁人があんなに真剣な顔してるの、お母さん久しぶりに見ちゃった」

俺の言葉を聞いて、バカ親共は要らない情報を口にする。そしてさらに自称・魔法少女は顔を近づけてきた。鼻息がかかるような距離、っていうかもうかかっている。

「カイトさん」

「だからちげえつつつてんだろ。てめえの事なんか一ミリも考えちゃいねえよ」



「はは、魁人は照れ屋だなあ」

「そうね。小学生の頃、あかりちゃんと手を繋いでるところに出くわした時と同じ顔を  
してるわあ」

「え。なんですかその超絶面白そうな話。おかーさん、それちよつと後で聞かせてくだ  
さい」

「こいつにだけは教えんじゃねえぞ。つーか、何年前の事を覚えてやがんだ」  
「ふふ。親は子どもの思い出は忘れないものよ」

そう言って嬉しそうな顔をする母親。俺でさえ薄っすらとしか覚えてないのに、よく  
もそんな些細な事を覚えてられるもんだ。って、感心してる場合じゃねえ。

「だから今日は一緒に出かけよう、ノラちゃん」

「お母さんたちは大丈夫よ。もし何かあっても魁人が助けてくれるから、ね？」

両親は自称・魔法少女を見つめてそう言う。というか俺に決定権は無いのか。無いん  
だな。

自称・魔法少女は口を閉ざして両親を見つめ、数秒の間を空けてから頭を頷かせた。

「はいっ。嬉しいです、おとーさん、おかーさん」

それから顔に笑みを浮かべてみせた。それを見て、親父と母親は安心するように息を吐く。

だが、俺は少しだけ違和感を覚えた。

今のこいつが浮かべている笑顔が作り笑いだったから、じゃない。たぶんこれは本心から嬉しいと思っっている顔。なのに、何故か引つかかる。

「よし、じゃあ朝ご飯を食べたら早速準備をしよう」

「お昼はお母さんが腕を奮ってお弁当を作るから、楽しみにしててね」

「わーいっ。おかーさんのお弁当、楽しみですっ！」

そんな感じで日曜日の朝はスタートした。結局、自称・魔法少女に対して抱いたあの違和感がなんだったのかは、朝飯を食い終わって髪型リセットを作ってから、分からないままだった。

## 第十七話



家から車で数十分の場所に目的の遊園地はある。飛ばせば三十分くらいで着くが、タクシードライバーを生業としている親父の運転は普段から超安全運転。

しかし親父曰く、それは車に客と家族を乗せているとき限定、らしい。その言葉の真意は分からないが、親父が昔は走り屋をやっていた、という話を雅さんから聞いた事があった。もしかしたらそのこだわりはそれと何か関係あるのかもしれない。興味ないけど。

「おおー……………」

大人三人分の入場券を買い、俺たちは遊園地に入場する。一番最初に門をくぐり抜け

た自称・魔法少女はその先で立ち止まり、目の前に広がる光景を見て感嘆の声を零していた。

「はは、ノラちゃん驚いてるね」

「ふふ、そうね。初めて来る所でしようから、無理もないわ」

奴の後ろを追う親父と母親は、その後ろ姿を見て嬉しそうに微笑んでいる。

「ここが遊園地、ですか」

「そうだよ。今日はノラちゃんが乗ってみたいものに付き合うから、遠慮なく言ってね」

「おい、気を付けろ」

「おっと、そうだった。ごめん魁人、ついうっかりしていた」

園内にあるアトラクションと人間の群れを見つめて驚いていた自称・魔法少女に声をかける親父。だが、それがあまりにも自然に見えたので、すかさず注意を入れる。

「ふふ、やっぱり魁人が一緒なら安心ね」

「そうだな。魁人がいてくれて助かるよ、本当に」

両親はそう言つて微笑みかけてくる。別にこいつらが変に見られようが構わないけれど、一日中ともに行動をするのであれば軽率な行動は慎んでもらいたい。

「ほら、突つ立つてねえで行くぞ。ぐずぐずすんな」

「あ、待つてくださいよカイトさん」

茫然としている自称・魔法少女にそう言い、俺は先に歩き出す。

どうでもいいが、こいつの頭の上にはみかんが乗っている。居候のクソ主曰く、『どうせ見えないんですから連れて行っても大丈夫です』との事で、強制的に連行されてきたらしい。かわいそうに。

「魁人が一番はしゃいでるみたいに見えるね、ママ」

「そうね、パパ。みんなでお出かけできて嬉しいのかしらあ」

んな訳ねえだろバカ親共。なんで来たのか後悔してるくらいだつーの。



自称・魔法少女がどれから乗ればいいのか分からない、と言ってきたので、俺たち四人と一匹はひとまず園内を歩き回る事に。そうして遊園地という場所が何たるかをだいたい理解したこのクソガキは、初っ端からジェットコースターに乗る事を選択した。

しかし早速、ここで事件が発生。人生初のスリルを体感した自称・魔法少女は降りた直後に『もつと乗りたいですっ！』とか訳の分からない事を言い出し、最終的に俺は七回連続でジェットコースターに乗った。入園から一時間で既に疲労度はピーク。今すぐ帰りたい。

「ほら、どうだいノラちゃん」

「わーっ。おとーさんは見かけによらず力持ちですっ」

「ふふ、ノラちゃんくらいの女の子を肩車するのなんてどうって事ないよ」

「こうしているとカイトさんを見下せるので、実に良い気分です」

「落としていいぞ親父。どうせ誰にも見えちゃいねえんだ。思いつ切っていけ」

次のアトラクションに向かう道中、親父は自称・魔法少女を肩車するとか言い出し、奴も喜んで同意。他人の目に不自然に映らないよう、念のため親父にはバッグを背負わせた。

「さあノラちゃん。次はどこに行きたい？」

「えーつとですね。それじゃあ、あの左右に揺れてる船に乗ってみたいですっ」

「頼むからあれはやめろ。てめえはそろそろ絶叫系から離れやがれ」

「えー。だってあれも面白そうなんですもん」

「もつといろいろあんだろが。このペースで行ったらあと二種類くらいしか乗れねえぞ」

「大丈夫です。今度は五回くらいで満足します、たぶん」

「最後の言葉の所為で信用もクソもねえからな」

「まあまあ魁人。今日はノラちゃんの好きなものに乗るって約束しただろ？」

だが、いつも通りこのクソガキにとことん甘い親父はその我が儘に賛成する。

「ほらー、おとーさんもそう言ってますよカイトさん」

「はは、一緒に乗るのは魁人だけどね」

「なに勝手に人の事を人質にしてんだこのクソ親父」

しれつと実の父親に身を売られた。こいつは俺に死ねと言っているのだろうか。

「じゃあこうしよう。ノラちゃんも同じ乗り物に乗るのは二回までにする事。それなら魁人も一緒に乗ってくれるだろうから。ね？」

親父は肩に乗る自称・魔法少女に向かって言う。いま俺たちが歩いているエリアには人が疎らにしかないのです、この女の姿が見えなくとも誰も違和感を抱かない。

「うーん、なら仕方ありませんね。私も出来るだけ沢山の乗り物に乗りたいですから」

「なんでそんなに上から目線なんだよ」

「今はカイトさんよりも上にいますからっ」

「自信満々みてえだが、ぜんぜん上手くねえからな」

そしてドヤ顔で見下すのやめろ。



「よし、じゃあ行こう。落ちないように気をつけてねノラちゃん」

「はいっ、出発進行ですおとーさんっ」

そう言つて、自称・魔法少女を乗せた親父はバイキングに向かつて歩いていく。ため息を吐いてからその背中を追おうとした時、さつきから黙っている母親の存在に気づいた。

「おい、どうした」

立ち止まったまま親父とあの女の背中を見つめていた母親は、俺に声をかけられてハツと目を見開いた。普段から鈍くさいが、今日はいつにも増して動きが鈍い気がする。

「ううん、何でもないの。ノラちゃんは今日も可愛いわあ、つて思つてただけよ」

「あんまりあいつの事を見すぎんなよ。鋭い奴は目線だけでも違和感に気づくからな」

「うん、気を付けるわ。ありがとね魁人」

そう言うと、母親はいつものほんわかした笑顔を顔に浮かべる。俺は何も言わずに前に行く二人を追おうとした。でも、その足はまた止まる事になる。

「魁人」

「あ？ どうした」

半身になって振り返ると、母親はまだ立ち止まったままあの笑顔を顔に浮かべていた。

「こうして話せるようになったの、いつ以来かしらね。お母さん、とっても嬉しいわ」  
「……………」

「ふふ。本当、あの頃に戻ったみたい。そう思わない？」

母親はそう問いかけてくる。だが、俺は何も答えなかった。

今は昔とは違う。思っている事を素直にありのままの形で吐くのは、不良の俺にとつ

て最も難しい事のひとつ。だから、再び前を向いて言う。

「知らねえよ、バーカ」

本当は、まったく同じ事を思っていたくせに。

◇

それからアトラクションに乗りまくり、時刻は気づけば正午をオーバーランしてしまっていた。そのおかげと言っては何だが、俺たちは現時点で既にこの遊園地にあるアトラクションのほとんどを制覇しつつある。誰にも見えないのを良い事に、ちやつかりタダで楽しみまくってるこの女にはいつか天罰が下ればいい。

テンションが上がりっぱなしだった自称・魔法少女も、いつの間にか自分の腹が減っていた事に気づいたらしく、ゴーカートのコースを何十周もさせられている最中に『お腹が空いたので少し休みましょう』と言い出し、ようやくフードコートに行く事ができた。しかし、飯を食い終わったらすぐにまた完全制覇を目指して園内へと繰り出すという。帰りたい。

「はい、これがノラちゃんの分のお弁当よ」

「わーいつ。開けてもいいですか、おかーさんっ」

「もちろんいいわよ。ちゃんといただきますをしてから食べてね？」

「大丈夫か魁人。食欲はあるか？」

「……誰か俺を助けて」

母親に弁当を渡されて喜ぶ自称・魔法少女だが、俺はその隣でグロッキー状態。親父は俺の介抱をしてくれている。腹は減ってるが、乗り物酔いの所為でまったく食欲が湧かない。

「おおお!! これはもしかしなくてもおかーさん特製のオムライスじゃないですかっ  
!」

「ふふ、ノラちゃんの好物だものね。たくさん作ったからいっぱい食べてね」

「はいっ。私はおかーさんのオムライスが一番大好きですっ! ほらカイトさんっ、いつまでもそんな風にしてるとカイトさんの分も食べちゃいますよっ!」

「てめえは俺に恨みでもあんのか」

俺が恨む事はあれど、こいつに恨まれるような事をした覚えは無い。神に誓ってもいい。

「みかんちゃんもごはん食べようね。はい」

「なんとつ。皆さんの分のみならず、まさかみーちゃんのお弁当まで作っていたとは。やっぱりおかーさんは料理の魔法使いですっ」

「ふふ、本物の魔法使いのノラちゃんには敵わないわ」

母親はタッパーに入れたみかん用の昼飯を取り出し、机の上に置く。するとみかんはすぐさま載っていた俺の腹からジャンプしてタッパーの前へと移動した。

「それじゃあ——いただきますっ！」

自称・魔法少女が手を合わせて大きな声でそう言い、それに続いて俺たち三人も同じようにいただきますをする。みかんはにゃん、と鳴いてからエサに飛びついていた。

「ふふ。ノラちゃんはなんでも美味しそうに食べてくれるから、お母さんも嬉しい」  
「当然ですつ。こんなに美味しいものを食べたなら自然とそういう顔になりますつ」

自称・魔法少女は心底幸せそうに微笑みながら、母親に向かって言う。

「おかーさん。いつか私も、おかーさんみたいに料理ができるようになりたいですつ」  
「あら。じゃあお家に帰ったら一緒に練習をしなきゃね。ノラちゃんもいつかは誰かの  
お嫁さんになるんだもの。それまでに美味しい料理を作れるようにならなくちゃ」

母親がそう答えると、自称・魔法少女は少し驚いたような表情をして動きをびたりと止めた。それから困ったような笑顔を浮かべ、あはは、と乾いた笑い声を出す。

「お嫁さん、ですか。そうですね。私もいつかは、誰かと結婚しなきゃいけないんですよ」  
ね」

「そうよ。素敵なお嫁さんになるにはたくさん練習をしなくちゃね」

「えへへ、そうすれば私もおとーさんみたいに優しい人と結婚できるでしょうか？」

「うっ……の、ノラちゃん。お父さんはそれを言われると嬉しすぎて死んじゃうんだ」

「でも、私はおとーさんみたいな人と結婚したいですつ。おかーさんがうらやましいですつ」

「あらあら。もう、ノラちゃんつたら上手なんだからあ」

「魁人、お父さんはもうダメかもしれない……………」

「勝手に死んどけクソジジイ」

「息子だけは全然うらやましくありませんけど」

「てめえも一緒に墓場に行きてえかクソガキ」

今ならこの女をぶん殴っても罪には問われないような気がする。

「でも、そうですよね。女の子は普通、お料理やお掃除ができなくちゃいけないんですよ」

小さな声で言う自称・魔法少女。それは何となく、俺たち家族に向けた言葉ではなく、自分自身に言い聞かせたメッセージのように聞こえた。

「そうね。けど大丈夫。お母さんが教えたらノラちゃんもきつと上手になるから」

「はい。頑張って覚えたいと思いますっ」

さっきの言葉を不安になっていいるからだど解釈した母親はそう言い、それを聞いた自称・魔法少女はあの困ったような笑顔を消していつも通りの顔に戻った。

それからその話を終わらせるように口いっぱいにもムライスを詰め込み、リスのような顔でもぐもぐと咀嚼し始める。

「ふふ。ノラちゃん、口にケチャップが付いちちゃってるわよ」

「んむ？ んっ——ああ、ごめんなさい。お行儀が悪かったです」

「いいのよ。お母さんが拭いてあげるから、ジツとしてて？」

そう言って、赤くなった口元を拭き始める母親。そうされている間、自称・魔法少女は目を丸くして固まり、母親になされるがままになっていた。もしかしたらこいつ、こういう事をされるのに慣れていないのかもしれない。

「なあ、魁人」



名前を呼ばれ、顔を向ける。

親父は茫然と、母親と自称・魔法少女の姿を見つめていた。

「俺は、夢を見てるのかな」

そして、ポツリとそう呟く。それが俺に対して吐いた言葉なのかは分からない。でも、名前を呼んでから言ったという事は、やっぱり俺に向けて口にした言葉なんだろう。

「バカか。んな訳ねえだろ」

そんな風に答えて、オムライスをかきこんだ。

すると、それを見ていた自称・魔法少女はこちらを見てニヤツと不敵な笑みを浮かべる。

「カイトさんもお口にケチャップが付いています。おかーさん、取ってあげてくださいっ」

「なっ、てめっ」

「あらあら、魁人もまだ子どもなのねえ」

「ぶっ飛ばされてえかクソババア」

「ほら動かない。服に付いちやったらどうするの？」

「……………っ」

「あははっ、カイトさんがおかーさんに口を拭いてもらってますっ。子どもみたいですっ」

「ふふ、大きくなっても魁人はパパとお母さんの子どもだもの」

そうして、主藤家の昼時は過ぎていく。

## 第十八話



「あともう少しで完全制覇ですね、カイトさんっ」  
「てめえはペースを落とすって事を知らねえのか」

昼飯を食い終わり、俺はこのクソガキの宣言通りアトラクション巡りの続きに付き合  
わされた。どうやらこいつの体力には限界というものが存在しないらしい。

「さて、次はどこに行きましょう。カイトさんはどこに行きたいですか？」  
「家」

「それではこのお化け屋敷という所に行ってみましょう」  
「無視かよ。じゃあなんで訊いたんだっつーの」

パンフレットを両手で掂げながらそう言う自称・魔法少女。おそろくどこに行きたいと言つても、この女は俺の意見なんて聞こうともしなかっただろう。

自称・魔法少女の要望により、俺たち一行はお化け屋敷へと移動する。

「ここがお化け屋敷ですか。なんだか禍々しい雰囲気か漂っていますね」

「パパとお母さんは外で待っているわ。魁人とノラちゃんで行つてきなさい」

「分かりました。みーちゃんは一緒に行きますか?」

自称・魔法少女がそう問いかけると、奴の頭の上に乗っていたみかんはにやーと鳴き、親父の腕へとジャンプする。猫が人間の言葉を理解してる事は無視しておこう。

「じゃあカイトさんと二人で行つてきます。さあ、行きますよっ」

「分かったから引つ張んな。変な奴に見えんだろうが」

「大丈夫ですよ。カイトさんは元から変ですから」

マジでこのクソガキを後悔させる方法は無いだろうか。何か苦手なもんでもあればそれを活用できるのだけれど、こいつはそういった自らのウィークポイントを見せな

い。あつたとしてもそれを魔法を使って巧みに隠すので、俺はいつまで経つてもこいつの弱点を知らないままにいる。辛いものが食えない、つて事くらいしか知らない。

この間あかりが作ったカレーを食った時、こいつは『私がいた世界に住む生物はみんな、辛いものが食べられないんですっ!』と悶絶しながら語っていた。香辛料を摂取すると魔力が異常に反応するとかで、身体の構造的に辛いものが食えないらしい。その話を聞いてから、俺はあの時あかりが置いて行つた激辛スパイスが入つた小瓶を常に持ち歩くようにしてる。

手首に付けたフリーパスを見せ、受付のおっさんの前から早足で立ち去る。『い、行つてらっしゃいませ』という裏返つた声が聞こえたけれど、俺はお化け屋敷の中へと急いだ。

「ふふ。あのおじさん、カイトさんを見てビックリしましたね」

「うるせえ。誰の所為だと思つてんだ」

右隣に並んだ自称・魔法少女はニヤニヤしながらそう言ってくる。超ムカつく。

「仕方ないですよ。やんきーさんは他の人間からすれば怖い存在なんですから」

「てめえに言われるとバカにされてるようにはか聞こえねえんだよ」

「だってえ、私からすればカイトさんなんてゼーンぜん怖くないですもんっ。ま、そもそも私には怖いものなんて何も無いんですけどねっ」

前髪を掻き上げてから、ドヤ顔でそう語る自称・魔法少女。ここまで自信満々に口に出せるという事は、もしかしたらそれは真実なのかもしれない。

そう思いながら、俺は暗い通路を進んで行く。

このお化け屋敷は廃病院をモチーフにして作られているらしく、周りには朽ち果てた血だらけの手術台やら『タスケテ』と書かれた鏡やらの小道具が置かれている。

今は隣を歩く女の所為で恐怖を感じなかった。頭の中にあるのはどうすればこのクソガキを後悔させられるか、という事だけ。

「んー、何でしょうかこの異様に静かな場所は。それに、どうしてこんなに暗いんでしょう。お化け屋敷、というのはこういう不気味な場所を進んで行く所なんですか？」

隣で自称・魔法少女が何かを言ってくる。しかし、その内容が頭に入って来ない。

「はあ、他の遊戯と違ってつまらないですね。早く出て次の場所に——」

と、自称・魔法少女が言った瞬間、通路の途中にあった扉から顔面が血に染まった白装束の女が、なんとも幽霊らしい気味の悪い声を発しながら出てくる。予想もしないタイミングだったので、俺も少し身体を反応させてしまう。

だが、俺なんかよりも驚いていた奴がすぐ隣にいた。

「——きゃああああアツ!? なんですっ!? 急になんですかっ!?!」

「……………おっ?」

「こ、こつちに來ますよあの変な人間っ! は、はは早くっ、早く逃げないとっ」

悲鳴に近いような声を出しながら俺の手を引いてくる自称・魔法少女。奴について行く、今度は逆さづりになった全身包帯男が天井から俺たちの前に現れた。

「またなんか出てきましたああアツ!? なんなんですかここはああアツ!!!」

自称・魔法少女は絶叫しながら俺の手を引いてその場から逃げようとす。無意識のうちに戦闘モードになっていたのか、服が私服から魔法少女verへと変わっていた。幽霊たちが追って来ない場所まで逃げ、自称・魔法少女は立ち止まる。息は上がり、俺の手首を握る手の平はかなり汗ばんでいる。そして、暗いお化け屋敷の中でも分かるくらい青ざめた顔色をしているのを見て、俺は悟った。

「な、なんなんですかここ。あんなのが出てくるなんて聞いていませんよお」

こいつ、幽霊が苦手なのか。余裕ぶっこいてたくせに、あるんじゃないか怖いもん。

「お化け屋敷っつーのはあんな奴らが出てくんだよ。知らなかったのか？」

「そんなの私知ってるわけじゃないですかっ！ ああああ……という事はまだあの変な人間が出てくるって事ですかあ？」

「だろうな。俺の記憶だと後半になるにつれてもっとエグい奴らが出てくる」

「な、なんでですかあ……もう嫌ですよお」

涙目になりながら頭を抱える自称・魔法少女。こいつがこんな風になるのを初めて見



た。幽霊っていうよりかは驚かされるのが嫌いなのかも知れない。こりや良い事を知った。

「つし、じゃあ行くか。ここを出ねえとてめえの目的も達成できねえもんな？」

「ま、待つてくださいいっ。あ、そうだつ！ カイトさんは一人で先に行つてくださいいっ。私は後で行きます。そうすれば私が見えないあの人間たちは出てこないでしょうからっ」

腕を引っ張つて先に進もうとすると、自称・魔法少女はそんな提案をしてくる。

だが、こいつの弱点を知った俺がそれを許すわけがない。

「ほお？ さつき怖いものは何もねえつつたのはどこのどいつだ？ まさか天下の魔法使いさまが、人間が作ったこんなお化け屋敷なんかでビビるわけねえよなあ？」

煽るようにそう言うと、自称・魔法少女はピクリと身体を反応させた。それから涙が浮かんだ目で睨んでくる。その視線も、今はどこか弱々しい。

「あ、当たり前ですっ！ この私がそんなズルい事するわけないじゃないですか。さ、さつきも言いましたけど、私に怖いものなんてありませんからっ！」

そして、前髪を払いながら安い挑発に乗ってくる。やっぱり、こいつはこういう奴なんだ。

「なら行こうぜ。次はどんな幽霊が出てくんだろうな。今度はビビんじゃねえぞ？」  
「バカにしないでください。私は魔法少女。怖いものなんてありませんから」

前髪を触りながら自分に言い聞かせるように言う自称・魔法少女。数分前と同じ言葉なのに、聞こえ方が全然違う。震えるその声を聞いてから、俺は再び先に進もうとした。

「……………でも」

左手を握られる。振り向くと、自称・魔法少女が目を逸らしながら俺の手を握っていた。

「か、カイトさんが怖がらないよう、こうしてあげます。今だけ特別です。感謝してください」

手を震わせながらふん、と鼻を鳴らす自称・魔法少女。そんならしくない姿を見て、少し笑った。

そうして左手を握られたまま、お化け屋敷の中を進んで行く。

幽霊が出て来る度に、隣からうるさい悲鳴が聞こえてきたのは言うまでもない。

## 第十九話



さらに時間は流れ、ついさつきまで青かったはずの空がいつの間にか橙色に染まっていた事に気づく。俺たちはお化け屋敷の後もペースを保ったままアトラクションを回しまくりに、全制覇を達成するまであと一歩という所まで来ていた。

「これであと一つですねっ。いやあ、さすがにちよつと疲れちゃいましたー」

うーん、と背伸びをする金色の女。言葉とは裏腹に、そのバイタリテイにはまだまだ余裕がありそうだった。こんだけ遊んでおいてちよつとしか疲れないこのクソガキの体力の限界はどこにあるんだろうか。知りたくもないが。

「では最後の一つは……」

自称・魔法少女はある方向を見て言った。

そこには、ここに来てからずっと見えていたであろうアトラクションがある。

「あれは観覧車、というのですよね」

「そうだよ。そろそろ暗くなっちゃうから、あれに乗って最後にしようか」

疲れた様子の親父がナチュラルに帰る事を提案しながら言う。夕日に照らされる観覧車を見つめながら、金髪がこくりと頷いた。

「少し名残惜しいですが、暗くなつては仕方ありません。今回はあれで最後にします」

もう二度と来ねえよ、という本音が出てしまいそうになったが、それを言ったらまた来週もここに訪れる最悪のビジョンが見えたので、咄嗟にその衝動を抑える。

「あそこでいいんじゃないかしら、パパ」

「そうだね、ママ。うん、ちょうどいいかもしれない」

頭の上のみかんを乗せた自称・魔法少女が先に観覧車へ歩き出した直後、両親はそんな言葉を交わしていた。だが、抽象的過ぎて内容は分からない。訝しみながらもそれについては触れないまま、女の後を追った。

そうして観覧車の下に辿り着き、俺たちはひとつの箱の中に入る。少し狭いけれど、隣にいるこの女にとってそんな事はどうでもよかつたらしい。

「おおおつ、本当に上がって行きますよカイトさんつ。魔法を使わなくても空を飛べるだなんて、何だか不思議な感じがしますっ」

窓に顔を貼りつけながら、徐々に離れていく地面を眺めている魔法使いの女。そんな無邪気な姿を、向かいに座る両親はいつも通りの笑顔を浮かべながら見ていた。

柔和な夕日が観覧車に乗る俺たちを染めている。他の誰かには見えなくても、確かにここにいる一人の魔法使いの全身も例外なく、その温かな光に当てられていた。

それから箱の中に小さな沈黙が落ちる。聞こえてくるのは観覧車が鳴らす何か擦

れるような音と、寝ているみかんの微かな寝息だけ。

一分間ほど静寂が流れた後、向かいに座る親父が徐に口を開いた。

「ねえ、ノラちゃん」

「はい？　なんですか、おとーさん」

親父の優しい気な声音に反応する魔法使い。たぶん、そのトーンがいつもとは違って、いる事にはこいつも気づいている。俺でさえも分かったんだから。

「大事な話を、してもいいかな？」

確認を取るように親父が言うと、窓の外を向いていた金髪の女は向かい側に座る二人の方を見て姿勢を正した。それから何も言わずにこくりと頭を頷かせる。

「よかった。ありがとうノラちゃん」

親父はそう言って、微笑みを浮かべたまま続ける。

「今日は、楽しかったかい？」

「……はい。とても、楽しかったです」

「それはよかった。お父さんたちもとっても楽しかった。久しぶりにこんな一日を過ごせた気がして、すごく幸せだったよ」

親父の言葉に母親は頷く。その穏やかな目は確かに、前に座る女を見ていた。

「今日だけじゃない。魁人がノラちゃんを連れて来てから、毎日がずっと楽しかった。まるで、本当に夢を見てるんじゃないかって思うくらいにね」

親父はそう言い、窓の外に目を向ける。その横顔に、優しさで塗り固められた嘘は見つけられなかった。

「ノラちゃんが魔法使いで、何か事情があつてうちに住んでいるのは分かつてる。君はもしかしたら俺たちが都合の良い家族だと思つているのかもしれない。でもね」



親父は言葉を切り、向かいにいる少女の方へ視線を向けた。

「それはお父さんたちも同じなんだよ、ノラちゃん」

「……………同じ？」

「そう、同じ。お父さんもママも。きっと魁人もね」

そして、親父は本音を語り出す。それを聞いて、母親は顔を悲し気に歪め始めた。

「奇妙だよね、こんな話。分かってるよ。でも、こんなものあり得ないって頭で分かっている、心を鬼にする事が、できなかった」

親父は語りながら涙を目に浮かべる。

「君が何者であっても関係ない。ただ、あの子によく似た君が家の中にいてくれるだけでよかった。それだけで、本当に……………」

やがて母親の泣き声が聞こえてくる。それでようやく、この二人が何をこいつに言い

たいのか理解した。きっと、この女も気づいている。その何かを悟ったような顔を見れば明白だった。

「だから、ノラちゃん」

親父はその名前を呼び、手を伸ばして小さな手を掴む。

そして、自分の前にいる魔法使いに向かって、その願いを口にした。

「本物の家族に、ならないかい？」

そんな、許される訳もない——哀れな願いを。

「……………かぞ、く？」

「そうだよ。これからは居候なんかじゃない。本物のうちの家族としてあの家に住むんだ」

金髪の少女は目を丸くしながら、その言葉を聞いていた。

「そうすればもう、今日みたいに姿を隠さなくてもいい。どこにだって一緒に行けるようになる。ノラちゃんが行きたいのなら、学校にだって通えるかもしれない」

「そうよ、ノラちゃん。家族になれば人目を気にしなくても大丈夫なの。お母さんと買物に行ったり、公園をお散歩したりできるようになるのよ？」

両親はそう言い、少女の手を優しく握り締める。そんな言葉を聞いて、魔法使いは少しだけ困ったような顔をした。

「私は、魔法使いなんですよ？」

「関係ないわ。それが本当だとしても、ノラちゃんはノラちゃんだもの」

「魔法使いさんでも、あなたは私の可愛いノラちゃん。だから、何も気にしないでいいの」

母親はそう言って、小さな身体をそつと抱き締めた。その言葉と行為がよほど予想外だったのか、少女は母親に抱き締められたまま、目を見開きながら茫然としていた。

観覧車はようやく頂上付近に近づく。これから時間をかけて、元の場所に戻るんだろう。

「……………おとーさん、おかーさん」

しばらくして、ポツリと零される声。母親は抱き締めていた腕を解き、その身体から離れた。親父も手を離して、目の前にいる金色を見つめた。

俯き、垂れた長い金髪がその表情を隠す。

観覧車が頂上に来た所で、俺たちが乗る箱の中に言葉が紡がれる。

少女の儂い声音は、どこか憂いを含んでいるようだった。

「嬉しい、です。こんなに嬉しいのは、この世界に来てから初めてです」

魔法使いは隠していた表情を露わにし、潤んだ緋色の瞳で両親を見つめた。

「私も、おとーさんとおかーさん、カイトさんと家族になりたいです。あの家でずっと暮らしたい。私が魔法使いでも受け入れてくれる皆さんと、一緒にいたいです」

「なら」

母親がそう言うのと、魔法使いは首を横に振る。それからその続きを語り出した。

「でも、それはできません。魔法使いと人間は、ずっと一緒にいるべきではないんです。例えば皆さんが家族として迎えてくれたとしても、私は人間になる事はできないのですから」

そこで一度言葉は切られ、数秒の間を置いてから再び口は開かれた。

「それに、私は迷惑をかけないために姿を見せてないわけじゃないんです。もし家族になったとしてもそれは同じ。私はどうしても、皆さん以外の人間には姿を見せられないんです」

困ったような顔でそう語る金色の魔法使い。確かにこいつは俺と出会った時、三人以上には姿を見せられない、と言った。俺はその理由を追及しなかつたし、この女も言及しなかつた。

「それは、どうして?」

「……………そこまで言ってくれたおとーさんとおかーさんに、これ以上嘘は吐けません。二人が本音を語ってくれたのですから、私もこれから真実を語ります」

魔法使いはそこで言葉を止め、一呼吸置いてから口を開く。

「——ツ!？」

はずだった。

## 第二十話



突如響いた爆音。直後、俺たちが乗っている観覧車の箱は左右に激しく揺れ、俺は反対側の窓に身体を叩きつけられた。

受け身など取れるわけもなく、激突した左腕と背中に痛みが走る。両親たちの状況を確認しようとするが、箱が揺れている所為で視界が何も捉えてくれない。

「おかーさんっ?! おかーさんっつてば! 返事をしてくださいっ!」

揺れが多少治まり、ハッキリと目が物を捉えられるようになったと同時に聞こえてくる焦った声。何とか首だけを横に動かし、そこに目を向けた。

「なんで私を庇ったりしたんですっ。私は大丈夫だったのに、どうしてっ!」

見えたのは、箱の床に倒れる母親に向かって必死に声をかけている魔法使いの姿。母親の額には血が滲み、垂れたそれが白い肌を伝って細い腕を赤く染めていた。

その母親の足元に覆いかぶさるように倒れている親父は、かろうじて意識を保っている。

鳴き声が聞こえ、その方向へ目を移す。俺が座っていたはずの座席の上。そこに、みかんが短い四本足で立っていた。どうやら怪我は無いように見える。

だがみかんは窓の外を見つめながら、全身の毛を逆立たせていた。

「……………まさか」

異常に気づいた魔法使いは窓の外を凝視しながらそう呟き、俺もその視線を追うように、夕暮れに染まっていたはずの外の景色を目に映す。

けれど、そんなものはどこにも無かった。

「……………んだよ、あれ」



この目が映し出しているのは、灰色の空。そして、俺たちが乗る観覧車の周囲を取り囲むように、羽が生えた無数の黒い何かがちちらを見つめていた。

「やられました。まさか、こんなタイミングを狙って来るだなんて」

そう言いながら、苛立つように自分の前髪を右手で握り締める魔法使い。

こいつがこんな顔をするだなんて——じゃない。今はそんな事よりも大事な事がある。

「しつかりしろクソガキつ。この状況が理解できんのはてめえしかいねえんだろっ!」

倒れたままそう叫ぶと、見開かれた緋色の目はこつちを向いた。もしかしなくてもこいつは今、我を忘れていた。どんな物事でもムカつくほど冷静に対処してきたこの女が、初めて俺に油断を見せた。つまり、これはそうなってしまうほどヤバい状況なんだろう。

「……………分かりました。ですが、その前にひとつ聞いてください」

魔法使いは抱えていた母親を床にそつと寝かせ、立ち上がる。それから閉ざされていた観覧車の箱のドアを何かの魔法でぶつ飛ばした。

「あの魔物たちは、私を連れ戻しに来たんです。この前、公園に現れた二匹の魔物も目的は同じ。あれは、私を元の世界に連れ帰るために召喚されたんです」

服装を魔法少女モードに変化させ、右手の赤いステッキを握り締めながら、早口にそう説明した。すると開け放たれた観覧車の箱の外から、何かが聞こえてくる。

『ヒメサマー——ヒメサマッ』

『ワスレダマ——ワスレダマッ』

観覧車を囲っているデカイ蝙蝠のような化け物たちは、気持ち悪い声でそう言っている。『姫さま』、『忘れ玉』と聞こえる気がするけど、それで合っているのかは分からない。

「……連れ、戻しに？」

「はい。勝手にいなくなつた私を、世界を越えて追つて来たんです。魔法が使えない人間しかいないこの世界に、あんな魔物なんかを引き連れて」

無くなつた扉の前に立ち、前を睨みながら唇を噛む魔法使い。それがどういう意味なのか訊ねようとした時、誰かが俺よりも先にその言葉に返事をした。

『——その通りでございます』

声の方向へ目を向ける。だが、そこには何も無い。

意味が分からず声が聞こえてきた場所を見つめていると、不意に白い光が宙に浮かび上がった。その光はしばらくして人の形へと変わり、やがてそこから一人の影が身を現した。

「……………なんで、あなたが」

「お久しぶりでございます。こうして顔を合わせるのはいつ以来でしょう」

空中に浮かんだまま頭を下げってくるのは、背の高い一人の男。白い制服を纏い、銀色

の剣を腰に差している。さらりと長い髪の色は、俺の前にいる魔法使いと同じ金色だった。

「知りません。そんなのどうだっていいでしょう。さっさと失せてください」

「そういうわけにはいきません。そんな事をすれば私が国王様に叱られてしまいます」  
「いいから早く帰りなさい。私が怒って、煩い口がついたその顔を弾き飛ばす前に」

金髪の女がそう言った途端、背中に寒気が走る。今のは何だ。武者震い？ ちがう。そんな生易しいもんじゃない。今のはたぶん、この女が出した——殺気だ。

「やはり一筋縄ではいきませんか。そうだと思つて魔物たちを連れてきたのですが」

「聞こえなかつたんですか、グラウス。早く魔物を連れて帰りなさい。これ以上この世界に留まるというのなら、本当に容赦はしませんよ」

殺気を出しながらそう語る金色の魔法使い。だが、グラウスと呼ばれたあのルックスの良い男は、その忠告を聞いても表情ひとつ変えなかつた。

「ですから、そういうわけにはいかないのです。本当はご自身でも分かっているでしょう？ あなたは今、禁忌を犯している罪人です。いくら国王の娘だとしても、その罪を無かった事にはできません。いや、むしろそれを犯したのがあなただからこそ、正しく裁きを加えなければなりません。それに、あなたは私がただでは帰れない事を知っているはずだ」

白い制服の男はこちらに歩み寄りながら言う。

そして、奴はニヤリと口元に笑みを浮かべて再び口を開いた。

「改めてお告げします。あなたは城から秘宝を持ち出し、世界を越えるという大禁忌を犯した。私には、罪人を連れ帰る義務がある」

白い制服の男は両手を上げ、目線の先に立つ魔法使いに告げた。

「さあ、帰りましょう。こんなくたびれた世界の薄汚い空気を、これ以上あなたに吸わせるわけにはいきません。そうでしょう——ノーライナ姫」

「……………姫？」

白い制服の男が口にしたその言葉が、何故か頭に引つかかった。

「……………私は、帰りません」

「なぜです姫さま。あなたが生きるべき場所はこんな世界ではない。今すぐ国に戻り、次の戦争の準備をしなければならぬ。それが、姫さまに与えられた使命なのです」

グlausと呼ばれる男がそう言った直後、金色の魔法使いは大きな舌打ちをした。

「うるさい。そんなのどうでもいいんです。私はもう、あの城には帰らない」

「お言葉ですが姫さま。それは我が儘というものです。あなたには国と城を守る義務がある。だと言うのに、その責務を投げ出し、挙句の果てにこんな世界に逃げ込むとは。国王様と女王様がお怒りになる気持ちもよく分かります」

少女の頑なな言葉を聞き、グlausは呆れるような顔を浮かべる。

「姫さまが城から逃げてから、あのお二人は血眼になって『姫を探せ』と騎士たちに命令

しました。そして私たちはこの二か月間、世界中を探し回りました。それでも手がかりひとつ掴めなかった。魔力の残滓すら残さず、あなたは煙のようにどこかへ消えてしまった」

「……………」

「ですが、ひとつだけ不可解な事がありました。城の地下に封印されていた三つの宝玉が無くなっていた。あの秘宝を外部に持ち出す事は、絶対の禁忌とされているというのに」

グラウスは右手を上げ、その人差し指をこちらへ向けてきた。

「それでもしや、と思ったのです。姫さまは禁忌を犯し、なおかつそれを越える大禁術を使ってしまったのかもしれない、と。どうやら、その推理は正しかったようですね」

この女の腰には、白いベルトのようなものが巻かれている。

そこに付けられた三つの透明な玉。おそらく、グラウスはそれを指差していた。

「おい、どういう事だ」

俺が声をかけても、魔法使いの女は前を向いたまま固まっている。ただ金色の髪だけが前方から吹いてくる冷たい風に飄られ、ゆらゆらと揺れていた。

「おい」

「……………ごめんなさい。私はやっぱり、皆さんと一緒にはいられません」

もう一度声をかけると、そんな言葉が零される。親父と母親が聞いているかどうかは分からないけれど、少なくとも俺にはその声が耳に届いている。

「そして、これから少しだけ怖い思いをさせてしまいます。でも、安心してください。皆さんは私が絶対に守ります。何が起きても、あなたたちだけは——必ず」

前方へ突き付けられる赤いステッキ。

それを見て、白い制服の男は予想通りだと言うようにこくりと頷いた。

「やはりそうする事を選びますか、姫さま」



「黙りなさい。こうなつてしまつた以上、あなたを倒す以外にこの人間たちを守る方法はありません。あなただつて、それを覚悟してこの世界に来たんでしよう」

「さあ、何の事やら。私はただ、そこにいる人間を殺した上で、姫さまを連れ帰る事だけを考へておりました。そうしなければならぬ理由が、私にはありますから」

グラウスは腰に差しした銀色の鞘から剣を抜き、それをこちらに突きつけてきた。今度はこの女じゃなく、後ろにいる俺たちに向かつて。

「グラウス。あなたはもしかしくなくても、私を監視していたんですか?」

「もちろんです。いくら人間といへど、無駄な殺戮は行いたくありませんから」

剣の切っ先を俺たちの方へ向けたまま、グラウスは言葉を続ける。

「姫さまが城から持ち出した宝玉は三つ。ならば、あなたが姿を見せた人間は少なくとも三人。この数日間ですの仮説は確信に変わりました。姫さまは、その三人の人間にしか姿を見せていない。だから、私が殺す人間はそこに居る三人だけでいい。そうでしょう?」

男はそう語り、また口元に笑みを浮かべる。それを見た瞬間、何故か全身に鳥肌が立った。

「……………ふざけないでください。あなたなんか、この人間たちは殺させません」

「ほう。『戦場の邪神』と呼ばれた姫さまが、まさかそこまで人間に執着するとは。これは私も予想外です。しかし、姫さまが命を賭ける価値はその人間たちには無い」

「あなたにはその価値は分かりませんよ。あなたは、この世界を見くびっています。人間が支配した地球は、私たちが思っていたほど悪い場所ではありません」

「ですが、そこにいるのは力を持たない動物ではありませんか。そんなゴミを気に入る意味が分かりません」

金髪の男がそう言った瞬間、身体に熱が帯びてくる。

ああ、間違いない。あいつは俺を馬鹿にした。俺だけじゃなく、俺以外の人間も。

「あなたには一生分からなくていい。ただ、私は何度でも言います。この世界は美しい人間も、猫という可愛い動物も。今の私にとってはそのすべてが、かけがえのない宝物

なんです」

魔法少女はそう言うてから、戦闘態勢に入るように重心を下げる。それを見て、グラウスと呼ばれた男も銀色の剣を両手で握り締めた。

「カイトさん」

名前を呼ばれ、顔を上げる。数秒の間を置いて、声は聞こえてきた。

「これが終わったら、私はあなたたちに全部を話します。だから、今はどうか見守っててください」

「……………いいのか？」

「これは、私が招いた災厄です。その落とし前は自分てめえでつけます。やんきーのカイトさんなら、分かってくれますよね？」

馬鹿みたいな事を言われたが、その気持ちは伝わった。

「よく分かんねえけど、怪我はすんじゃねえぞ。このバカ親共がうるせえからな」

そう言ってみせると、金髪の少女はふつと笑う。

「観覧車が下まで戻ったら、皆さんを連れて逃げてください」

「無茶言うな。この状態でそんなもんできるわけ」

「それは分かっています。私を誰だと思っっているんですか？ — 治癒 —」

無茶振りを否定すると声が被せられ、それと同時に薄緑色の光が全身を包み込んだ。

「こうすれば、カイトさんなら二人とみーちゃんを連れてでも逃げられますよね」

「てめえは何回、俺の身体を改造すりや気が済むんだ」

「カイトさんがお望みなら何度でも。でもごめんなさい。本当は二人にもかけてあげたいですが、これ以上魔力を無駄に出来ないのです、今はカイトさんだけで許してください」

自由になった身体を起こし、前に立つ小さな背中を見つめた。

「遊園地の周りには結界が張られています、カイトさんの全力パンチを当てれば壊れるはずですよ。そこから外に出れば、あの男も魔物も追ってきません」

金色の魔法使いは俺に向かってそう言った。だけど。

「てめえはどうすんだ」

「私は、あの男を倒してから家に帰ります。カイトさんたちは先に帰っていてください」  
「本当に」

大丈夫か、と言いかけた時、緋色の目はこちらを向く。

「大丈夫ですよ。この世界で私が帰れる場所は、あの家しかないんですから」

そう言い残し、魔法使いは観覧車の外へと飛び出して行く。向かう先は空中に浮いて待ち構えていたグラウスとかいう男。奴らが戦う理由は分からないけれど、あの女が俺たちのために戦ってくれている事だけは分かった。だから今は、あいつの言う通りにする。

「親父」

「魁、人……………ノラちゃんは」

「あいつは大丈夫だ。それより今はお袋の方がやべえ。とにかく、ここを出て早く帰るぞ」

母親は倒れたまま動かない。息はしているようだが、ここでは応急処置すらままならない。

「そうか……………ごめんな」

「なんで謝んだよ。悪いのはあんたじゃねえだろうが」

そう言うと、親父は首をゆっくりと横に振った。

「そうじゃない。魁人に相談もせず、ノラちゃんにあんな事を言ってしまった」

それから、うわ言のように親父は謝罪を繰り返した。でも、今はそんなのどうだって

いい。

やがて観覧車は地上に到着し、意識の無い母親を背負い、同時に親父に肩を貸してやつて地面に降り立った。みかんはリーゼントの上に乗っている。

「頑張れよ二人とも。あと少しだからな」

そうして数分かけて俺たちは門の前まで到着する。

あいつが言っていた通り、ここには結界という見えない壁が張られているらしい。

「ちよつと離れてろ」

親父と母親を地面に座らせてから、助走をつけてその結界を全力で殴る。すると、拳が当たった箇所には罅が入り、やがて人が通り抜けられるくらいの穴が開いた。

再び両親を抱えて歩き出す。そして、そこを出る前に一度後ろを振り返った。

姿は見えないけれど、まだあいつが戦っているのは確か。それを無視して自分たちだけが逃げ帰る。それを思うと、何故か心が痛んだ。俺なんか力が力になれないのは分かっているのに。

でも、あいつは必ず帰って来ると言った。帰って、俺たちにすべてを話してくれる、と。

だから、今はその言葉を信じて安全な場所に逃げる。家に帰って、あいつの帰りを待つ。

「……………先に帰ってんぞ」

灰色に染まった遊園地に向かってそう言い残し、俺は両親を連れて結界の外に出る。その直後、『すぐに帰ります』という誰かの声が聞こえたような気がした。



## 第二十一話



遊園地を出た後、俺たち三人と一匹は駐車場に停めていた親父の車へと戻り、そこで一時間ほど休んでから家に向かった。事故らないか心配だったが、長年タクシードライバーをやってきた親父の運転は、これくらいでは精度を落とさないらしい。

「……………」

眠ったままの母親をソファの上に寝かせ、その横に腰掛ける。頭に乘っていたみかんはようやくそこから降りて、今度は俺の膝の上に座った。

痛む手でみかんの頭を撫でながら、目を閉じる。時刻はおそらく夜の十時前。静かなリビングの中には、時計が奏でる一秒を刻む音だけが鳴っていた。

「お茶、淹れてくるよ。魁人も飲むか？」

ソファの前で母親の額の傷を診ていた親父がそう言ってくる。俺は黙って頷いた。

「分かった。なら、ママを見ていてくれ」

親父は台所へと向かう。それから、俺は横で寝ている母親へと目を向けた。

「……………なんなんだよ」

何故こうなったのかを改めて思い返す。だが、それも上手くいかなかった。いや、そもそも理解が出来ないのだからそれも当たり前だろう。

「姫、さま」

あいつは、確かにそう呼ばれていた。現実だけじゃなく、夢の中でも。

煌びやかな衣装を身に纏い、つまらなそうに椅子に座っていたあの金髪の女。あれが

あいつである事は間違いない。なら、あの女は元の世界ではお姫様だったつてのか？  
思い返せば、何者であったかを訊ねてもあいつはその話を自然に往なしていた気がする。

だけど、もしそうだったとしても、そんな事は俺たちには関係ない。それはあいつ自身も分かっていたはず。なのに、その事実をあえて隠そうとした。

自分を知っている奴がない世界で、素性を隠す理由。

「分かるわけねえだろ、バカ」

天井に向かって悪態を吐く。こんなの、目を瞑りながら迷路から出るみたいなものだ。

「お待たせ」

しばらくして、親父がお茶が入ったカップを持って戻ってくる。

そうして俺と親父は黙ったまま、その緑茶を飲んだ。腹は減っているけれど、何も食う気にはなれない。

「魁人」

「……んだよ」

沈黙を破って親父が名前を呼んでくる。俺は目線を膝の上に乗ったみかんの耳に向けたまま、ぶつきらぼうにそう答えた。

長い間を置き、浅いため息を吐いてから目線を下に向けたまま、親父は口を開く。

「やっぱり、俺たちはおかしいのかな」

「……何がだよ」

「魁人だって、本当は分かってるんだろ」

親父は静かな声で語る。だが俺は何も言わなかった。

「俺たちのように壊れた家庭じゃなければ、あんな女の子を居候させる訳ない。そうだろ？」

「ああ」

「だからやつぱり、俺たちはおかしいんだ。ずっと、おかしい家族だったんだ」

親父は顔を歪ませながら唇を噛み、続ける。

「壊れてるからこそ、俺たちはあの子を受け入れられた。そして……救われたんだ」

涙を浮かべながら、親父は見つめてくる。その顔を見た瞬間、胸が少し痛んだ。

「おかしい家族でいい。それでも、俺はノラちゃんと暮らしたい。じゃないと、また」

そう、親父が言った時、玄関の方から物音が聞こえてくる。

俺と親父は同時に立ち上がり、俺たちはリビングに入ってくる女を迎えた。

「……………ノラ、ちゃん」

「おとーさん、カイトさん。ただいまです。ごめんなさい。少し遅くなっちゃいました」

そう言ってあはは、と笑う魔法少女。だが、俺には笑っていられる意味が分からな

かった。

魔法少女は、ボロボロだった。服は裂け、焼かれ、血が滲んでいる。腫れた右目はほとんど開いておらず、白いはずの頬はまるで、血の化粧を施しているかのように赤く染まっている。奴はリビングの入り口に肩を預けて、何とかその満身創痍の身体を立たせていた。

「お前……」

「さつき言いましたよね。必ず帰ります、って。私は約束を破らないんです。私は、とってもお利口さんですから。ちよつと怪我はしちゃいましたけど」

リビングに響く笑い声。だが言葉にはいつもの覇気が無い。

「全然ちよつとじゃないだろうっ！ 大丈夫かいノラちゃんっ」

「平気ですよ、おとーさん。こういうのには慣れてるんです」

「でもー！」

「心配してくれて、ありがとうございます。私は、その優しさが欲しかったんです。――

「治療――」

薄緑色に淡く光る、魔法少女の全身。

しばらくしてその光が消えると、その身体にあつた傷はほとんど無くなっていた。

「……………魔法で治せんなら使つてから入つて来い、バカ」

「無茶言わないでください。私にだつてできない事はあるんです。今の回復魔法は、おとーさんが心配してくれたからこそ何とか使えたんです」

「は？」

「カイトさんは知らなくていいです。今はそれより、もっと大事な話をしなくちゃいけません。おかーさんは……………まだ起きていませんか」

魔法少女はソファに横たわる母親を一瞥する。

それから俺と親父を交互に見て、口を開いた。

「あんまり悠長に話をしている時間はありません。なので、先に結論から言います」

その独白は、そんな前置きを置いてから始まった。

「私は、この家から出て行きます。それを伝えるために帰って来たんです」



「え……………?」

「ごめんなさい、おとーさん。さつきあ言ってくれたばかりだというのに、こんな事になるだなんて。でも、仕方ないんです。いつかこの日が来るのは、私も分かっていますから」

その言葉を聞いて、親父は声を零す。その表情を見つめて、魔法少女は再び語り始めた。

「まず、私の正体から話します。一度しか言わないので、よく聞いていてください」

俺たちに何も言わせないように、奴は淡々と話を進める。



「先ほど遊園地に現れたあの男や魔物たちが言っていたように、私は向こうの世界にある国家の王の娘——いわゆるお姫さまなんです。自分で言うのもなんですけど、こう見えてすごく偉い存在だったんです。それはもう、いなくなったら大きな国がおかしくなってしまうくらいに」

その真面目な表情に、嘘を吐いている雰囲気は感じられなかった。

その言葉を聞いて、俺はずっと前から気になっていた事を訊ねる。

「なら、てめえはなんでこの世界に来た」

「簡単です。あなたと同じですよ、カイトさん」

「なんだと?」

予想外の返答に素で訊き返す。魔法少女は一度頷いてから口を開いた。

「面倒だったからです、何もかも」

「あ?」

「やんきーのカイトさんなら分かるはずです。あの世界で私に与えられる仕事のすべて

が、くだらなかつたんです」

魔法少女は微笑みを浮かべながら続ける。

「想像してください。来る日も来る日も城の中に幽閉されて、外に出られるのは戦争の時だけ。当然、友達なんて誰もいなくて、私に許されたのは小さな魔物の子どもと部屋の中で戯れる事だけです」

リビングの白い壁を見つめながら、魔法少女は何かを思い出している。それは多分、こいつにとって思い出したくないであろう記憶。その悲しげな顔を見れば、一目で分かった。

「私は子どもの頃から王族としての権威やら、姫としての誇り高い生き方やら、興味の無い事ばかり教えられて育ちました。お父様やお母様に会えるのは、仕事の話をする時だけ。赤ん坊の頃は分かりませんが、両親に頭を撫でられたり抱っこをしたりしてもらった記憶は、一度もありません。私は生まれた時からただ、国のために生きる道具として育てられたんです」

呆れるようなため息。それから、また言葉は紡がれる。

「私は、そんな事なんて何ひとつやりたくなかった。他の子どもみたいに自由に外に出て、一緒に遊びたかった。魔法使いを殺すための魔法や剣の使い方なんかじゃなく、もっと楽しい事を学びたかった。なのに、私にはそんな事すら許されなかった。王様と女王様の娘として生まれたという、ただそれだけの理由で。私は、何も悪い事なんてしてないのに」

「……ノラちゃん」

「それをくだらないと言わず、なんと云えばいいんです？　なんで私がそんな面倒な事をしなくちゃいけないんですか？　私は、そんな事をするために生まれたんじゃない。どれだけ素晴らしい戦果を上げたって、私にはせいぜい新しい魔物の子どもを与えられるだけ。あの世界の大人たちはそれで私が満足すると、本気で思っていたんですよ？」

苛立ちを露わにする魔法少女。その殺気を感じ取ったのか、みかんは俺の影に隠れた。

「……………でもある日。私はこっそり部屋から抜け出して、本が保管されている倉庫に忍び込みました。そこには、私の知らない世界の事が書いてある本が沢山あったんです。メイドや騎士たちに見つからないように時々そこに行って、いろんな本を読み漁りました。いつしかそれが、私の唯一の楽しみになっていったんです」

魔法少女は少しの間を空けて、再び語り出す。

「そして、私はある一冊の本を見つけました。そこに書いてある内容は、すべて私の心を揺さぶりました。それが、この世界の本です」

「この世界？」

「そうです。誰が書いたのかは知りませんが、私がいた世界にもこの世界の事が記された本があったんです。特に、海に浮かんだ小さな島——日本という国の内容を何度も読み返しました。そこには魔法も無くて、私の嫌いな貴族もない。戦争も無くて、みんなが自由に暮らしている。四季があつて、猫という可愛い動物がいて、優しい人間が多い国。ここまで言えば、私がここにいる理由もなんとなく分かりますよね？」

その質問に俺と親父はこくりと頷いた。それを見て、魔法少女は少し笑う。

「私は、どうしてもその世界に行ってみたくなくなったんです。何もかも投げ出して、こんなくだらぬ世界を抜け出して、地球に行きたい、と。だから、十二歳になった日。私は禁忌を犯してこの世界にきました。そして、捨てられた少女のフリをして、拾ってくれそうな人間を探していた時、変な髪型の人間と出会ったんです」

驚いた俺を見つめる魔法少女。その反応は予想通りだ、と奴は何も言わずに語った。

「この世界に来たのは、ほんの出来心だったんです。何もかもドロップアウトして、あのくだらぬ世界から自由になりたかった。だから、私はカイトさんと同じなんです」

「あの男がてめえを連れ戻しにやって来たのは、それが理由か」

「ご名答。やっぱり、何も言わずに家出をすると誰かしら追いかけてくるんですね」

魔法少女は腰に巻いた白いベルトを外し、そこに付いている三つの透明な球を俺たちに見せてくる。

「世界を越える魔法というのは、私の世界では禁術として扱われているんです。だから、

普通の魔法使いには使えません。でも、最強の魔法使いである私にはそれが使えました」

「なんなんだ、そりゃ」

「まあ、先に話を聞いてください。世界を越える魔法は問題なく使えました。ですが、それで万事解決というわけでは無い。魔法使いには無駄な制約が本当に多いんです」

魔法少女はその透明な球をひとつ外し、それをこちらに見せてくる。

「それが、別の世界にいる存在に自分の記憶を残したまま帰れない、という制約です」

意味が分からず首を傾げると、魔法少女は手の平の上で球を転がしながら語り出す。

「これは、ワスレダマと呼ばれる、私がいた世界に語り継がれる宝玉です。その名の通り、この透明な玉に魔力を込めると、特定の相手のある記憶を失くさせる事ができます。例えばそれは、私の姿を見た人間にも使えます。すると、どうなると思いますか？」

そう言われ、散らばっていた謎がカチン、と音を立てて繋がる感じがした。

「……………俺たちはお前の事を忘れて、お前は元の世界に帰れるようになる」

「その通りです。これが、私が三人にしか姿を見せられなかった理由です」

ただ、と魔法少女は続ける。

「当然、私の後を追って来たグラウスも同じ禁術を使っています。でも、彼はこのワスレダマを持っていない。つまり、この世界には二人の魔法使いがいて、皆さんはその二人の姿を見てしまっている。そして、ワスレダマは三つしかない。という事は？」

魔法少女がそう訊ねてくる。その答えはすぐに浮かんだ。それは親父も一緒だったらしい。

「どちらかの魔法使いは、元の世界に帰れなくなる……………？」

「そういう事です、おとーさん。だから、あの男は私を連れ戻そうとただけではなく、皆さんを殺そうとしたんです。カイトさんたちを抹殺すれば、グラウスはワスレダマを使わなくとも私を連れて元の世界へと帰る事ができる。存在が消えれば当然、記憶も残

りませんから」

「――」

「それに、もしワスレダマが六つあったとしても、グラウスはそれを使おうとはしないでしよう。必ず、皆さんを殺しにやってくる。ここに来る前に重傷を負わせたので、しばらくは彼も動けないでしょうけど」

「なら、どうすりゃいい」

どうすれば俺たちはあいつに殺されなくて済む。そんなニュアンスを込めて訊ねた。

「決まっています。魔法使いが二人いるのなら、どちらか一方を殺せばいい。だから」

魔法少女はそこで言葉を切り、俺の顔を真剣な眼差しで見つめながら、言った。

「私は――あの男を殺します。あなたたちを守るには、それしかないんです」

そんな、あまりにも残酷な決意を。



「皆さんをこんな事に巻き込んでしまったのは、私の責任です。だから、この落とし前は私がつけてきます。そうすればあなたたちはもう、安心していつも通りの暮らしに戻れます」

「でも、それはっ」

親父は魔法少女の言葉を遮り、言った。そうだ。こいつが言っているのは、つまり。

「……それは、俺たちがノラちゃんを忘れる、っていう事なんだろう?」「残念ですが、そうなります。私が帰るためには、それしか無いんです」

魔法少女がそう言った瞬間、親父はカウチから勢いよく立ち上がる。

「なら帰らないでいいじゃないかっ! あの男を倒せば、ノラちゃんはまたここで暮らせるようになる。そうだよね?」

「確かにそれは正しいです、おとーさん」

「だったら!」

似合わない大きな声を出す親父を冷たい目で見上げて、魔法少女は言う。

「ですが、もしグラウスが私を連れて帰らなければ、不審に思った私の両親が次の刺客を送って来ます。それでは結局、イタチごっこになってしまいます」

「……………あ」

「それに、あのグラウスは良心的な方です。だって、自分の姿を見せたのを私と同じ三人に留めたんですから。そうすれば三人以上の殺害は必要なくなる。でも、次に来る刺客はあなたたちだけではなく、他の人間にも姿を見せるかもしれない。そうなれば、その刺客は自分の記憶を消すために無関係の人間を殺す事になる。そうなる可能性があるとしても、おとーさんは私をこの家に住まわせますか？」

前髪を触りながら早口で語る魔法少女に、親父は何も言えなくなっていた。たぶん、こうなる事を予測してこいつはこの言葉を用意していた。それが、声の感じで何となく分かった。

でも、こいつは嘘を吐いている。

「それにね、おとーさん。私は別にこの家じゃなくてもよかったですよ。ただ、自分が

この世界で居心地よく暮らせる場所なら、どこだってよかったです」

親父の事を見上げながら、魔法少女は語る。

「さつき、観覧車でおとーさんが言った通りです。私は、あなたたちを都合の良い家族だと思っていました。理由はどうあれ、こんな見知らぬ少女を家に住まわせ、夕ダでご飯を食べさせてくれた。いやあ、家出先の宿としては最高でしたよ。私はここを選んで正解でした」

魔法少女はそう言いながら立ち上がり、対する親父は床にへたり込んだ。

「ノラ、ちゃん」

「こう言えば分かるでしょう、おとーさん。この家は、私にとつてただそれだけのものだったんです。家族になる？ 図が高いにもほどがあります。私は、お姫さまなんですよ。」

ハハハ、と空笑いしながら前髪を掻き上げる魔法少女。

親父は絶望したような表情を浮かべたまま、その最低な言葉を聞いていた。それでもやっぱり、こいつは嘘を吐いている。

「おい、そのクソ魔法少女」

「ノラです。どうしました、カイトさん」

奴は悪びれる様子もなくこちらを見てきた。そんな恩知らずに向かつて、俺は言う。

「てめえ、嘘吐いてんだろ」

「……………なんの事です？」

「とぼけんじゃねえ。俺には分かんだよ。はっ、格好つけらんなくて残念だったな」

魔法少女は本当に分からない、というように首を傾げる。

それを見て、俺はもうひとつだけ言いたい事を奴にぶつけた。

「てめえがここを出て行くのなんてどうでもいいけどよ。最後にひとつだけ訊いてやる」

「なんですか？」

「てめえ、ホントに一人であの男に勝てんのか？」

その問いかけを聞いて、魔法少女は前髪を掻き上げ、いつも通りのドヤ顔を見せた。

「もちろんです。私を誰だと思ってるんですか？ あんな男、私一人で十分です。まあ、あなたたちを守る理由も、この家に泊めてくれたからっていうだけなんですけどね」

ああ、やっぱりな。

「そうかよ。じゃあさつさと出てけ。てめえの顔を忘れられんなら、こつちも清々するぜ」

そう言うと、クソガキは前髪を触ったまま一瞬固まった。

それからふん、と鼻を鳴らし、背を向ける。

「言われなくてもそうします。私だって、カイトさんみたいな優しくないやんきーさん

とお別れできて嬉しいですよーっ、だ」

「そうか。なら向こうでも達者でな。くだらねえ世界でクソつまんねえ生活送って、この世界の事をうらやみながら、勝手に死んどけ」

「——ッ！」

挑発するようにそう言つてやると、魔法少女はグツと両手の拳を握りしめてからようやくその足を動かした。そして何も言わぬまま、早足でリビングから出て行く。

やがて玄関が勢いよく閉まる音がして、家には再び静寂が戻った。

奴が閉めて行ったリビングの出入り口を黙って見つめる。親父は相当なシヨックを受けたのか、あのガキが出て行つても動く事は無かった。やっぱり、親父は気づいていない。

俺が芝居をしてああ言つた事も。

あの女が俺たちに嘘を吐いていた事も。

「おい、いつまで狸寝入りしてんだ」

「あら？ 気づいていたのね」

そして、母親が寝たフリをしていた事にも。

「え……………?」

「当たり前えだつっーの。何ちやつかり薄眼であいつの様子を見てんだよ、気持ちわりいな」

「だって、ノラちゃん嘘を吐くのが下手つびなんだもの。そういうところも可愛いわあ」  
「え? 嘘? え?」

むくりと起き上がった母親に俺がそう言うと、親父は俺たちの事を忙しく交互に見ながら狼狽えていた。やつぱり、この家にはバカしかいないらしい。

「ほら、早く準備すんぞ。もたもたしてつとマジで死ぬからな」

「そうねえ。じゃあお母さん、久しぶりにとつておきを見せちゃうわあ」  
「そうだ。なら、あれを持っていかねえと」

携帯を取り出し、ある家へと電話をかける。数コール鳴った後、聞き慣れた声が聞こえてきた。

『もしもし、乾です』

「俺だ」

『どうしよう雅兄い！ こんな時間にオレオレ詐欺から電話がかかって来たよ！』

『なんだとわかりつ！ 絶対に通帳の番号は教えるなよっ！』

「てめえら兄妹はまず落ち着け。俺だ、魁人だ」

『ふえ？ 魁、人？』

電話に出たあたりはとぼけた声で名前を呼んでくる。今のは俺も悪かったな。

「ああ。こんな時間に悪いな」

『別にいいけど、どうしたの？ もしかして、急にあたしの声が聞きたくなっちゃった？』

「んな訳ねえだろばーか」

訳の分からない事を言ってくるあたり。電話口の向こうにいるであろう雅さんの『なにい！？ 許さねえぞ魁人オっ！』という声もしっかり聞こえた。



「じゃあ何よ。本当に嫌がらせ？」

「ちげえよ。雅さんに用があつたんだ。いるなら変わってくれ」

「雅兄いにて？ まあいいけど。ちよつと待つてね」

それから微かな話声が聞こえ、数秒の間を置いてから雅さんは電話に出た。

『妹はやらんぞ』

「いらねえよ。じゃなくて、雅さん。あれはもう直りましたか？」

『ん？ ああ、あれか。ほぼ直つたぞ。ちようど明日連絡するつもりだつたんだ』

右手を握り締める。よかつた。あれがあれば俺でも少しは力になれるはずだ。

「ありがとうございます。急な話で悪いんですけど、今から取りに行つてもいいですか？」

『今から？ 別にいいが、何に使うんだ？』

俺の頼みを聞いた途端、真面目な声になる電話口の雅さん。こんな夜更けにあれを使う。確かに、それだけを聞いたら良い事は想像しないだろう。

「それは、ちよつと言えないつす」

『ダメだ。お前が使い道を言わない限り、あいつは返さない。いつも言ってる。お前に危険な事をさせるために、俺はあいつを渡したわけじゃない』

厳しい雅さんはそう言ってくれる。それはこの身を案じての事。俺が危険な真似をしないために、雅さんは警告してくれている。それでも、今はあれが要るんだ。

「……………大事なもんを守るために、どうしても必要なんです。だから、お願いします」

柄にも無く本音を言うと、電話口の雅さんはしばらく黙っていた。これでダメなら、あれ無しで行くしかない。そんな事を思った時、耳元からため息が聞こえてくる。

『お前がそこまで言うだなんて、相当本気なんだな』

「はい。だから、雅さん」

『仕方ねえ。いいぞ、いつでも取りに來い。理由は聞かないが、人生には一回くらい命を賭けるライドがあった方がいい。それが、走り屋の生き様つてもんだろ』

雅さんはそんな格好良い台詞をくれる。それを聞いて、ようやく覚悟が決まった。

「マジでありがとうございます。じゃあ、少ししたら取りに行きます」

『おう。調整して待っててやるよ』

そうして電話を切り、携帯をポケットに仕舞った。これで俺の準備はほとんど整った。後は、このバカ親が必要なものを揃えるだけ。

「ほら、さっさと準備しろ。いつまで座ってんだ」

「そうよ、パパ。早くしないと」

「ママ、魁人。さつきから何を言ってる」

立ち上がる俺と母親を見上げてくる親父。ここまで来たらしい加減気づけっつーの。

「俺たちも行くんだよ」

「? 行ってくつて、どこに」

「あ? んなもん決まってるんだろ」

俺は拳の骨を鳴らしながら、親父の質問に答えた。

「あの生意気なクソガキを助けに、だよ」

## 第二十二話

## ◇ ノラ

生ぬるい風が吹いている夜。頭上には一部が欠けた月と呼ばれる大きな衛星が浮かんでいて、私が歩く暗い道をそつと照らし出してくれています。

地球と呼ばれる惑星のどこかにある町。そんな場所を、私は歩いています。それを自覚すると、改めて自分がとんでもない家出をやらかしたのだ、と思い知らされます。

「……………まったく、何をやっているんでしょうかねえ」

学校に続く坂道で独り言をひとつ。それはすぐに異世界の夜へ溶けて行きました。

私がこの世界に来た理由。それを出会った人間に言う気はありませんでした。だって、魔法使いがただ何もかも嫌になって家出をしてきたなんて、そんな事を言われたら

例え人間でなくとも呆れます。

でも、それさえ言わなければ嘘を吐き通せた。魔法使い、という存在が持つ特別な力。不思議な存在であるが故に、触れられない事実がある。

それを、あの人間たちは上手く勘違いしてくれた。本当は魔法使いなんてそんな大した存在でもないし、私がこの世界に来た理由も呆れるほど単純だったというのに。

「どんな世界に行っても、私は私のままなんですネ」

それはもう、自分で言っていて嫌になるほどに。私は我が儘な十二歳の魔法使い、という殻から抜け出せなかった。だから結局、この世界からも追い出されてしまう事になった。

「……………ひどい事を言って、ひどい事を言われてしまいましたね」

これが因果応報、というものでしょうか。本当は思ってもみない事を言うんじゃないかなかったです。最後まで本音を言えばよかったのに、私は最後の最後であの人間たちを突き放してしまった。そして、当然のように向こうからも突き放されてしまった。

だけど、これでよかったです。私のような血生臭い魔法使いに、あんな居心地の良い場所は似合いません。どうせ、あの人間たちはこんな女がいた事も忘れてしまうのですから。

「でも」

どうして、あの人間は私の言葉が本音じゃなかったと気づいたのでしょう？　いくら勘が良いとしても、目には見えない嘘は気づけないはずなのに。

まあ、それも今となってはどうでもいい事です。

そうして校門に到着し、私はそこから学校の中に入ります。

ここも、いつの間にか見慣れた場所になりました。私より年上の人間がたくさん通っていて、その全員が他者と楽しそうな時間を過ごしている、この学び舎。

ただ、私を拾ってくれた人間だけがその中で浮いていた。他の人間と比べて変な髪型をした彼は、自分の周りに壁を作って、あえて他人から距離を取ろうとしていました。

最初はその意味が分かりませんが、彼の生い立ちを聞いて私は納得しました。

そして、私が彼を選んだのは必然だったという事にも気づきました。

「くだらねえ、ですか」

あの人間がよく言う口癖をポツリと呟きます。

出会ったばかりの頃、彼はそれをマントラのように口にしていました。他の人間が楽しそうにしているても、くだらねえ。他の人間が悲しんでいるても、くだらねえ。そう言いながら地面に唾を吐くのが、彼の習慣でした。

でも、最近はそのする事はほとんどなかった気がします。どんな心境の変化があったのかは知りませんが、きっと彼の水晶体を変える何かがあったんでしょう。

「……………お待たせしました、グラウス」

「待っておりました、姫さま。まさかこんな所に魔力を回復するスポットがあるとは思いませんでした。それに、姫さま自身が私にこの場所を教えてくださいませんか」とは思

校庭の一角に広がる魔方陣の中。その中心に跪き、目を瞑っていたグラウス。彼が身に纏う制服こそポロポロですが、まだ身体は動くようでした。最強の魔法使いと呼ばれた私と互角に渡り合えるのは、彼を含めてもあの世界には数人しかいないでしょう。



「それは、私がこの二か月で作った魔力の泉。念のために作っておいたんです」

「なるほど。ですが、何故それを私に使わせたのですか？」

「そうすれば時間が稼げて、あなたがいる場所が特定できると思つたからです。私には、あの人間たちと話す時間が必要でした。あなたが襲撃してこない安全な時間と場所を作るには、この場所を教える他なかつたんです」

説明するとグラウスは立ち上がり、うんうんと頭を頷かせます。

「ならば姫さまはこの状況を最初から予測していた、と？」

「ある程度は。本当は魔物だけをこの世界に送つてくると思つていたんですけどね。まさかあなたまで禁忌を犯してやって来るとは」

「そうでしょう。しかし、裏を変えせば国王さまはそれほど期待をしている、という事です。あの国にはどうしても、姫さまが必要なのです」

グラウスは私に敬意を表するように、左胸に手を当ててそう言ってきました。でも、今はそんな取り繕ったお世辞なんて聞きたくありません。

「知りませんよそんなの。私が今やらなければいけないのは、あなたを殺す事だけです」

そうやって私はステッキを右手に召喚します。それを見たグラウスはパチンと指を鳴らしました。すると、今までどこにもいなかった無数の魔物たちが校庭に現れます。

「そうですか。ですが先の戦闘でお分かりの通り、あなたは私には勝てない。魔法の精度が明らかに落ちているのが分かります。それに、見たところ魔力も回復していません。今の姫様に勝つのは、おそらくあの人間たちを殺すのと同じくらい容易いでしょう」

「言ってなさい。私は負けません。何があっても、負けるわけにはいかないんです」

私はそうやって、地面を蹴りました。

ええ、分かっています。グラウスが言った通りです。私はこの世界に来てから弱くなった。戦いの勘が鈍ったから？ それもあります。

ですが、それ以上の理由があるんです。

「……………けほ、っ」

「いったいどうされたのです、姫さま。あなたの魔法はこんな生ぬるいものではなかったはずだ。視界に映るものをすべて壊すための魔法。それが、あなたを戦場の邪神足らしめた所以でしょう。なのに、何故こんな魔法しか使つて来ないのです」

数分後。地面についたまま動かない私の両足。対するブラウスは傷ひとつ付いていない。遊園地ではどうにかかりましたが、魔力が回復した彼には今の私では太刀打ちできないようです。

「残念です姫さま。ですが、国に戻ればあなたも本来の力を取り戻せるかもしれません。さあ、行きましょう。あとは私があの人間を殺せばすべては終わるのです」

「バカなこと言わないでください。そんな事、絶対にさせません」

「まだ立ち上がりますか。姫さまにそこまでさせる人間が、この世界にいるだなんて。本当に、この数力月で何があつたというのです」

おぼつかない足取りで立ち上がる私を見て、不審な表情を浮かべるブラウス。まあ、その気持ちも分からない事は無いです。私が逆の立場なら大笑いしてるかもしれません。

「あなたには分からないでいい。でも、私には命を賭ける理由がある」

「そうですか。ならば仕方ありません。この世界に毒されてしまった姫さまを救うには、あの人間たちを殺す必要があるようです。いずれにせよ、それは変わりません」

私が立ち上がったのに反応した魔物の群れが、一斉に襲いかかって来ます。

気づくのが遅れた所為で攻撃を避け切れませんでした。私の身体は宙を舞い、やがて離れた所に落ちます。魔法で痛覚を麻痺させていても、痛いものは痛いんです。

「……………はぁ」

さて、こんな状態でどうやって勝てばいいんでしょう？

負けた事が無い私にはその方法が分かりません。せめてこの魔物たちをどうにかできれば、勝てる可能性はあるんですけど。そんな事を思ったって、今さらどうにもなりません。

でも、仕方ないじゃないですか。私にはあの人間たちに嘘を吐いて出て行くしかなかった。じゃないと、あの優しい人間たちは絶対に私の心配する。最後までそんな心配

をかけたくなかった。だから、私は絶対に勝てると嘘を吐いて出てきたんです。なのに。

「結局、守れないんでしょか」

私はこのままブラウスに負けて、あの人間たちは彼に殺される。

それが、この逃避行の結末なんでしょか。

でも、そんなの。

「……………嫌、ですよお」

もう二度と会えないとしても、あの優しい人間が殺される事だけは、許せない。

こんな私を受け入れてくれたあの三人だけは、どうしても生きていてほしい。

だから、私は勝たなくてはいけない。

何が何でも、あの男を倒さなくてはならない。

痛む身体に鞭を打って立ち上がり、夜空に向かって叫びました。

「愚かです、姫さま。では、少しの間だけお眠りください」

グラウスが手を下ろすと、また魔物がこちらに迫って来ます。魔法を使おうとしますが、もう腕が上がりません。逃げようにも、足が根を張ったように固まっています。

だから、私は代わりに目を閉じました。

そして、瞼の裏に映っているあの人間たちに向かって言いました。

「……………ごめん、なさい」

そう言いかけた瞬間、静寂を振り払うように響き渡る爆音。驚いて目を開くと、眩い光が暗い校庭を照らし出していました。

それから私を襲おうとしていた羽根の付いた魔物が、何者かに撃ち落とされます。見ると、その顔面には一本の矢のようなものが刺さっていました。

誰がこんな事を。そう思い、咄嗟に音が聞こえてくる方向へ目を向けます。

そうして、その現れた何者かを目にして、息を止めました。

「なん、で」

「待たせたなクソガキイツ！」

「パパツ、二時の方向にバンパーを向けてッ！」

「イエス、ママ。あと、シートベルトはしっかりしてね。フウ、久しぶりに飛ばすよ」

そこには、二輪車に跨ったりーゼントのやんきーと、四輪車に乗った男女がいました。

## 第二章

終

最終章／魔法少女が拾ったもの。

## 第二十三話

### ◇ 最終章

「オラオラ死にたくねえなら退きやがれクソ共オツ！」

バイクで校門を突破して校庭へと向かうと、魔物の大群にやられそうになっている魔法少女が最初に目に入ってくる。それは隣を走っている両親も気づいていたらしく、親父が運転する車の助手席に乗った母親は窓から身を乗り出し、奴を襲おうとしていた。物を弓矢で撃ち落としていた。

まずはあいつの周りに蟻のように群がっている魔物たちを散らすため、アクセルを吹かして奴らに近づき、避けない魔物は片手に握った木刀でぶん殴ってやった。

車を運転する親父は、母親が飛んでいる魔物を撃ち落としやすいルートを選択して



走っている。どうでもいいが、いつもの安全運転など皆無。レーシングドライバーでも驚くんじやないかと思うほど、巧みなドライビングテクニクを披露している。

「なんだよ！ 今日はいくら運転が荒いじゃねえかつ」

「前見て走れ息子オっ！ 気を抜いてるとうっかり轢くかも知れんぞ！」

「パパは運転をしている時にサングラスを掛けるとリミッターが外れるのよっ！」

「何のリミッターだよっ。つーかいま夜だぞっ。サングラス掛ける意味がねえだろうが  
！」

「なめるなっ。家族を見つめる時のお父さんの視界は、いつだって輝いている！」

「そのまま魔物に突っ込んで死んどけ！」

車と並走しながらドライバーの親父にツッコミを入れる。

それとほぼ同時に上空から近づいてくる何か。

「危ない魁人っ！」

俺に向かって急降下してきた魔物を、助手席に乗った母親が弓で撃ち落としてくれ

る。

「助かったつ。つーか、なんでそんなに弓がうめえんだよ!」

「お母さんは大学生の時、流鏑馬で日本一になった事があるのよ!」

「マジかつ。聞いた事ねえよつ!」

「ふふつ、すごいでしょつ? パパと出会ったのも流鏑馬の大会の日だったわ!」

「そうだったねママつ! お父さんは弓が上手くて可愛かったママに一目惚れして、それから運び屋から足を洗ったんだつ!」

「運び屋つ!? あんたの過去に何があつたんだつ!」

「口では言えないようなものを車で運ぶ裏社会の仕事だつ!」

「トランスポーターかつ!」

こんなタイミングで明らかになる両親の過去。グレていた時間が長かったから、こいつらがどんな人生を送って来たのかなんてほとんど知らなかった。

「でもな! ある時ママは別の男と政略結婚させられそうになったんだつ!」

「結婚式が始まって指輪を嵌められそうになった時、パパが車でお母さんを奪いに来た

のよっ！ 今でも覚えてるわ『これから俺と人生という名のドライブに行こう。君は助手席に乗っていてくれ』って、その時パパは言ってくれたのよ!? きゃーっ、思い出すだけでお母さんドキドキしちゃうーっ！

「それからお父さんとママは結婚したんだっ！　そして生まれたのがお前だ魁人オ！」  
「それ以上何も言うんじやねえクソ親共！」

訊いてもいないのにそんな話をべらべらと話す親父と母親。二人には悪いが、両親がどんな恋愛をしてきたかなんて正直一ミリも知りたくなかった。

「もちろん今でも愛してるよママッ！」

「私もよ。パパッ！」

「マジで黙ってろてめえらッ！」

こいつらの間から生まれた自分を嫌いになりそうだった。来世はもうちよい賢い両親のもとに生まれたい。

「カイトさんッ！」

「手エ伸ばせっ!」

ようやく魔物の群れが晴れ、俺はその中心にいた魔法少女まで近づく。

すれ違いざまにその手を握って身体を引き上げ、後部座席に座らせたが、このクソガキは助けた直後から喚き出した。

「何をしに来たんですっ! 私は一人で大丈夫だっって言っただでしょう!」

「この期に及んでまだ文句を垂れんのかよっ。てめえが嘘を吐いてんのが分かったから助けに来たに決まっつてんだろっ!」

「え……………」

「さっきも言ったが、てめえは嘘吐いてんのがバレバレなんだよ! 俺がどんだけの間、てめえと一緒にいたと思っつてやがるっ!」

急に黙り出す魔法少女。たぶん（というか確実に）それは凶星だったんだろう。こいつが親父をデイスリ始めた時点で、俺はその言葉が全部嘘だっつていう事に気づいていた。

「そもそも、てめえは俺たちとなんも変わんねえじゃねえかつ！ 急に偉そうな態度を取ったって、それが俺たちを突き放すための嘘だつて簡単に見抜けんだよ！ 残念だったな！ 人間さまをなめんじゃねえバーカっ！」

バイクを走らせながら俺は後ろにいる魔法少女に向かって叫ぶ。

実際、こいつは俺たちを見くびっていた。だが、なめてもらつちや困る。あんな事を言われたくらいでうちのバカ親共がこいつ一人を危険な目に遭わせるわけが無い。

魔物から距離を取るために校庭の端の方へと移動していると、魔法少女は後ろから俺の腹に手を回し、顔を背中に当ててくる。

「……………本当に、おバカな人間たちですね、あなたたちは」

「あ？ 喧嘩売ってんなら振り落とすぞ」

「違います。褒めているんです。突き放した私を助けるために、こんな危険な場所に飛び込んで来るだなんて。そんなの、あなたたちのようなおバカな家族にしかできません」

魔法少女は俺の腹に手を回したままそう語り、それから白い光を俺の全身に纏わせ

た。

「でも、知りませんよ。ここまで来たらあなたたちは私の駒になつてもらいます。あの男に勝つには、それしかありません」

「上等だよ。俺が強えのは知つてんだろ。どんな奴だろうがボコボコにして来てやる」

「ふふつ、カイトさんはやっぱりカイトさんですね。頼りにしていますよ」

魔法少女がそう言った途端、全身が急に軽くなる。これは、こいつがいつもかけてくれる強化の魔法。この力の使い方も覚えて来た。今なら本当にこいつの力になれるかもしれない。

「では、今から指示を伝えます。カイトさんはその通りに動いてください」

「ああ。なんでも来やがれ」

「まず、おとーさんとおかーさんが乗る車に近づいてください。そこであの二人にも強化の魔法をかけます。それからの方針は後で伝えます」

「了解。しっかり掴まつてろ」

魔法少女の指示に従ってアクセル全開で親父が運転する車へと近づき、同じ速度で並走する。

「おとーさんっ、おかーさんっ！」

「ノラちゃんっ！ 大丈夫かいっ!?!」

「ああ、ノラちゃんだわっ！ 会いたかったわよお！」

「心配かけてごめんなさい。ですが、今はそんな事を話している暇はありません。皆さんにはあの男に勝つために協力してもらいます。相当危ないですが、どっちにしろ負ければ皆さんは死にます。最後まで足掻きたいのであれば、私に力を貸してください」

両親に向かって魔法少女がそう言うと、二人は間髪置かずに頷いた。

「もちろんっ。ノラちゃんの頼みならなんだって聞くよ！」

「お母さんもパパと同じよっ！ ノラちゃんのためならなんだってするわ！」

「お二人ならそう言ってくれると思います。では、おとーさんはこのまま車を走らせてここにいます。魔物たちの注意を惹きつけてください。おかーさんは私がカイトさんのバイクから降りた後、私に近づくと魔物をその弓で撃ち落としてください。――intensity魔力強化

魔法少女は指示を出し、親父が乗る車と母親が持つ弓に魔法をかけた。驚いた二人は同時にこちらを見てくる。

「それは私の魔法です。すごいスピードが出たり、とんでもない威力の弓が打てるようになるので、勢い余らないように気をつけてくださいっ」

「本当だ。ステアリングのレスポンスがいつもより良い。クラッチの繋がりもかなりスムーズだ。……………これなら、もしかしたら」

「まあ、これが本物の魔法なのねっ。実はお母さん、小さい頃から魔法少女に憧れていたの。まさか本当に魔法をかけられちゃうだなんて」

そんな感想を述べる両親。だが、親父の様子がおかしかったのが少しだけ気になった。

「では頼みますっ」

「あ。ちよつと待って二人ともっ」



魔法少女がそう言った直後、親父に呼び止められた。何かと思っていると、サイドのリアガラスが開き、そこからみかんがひよこつと顔を出してくる。

「みーちゃんも来ていたんですねっ」

「本当は置いていこうと思っただけだね、出て行こうとした途端に大声で鳴き出しちゃったの。それで仕方なく連れて来たのよ」

「でもお父さん、みかんちゃんがいると全力で運転ができないんだ。だからノラちゃん、連れて行ってくれないかい？」

「マジかよ。今までののは全力じゃなかったってのか？」

「当たり前じゃないか魁人。あんなの検定中の運転と変わらないよ」

「本気で言ってるならあなたは早めに免許を返納した方がいい」

ステアリングを握ったまま当然のようにそう言ってくる親父。じゃあ本気出したらどうなんだ。デ○リアンみたいにバックトゥザフューチャーでもすんのか。

「分かりました。では、カイトさん。みーちゃんをお願いします」

「は？　なんで俺なんだよ」

「この中ではカイトさんの近くが一番安全なんです。だから、お願いします」

魔法少女がそう言うと、三毛猫は車からバイクへとジャンプしてくる。

その小さな身体を受け止めた魔法少女は早速、俺の頭にみかんを乗せてきた。

「それじゃあ改めてお願いします。あの男を倒した後、またお話しましょう」

その声を聞いてから親父はギアを入れ替え、俺のバイクから高速で離れていく。確かに、さつきよりも運転のキレが良くなっている。襲いかかってくる魔物たちを完全に翻弄していた。そして、その助手席に乗りながら魔物を一本の弓矢でまとめて串刺しにしてるあの母親も、親父と肩を並べるくらいヤバイ人間に成り果てている。

「では、次はカイトさんです」

「ああ、俺は何をすりゃいい」

「……………本来なら私がグラウスを相手にしなければならんですが、今のままでは私はどう頑張っても彼に勝てません。おそらく四人でかかっても勝ち目はないでしょ

う」

バイクを走らせながら、校庭の中央で立ち尽くしているあの白い制服の男を見た。

奴は俺たちが現れてから一步も動いていない。ただこちらを見つめているだけだった。

「なら、どうする」

「正当な方法で勝てないのなら、不正な方法を使えばいい。そう言うの、カイトさんは得意ですよね」

「うるせえ。で、そりやなんだ」

「簡単に言えば、私の魔法で彼の弱点を突きます。そうすれば私でも彼に勝つ事ができます。ですが、この魔法を使うには詠唱を詠む時間が必要なんです」

「……………つつー事は、つまり」

魔法少女がそこまで言った時点で、こいつが俺に何を頼もうとしているのかに気づいた。

「そう。カイトさんにお願いたいののは、彼の足止めをする事と、彼に一撃を与える事です。私の魔法が完成するまで、彼と戦って出来るだけ時間を稼いでください」

「……………マジか」

「マジです。でも、勝たなくていいんです。死なない程度に彼とやり合うだけです。それと、どんな攻撃でもいいですから、彼に一撃を食らわせてください」

「てめえ、それがただけ危険かは俺に教えねえのか？」

「言ったらカイトさんは断りますから」

「そう言ってる時点でやべえって事じゃねえか」

わりと軽い感じで指示してくる魔法少女。こいつは俺に死ねと言ってるのだろうか。

「大丈夫です。カイトさんには一番強力な強化の魔法をかけてます。最悪、半殺しにされるかもしれませんが、上手くいけば骨が五本くらい折れるだけで済みます」

「精一杯軽く表現しようとしてんのかも知んねえけど、全然フォローになってねえよ」

やっぱダメだった。俺が死にかけるのはこいつの中では決定事項らしい。

「お願いします。彼に勝つにはそれしかないんです。結局なにもしなかったら死ぬだけなんですよ？　それが嫌だったら全力で足掻いてください」

「ああもう分かったつーのっ。やりやあいんだろやりやあつー！」

「それでこそカイトさんです。では、頼みました。みーちゃんも応援をお願いしますっ」

魔法少女はそう言つて後部座席から飛び降りていく。文句は腐るほどあるが、あいつの言う通り、今はとにかくやらなくちゃ死ぬだけなんだ。だったらやるしかない。



転回し、中央に立っている白い制服の男の所までバイクを走らせる。ビビらせるために思いっ切りアクセルを吹かしてみたが、奴は微動だにしなかった。むしろ俺が近づいている事にすら興味が無いというような顔をしている。

男から十メートルほど離れた位置にバイクを止め、校庭の地面に足を付ける。

そうして奴と対峙して、なんとなく分かった。

あの男は、俺が今まで出会つて来た中で一番強い。

「どうした人間。私に何か用か？ それとも、自ら殺されに来たのか？」

「ちげえよ。その逆だ。てめえをぶっ飛ばしに来たんだよ」

「？ 何を言っているんだ貴様。人間如きが騎士である私に敵うとでも？」

グlausという男は無表情で首を傾げながらそう言ってくる。あの女と話しているときは敬語だったから雰囲気はまだ柔らかかったが、今の空気はあり得ないほど冷たい。

「ああ、敵うとも。生憎、俺は不良だからな。そこらにいる人間よりは何倍も強えんだよ」

「不良？ なんだそれは。人間の上位種の名か？」

「はっ、上位種と来たか。社会的に見りゃ、むしろ下位の存在だろうよ」

不良の意味を知らないグlausにそう言う。すると奴は疑問を含ませた表情を浮かべた。

「ならばますます解せない。そんな人間が何故、私と戦おうとしている」

「知らねえなら教えてやるよ。人間の世界じゃな、存在価値が高い奴が強えとは限らねえんだ。俺みてえに、社会から淘汰されそうな人間の方が強え場合もあんだよ」

そう言つて、いつもの構えを取る。何百回と喧嘩をして覚えたこのスタイル。これがこいつに通用するかは分からない。だが、やるしかねえ。

「そうか。では、試しに手合わせしてやろう。私も人間という生き物と戦うのは初めてだ。貴様がその中では強い存在ならば、少しは楽しませてもらえるのだろうか」

「当たり前めえだ。なめてかかって後悔すんじゃないぞっ！」

やけくそで叫び、グラウスに向かって走り出した。



しかし、そう上手くいかないのは最初から分かっていた。いくら俺が不良で、一般人よりも喧嘩をしてきた回数が多かったとしても、そもそも人間じゃないこいつに勝てる

わけがない。こんなの、鼠と猫を逃げ場の無い箱の中に入れてタイマンさせるみたいなものだ。

「こんなものか、人間」

「が、——ツ?!」

この戦いが始まってから何度繰り出したか分からない蹴りを躲され、軸足を払われる。必然、バランスを崩したこの身体は地面へと倒れた。その隙をグラウスが見逃すわけもなく、倒れ込んだ瞬間、右の脇腹に蹴りを入れられ俺は数メートル宙を舞う。

魔法がかけられているのにも関わらず感じる痛み。なら、もし魔法が無かったら俺は何回死んでるんだろう。今はそんなもの、想像したくも無い。

「理解に苦しむな。なぜ立ち上がる。私に勝てないのは貴様が一番分かっているだろう」

「るせえ……俺アな、自分から負けを認められるほど、できた人間じゃねえんだよ」  
「なるほど。それがお前の信念か。なら」

「——ツ?!」



「身体もろともその信念を叩き折れば、貴様は二度と立ち上がれまい」

その声が聞こえたと思つた直後、グラウスは既に目の前にいた。

そのスピードについて行けるはずもなく、ガード無しで鳩尾に正拳突きを食らう。

視界がぼやけ、吐き気が込み上げてくる。身体に力が入らなくなる。それでも。

「……………これでも倒れないか。確かに攻めの力は無くとも、守りの力は思つたよりあるらしい。というより、貴様の場合は精神で倒れないだけか」

その一撃をもらつても、俺は倒れなかった。グラウスは少し驚くような顔でこちらを見てくる。

「貴様を殺す事など虫を踏み潰すほど簡単だがな、それではつまらん。せつかく初めて人間と拳を交えたのだ、殺す前に訊いてやろう。貴様は、何のために私と戦っている。いったい何が貴様の精神を支えている。答えろ、人間」

抑揚の無い口調でグラウスは質問を投げってくる。

たぶんそれは、ただの興味でしかないんだろう。けど、こいつは訊ねる相手を間違えている。

「あ？ 知らねえよ、んなもん」

不良の俺が、そんな小難しい事をいちいち考えているわけがないってのに。

「なんだと？」

「だから、そんな面倒くせえもんは最初から一ミリも考えてねえつつつてんだ」

口の中に溜まった血を吐きながらそう答えると、グラウスは目を丸くして俺を見てきた。

「つまり、貴様は理由もなく私と戦っているのか？」

「ああ、そうかも知んねえな。つーより、俺はそういう面倒な事を考えてねえだけなんだよ。くつせえ暑苦しい事を心の中で語りかけながら喧嘩をする？ くだらねえ。たまにそういう寒い奴がいるみてえだけどよ、なんでそんな分かり切った事をいちいち言

い聞かせなきやなんねえんだ？ そんな大事なもん、考えなくたって自分<sup>てめえ</sup>が一番分かっ  
てんだろうが」

そう言ってみせると、グラウスは一瞬だけ顔に疑問を浮かべてから、すぐに頷いた。

「信念は常に考えるものではない、という事か？」

「そんなもんかもな。自分<sup>てめえ</sup>がなんで喧嘩をすんのかなんて、喧嘩をする自分<sup>てめえ</sup>が一番知っ  
てんだ。改めて言葉にする必要がどこにある」

「ならば、やはり貴様にもあるのだろう。私はそれを答えろと言っているんだ」

「面倒くせえ奴だな。俺はお前みたいな頭の固え奴が一番嫌いなんだよ」

しつこいグラウスにそう言っつて唾を吐き、頭を搔きながら口を開いた。

「……………俺はな、この世界で起きる出来事や物事、そんなもんは何ひとつ興味が湧か  
ねえ。何もかもどうでもいいんだよ。こんな腐った世界で生きてる事すらくだらねえ  
と思う。だから俺は不良をやっつて、その何もかもを遠ざけた。近づいてくる奴は全員ぶ  
ん殴って近寄れなくした。それでようやく、俺でも息が吸える場所ができたんだ」

黙つて俺の話を聞いているグラウス。奴の金髪を見つめながら続ける。

「でもな、そんな風に遠ざけても蠅みてえにしつこく付きまどつてくる奴らが何人かいた。何百何千と振り払つても無視をしても、そいつらはバカみてえに近寄つて来た。『優しくすれば優しくされる』、そんな当たり前の法則を何度裏切つても、そいつらは諦めなかつた。『優しくされなくても優しくする』、そう言つてあいつらは俺が世界に向かつて立てた中指を、拳の中に戻そうとしてきた。ほんと、マジで意味が分かんねえよ」

数人のバカの顔を思い浮かべながら、俺は語る。

「『くだらねえ』、『面倒くせえ』、『どうでもいい』。そう言つて全部を遠ざけても、近づいてくるバカな奴ら。世界がどれだけ俺を裏切ろうとも、何故か絶対に俺を裏切らない奴らがいる。それを、あの女は教えてくれた」

腰を下げ、拳を握り締める。

身体は痛むが、まだ動ける。

それからブラウスを睨み、奴が聞きたがったその答えを口にした。

「そろそろ行くぞ、色男。てめえに家族は一人もやらねえ。あんな思いをすんのはもう二度とごめんなんだよ。」

だから、今度こそ絶対に守ってみせる」

そして、奴に向かつて走り出す前に俺は。

「ノラは——俺が守る」

自分が一番忌み嫌ったはずのその信念を、自分自身に向かつて言い聞かせた。

## 第二十四話

◇ ノラ

校庭の中央に立ち、私は永い詠唱を唱えていました。

この魔法が誰にも邪魔されずに完成すれば、私たちは間違いなくグラウスに勝てる。真正面から戦って勝てなくとも、この方法ならば確実にそう言い切れます。

おとーさんもおかーさんも、私の指示通りあの無数にいる魔物たちを上手く相手してくれています。まさかあの二人にあんな能力があったとは、私も全然気づきませんでした。よくよく考えれば、あのカイトさんを生んだ両親がただの人間であるわけがありませんよね。

「ママっ、蠅螂みたいな奴がノラちゃんの方に行ってるよー」

「分かったわパパっ。……………私のノラちゃんにそんな醜い鎌を向けるだなんて。そん

なの神様が許してもお母さんが許さないわ。月に変わってお仕置きよ、覚悟しなさい」

二人の会話が聞こえた直後、私のすぐそばまで接近していた魔物の胴体が弾け飛びます。……私が言ったのは魔物を近づけさせないでほしい、という指示だけだったんですが、おかしさんはそれを無視して次々と魔物を倒して行きます。いくら強化の魔法をかけていると言っても、相当な腕が無ければ魔物は倒せないはずなのですが。

そんな事を考えながらも詠唱を続けます。あの二人はおそらく大丈夫でしょう。問題は、あの男を相手にしているカイトさんです。先ほどからチラチラと戦闘を確認しています。どうやらかなり防戦一方の様子。あんな事を言っただけで騙してしまいましたが、一番危ないのは間違いなくカイトさんです。私は、グラウスがカイトさんという人間に興味を持つてくれる事を期待してあんな指示を出しました。そうすればある程度の時間は稼ぐ事ができる。

あんなに面白い人間は、たぶんこの世界にも何人もいないでしょうから。

そうして、魔法が完成に近づきます。あと少し。もうちよつとだけ耐えてもらえれば、私たちはグラウスに勝てます。だから何とか頑張ってください、カイトさん。

「あ……………」

心の中で彼を応援した瞬間、詠唱によって安定させていた魔力に突然ブレが生じました。やはり、魔力が足りませんか。こんな状況では回復する事もままなりません。でも、今はそんな言い訳をしている暇はない。どうなったとしても、私はこの魔法にすべての魔力を注ぎこまなければなりません。後の事はその時に考えればいい。

自分にそう言い聞かせ、ブレてしまった魔力をもう一度安定させようとした時。

「」

校舎の屋上で、白い閃光が瞬きました。

◇

「守るために戦う、か。なるほどな。貴様が倒れない理由はその信念にあるらしい」「うるせえ！ いいからためえは黙ってやられるッ！」



束の間の会話を終え、再びグラウスに向かつて拳を振るうが、奴は冷静な表情で俺の攻撃をすべて避けていく。あのクソガキ、こんな奴にどうやって一撃を当てりやいいんだよ。

「しかし、それでは負けない事はできても、貴様は一生勝つ事はできない」

声が聞こえた直後、パチツという放電音が鳴り、奴の身体が視界から一瞬にして消えた。どこに行った、と顔を動かそうとした瞬間、ガラ空きだった背中に重い衝撃を受け、同時に俺は車に轢かれたように前方へと吹っ飛ばされる。

「喜べ人間。本来であれば人間に魔法を使うなど、騎士としては恥じなければならぬ事。だが、特別に貴様は魔法で息の根を止めてやる。なに、心配するな。これは私が貴様をほんの少しだけ気に入った褒美だ。痛みも感じない間に殺してやる」

そう言ったグラウスは、連続した放電音を出している白い稲妻のようなものを全身に纏わせる。あれは、雷か？ 魔法の事はてんで分からないが、もしかするとそれにもい

ろんな種類があるのかもしれない。しかし、そんなの今はどうでもいい。

「く、……………っ」

「まあ、そう怖がるな。私が放つのは一回だけ。避ける術などあるはずもないだろうが、これで貴様を殺せなければ私はもう魔法は使わない」

自分に向かって放たれようとしている雷の魔法を見つめながら後退る。

あれは、やばい。あれを食らったら間違いない自分が灰になってしまう事だけは分かる。駅のホームで快速列車が通り過ぎて行くのを見つめている時の感覚に近い。これに轢かれたら自分は死ぬんだろうな、と思う、あの感じ。

「このまま魔法を放つてもいいだがな、それでは貴様は何もする事ができずに死んでいく他ない。だから、一度だけチャンスをやろう」

「……………チャンス？」

「そうだ。これから六十秒、時間をやる。その間、私はここから動かない。貴様が何をやるかは自由。私を倒そうとするのもよし、この場から逃げるのもよし。好きに選ぶがいい」

グラウスは口元に薄い笑みを浮かべ、俺に向かつてそう言ってくる。という事はたぶん、あいつがああ魔法に相当の自信を持っているからなんだろう。何を選ぼうが死ぬ事には変わらない。あの男はただ、俺という人間が何を選ぶかを知りたいだけなんだ。

「……………なめやがって」

「気に障ったか？　ならば考えろ。貴様が生き残るには何が必要か。人間の貴様なら、私には理解が及ばない突飛なアイデアが出せるはずだ」

グラウスの言葉を聞き、舌打ちをしてから考える。だが、そんなもの咄嗟に思いつくはずがない。最初から手詰まりの状態だったのに、そこから何かができるとは到底思えない。

無い頭を回転させて何かいい方法が無いかを自問していると、俺の足元にいたみかんが突然、前足で靴の爪先を引っ搔いてくる。何だよこんな時に。

「……………?」

すると、俺の視線に気づいたみかんはある場所を小さな前足で指し、にやんと一度だけ鳴く。何気なくその方向を見つめると、あるものが目に入った。

そうか。あそこに行けば、もしかしたら。

いや、でも。そう簡単に上手くいくか？

「では、始めるぞ。貴様の選択が生と死のどちらに転ぶのか。それを私に見せてくれ」

パチン、と指を鳴らし、カウントを始めるグラスウス。それを聞いて、一か八かの勝負に出る事にした。なんでみかんがあの場合を指したのかは分からないが、今は考えてる時間は無い。とにかく逃げ。生き残るにはみかんを信じるしかない。

「ほう。逃げる事を選んだか。血の気の多い貴様なら向かってくると思ったのだがな」

足元にいたみかんを拾い上げて離れた所にあるバイクへと向かい、一度アクセルを思いっ切り吹かしてから走り出した。

向かう先は、校舎。人気は無く、扉も全て閉まっている。優等生ならばその時点で入る事を諦めるだろうが、不良にそんな事を気にかける心など備わっているわけではない。

「掴まっつてろよみかんッ！」

バイクをさらに加速させながら、閉め切られた扉をぶち破る。普通ならこれだけで身中が傷だらけになっているはずだが、今は魔法のおかげで何とも無かった。

見慣れた校舎の廊下をバイクで駆け抜け、助走をつけてからウイリーして階段を登っていく。こんな超絶テクニックを習得した覚えはないが、今ならどんな技でもできる気がした。

音も無く迫ってくる自分の死とチエイスしながら、高速で階段を登り続ける。

そうして、ようやくあの場所へと繋がる扉が目に入った。

「よしっー！」

踊り場でバイクを投げ捨て、頭にみかんを乗せたまま残りの数段を駆け上がる。それから真鍮のドアノブに手を伸ばし、扉を開けるためにそれを捻った。

だが。

「なんで開かねえんだよっ!？」

いつもは開きっぱなしになっているはずなのに、こんな時に限って鍵が閉まっている。ドアノブを引つ張ったり体当たりしてみても、重い鉄の扉はビクともしない。

そうしていると、頭の上に乗ったみかんが高い鳴き声を上げ始めた。なんとなくだが、逃げ始めてからそろそろ一分が経過するのを教えてくれたのだろう。

「ちくしょうっ!」

どうやっても開かない扉を殴り、考える。この扉の向こうに行かなければ、俺とみかんはここであの魔法にやられて死ぬ。だが、どうやっても扉は開かない。残された時間も無い。使える道具も、何も――

「……………いや」

ひとつだけある。短い階段の下に、それは転がってる。

でも、あれはダメだ。せっかく雅さんからもらって、ようやく直って返ってきたばかり

りのあいつを、この扉を開けるためだけに使うだなんて。

階段の下に倒れている大切なバイクを見つめながら考えていると、みかんがリーゼントをてしてしと殴ってくる。たぶん、本気でタイムリミットがすぐそこまで迫っている。その時間が訪れた瞬間、俺は死ぬ。間違いなく。だったら。

「できるわけねえだろッ!!」

そう叫び、その場に跪いた。

今からやろうとしているのは、愛車を自ら木っ端みじんにする行為。大事なあれを自分の手で壊すのは、俺にとって自殺する事と同義。でも、それをしなければ。

自分の命とバイクの命。どっちを選ぶか究極の選択を繰り返している、見かねたみかんが俺の頭から飛び降り、階段を下ってバイクの方へと駆けて行った。そしてバイクの上に立ち、鳴きながらこちらを見つめている。分かってんだよ。でも、俺には。

『カイトさんっ!』

どこからともなく、あいつの声が聞こえてくる。

もしかして、これが走馬燈ってやつなのか？

そんなバカな事を考えていると、またある声が届いた。

『生きて——お兄ちゃんっ！』

聞こえるはずのない、その声。

もう二度と呼ばれる事は無いのに、誰かはそう言った。

その声が聞こえた瞬間、俺は無意識のうちに立ち上がっていた。

そして足は自動的に階段を飛び降り、腕は倒れていたバイクを起こす。

「ああ」

声の主に向かって返事をする。それからアクセルを回し、暗い廊下にバイクを走らせた。

窓の外に白い光が見える。たぶんもう、あいつはあの魔法を放った。どんな風に俺の所まで届くかは分からない。ただ、数秒の経たないうちにあれは俺を殺しに来る。

廊下の端に辿り着き、俺はすぐさまUターンして、前方に見える扉に向かって加速し



た。

急速に迫るあの扉。俺があれを破壊して向こうに出るのが早いかな、それともあいつの魔法が俺とみかんを殺すのが早いかな、もう神のみぞ知る。

ただ、俺はまだ死ねない。

「……………そうだよな、凜」

廊下で高速の助走を付けたバイクをウイリーさせてから、ギリギリのタイミングで飛び降りる。思い通りにバイクは宙を舞い、閉ざされた鉄の扉に向かって飛んで行った。

——爆発音と爆風。みかんを腕に抱いてそれに耐え、治まったと同時に立ち上がり、屋上と繋がった扉の方へと全力で駆ける。

向こう側に足を踏み入れた瞬間、後方から白い閃光がこの背中を捉えた。

## 第二十五話



目を開けると、満天の星空が広がっていた。

そう言えばもうすぐ七夕の時期だった気がする。今年も織姫と彦星は、天の川を渡って年で一度の一夜を過ごすんだろう。くだらねえな。

にやん、と耳元で聞こえる鳴き声。目だけを動かすと、みかんが俺の頬を舌で舐めていた。そのざらざらとした感触がくすぐったい。でもそれは、全身に感じる痛みを僅かに癒してくれる気がした。

「……………ん？」

痛みを感じている。って事は、俺はまだ生きてんのか？ そんな風に自問して、ようやくその事実気づいた。でも、身体は動かない。この状態を生きている、と表現して

いいのかはかなり微妙だ。

なんとか顔を動かすと、屋上の入り口の上に伸びた避雷針がプスプスと音を立てて焼けているのが見えた。その下ではついさっきまで俺の愛車だったバイクの亡骸が、粉々になって燃えている。この視界に映る映像が現実ならば、やっぱり俺はまだ生きているらしい。

「……………貴様、何をした。何故まだ生きている」

今度は怒りに満ちた男の声が聞こえてくる。

ああ、つて事は間違いねえ。

俺はまだ、死んでない。

「はは、っ」

その事実が自分でも信じられず、思わず笑ってしまう。俺があんな無謀な賭けに勝つなんて、あのグラウスとかいう男はこれっぽつちも思っっちゃいなかっただろう。

「質問に答える人間。私の魔法が、貴様如きに防げるはずが無い」

近づいてきたグラウスは仰向けに倒れる俺の横に立ち、銀色の剣を突きつけてくる。その言葉に、微笑みを浮かべて答えた。

「教えねえ。さつさと負けを認めて元の世界に帰りやがれ、このレモン野郎」

「ふざけるなっ！ 人間の分際での私を侮辱するとは。貴様、ただでは殺さんぞ」

喧嘩を売るとグラウスは鬼のような形相でそう言ってくる。でも今は何もかも、ただの負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった。猫をなめんじやねえバーカ。

「ああそうか。なら早く殺せよ。なめてた人間様に負けたから悔しくなつて殺しましたー、なんて、負けを認めねえガキみてえな真似をしてみろよ。ほら、早く」

煽られて怒りが頂点に達したのか、グラウスは握っていた銀の剣を振り上げる。その剣が振り下ろされればどっちにしろ死ぬんだが、負けっぱなしで死ぬよりは百倍マシだ。

「痛——ツ!? な、なんだこの動物はっ! 離れろっ!」

そうして諦めながらその時を待っていると、傍にいたみかんがグラウスの身体を駆け上がり、無防備だったその顔に噛みついた。

グラウスはよろめきながら顔に付いているみかんを剥がそうとする。

だが、みかんもそれを許さない。頬に爪を立て、鼻に噛みつき必死にしがみついていた。

「みかんっ!」

「いい加減に、しろっ!」

しかし、ただの子猫が魔法使いに敵うわけないのは分かり切っている。グラウスに振り払われたみかんはぎゃっ、という鳴き声を上げてフェンスを越えて屋上から落ちて行った。

「な——何しやがんだてめえッ!」

起き上がり、グラウスの顔に殴りかかる。

だが、その拳は奴の手の平で受け止められた。

「……………あんな動物に傷をつけられるとはな。結局、最後まで私に一撃も与える事ができなかった貴様よりもよっぽど勇敢だ」

それから鳩尾を殴られ、その場に跪く。

ちくしょう。こいつの言った通りだ。賭けには勝ったが、俺はこいつに一発も当てられてない。あの魔法少女が指示したのは、時間を稼ぎながらこいつに一撃を与える事。

俺は結局、それを果たす事ができなかった。

「さらばだ人間。あの動物とともに、私との勝負に勝った事を誇りながら死んで行け」

グラウスが剣を掲げるのが分かる。でも、もう身体は動かない。

万事休す、なんて言葉はこんな時に使うのかもしれない。

「……………くそ」

何もできなかったわけじゃない。でも、死んだらそれも無駄になる。

俺が死ねば、両親はどうなるんだろう。やっぱり、こいつに殺されるのだろうか。ここまでポロポロになるまで頑張ったんだ。せめてあの二人だけは、生きていてほしい。そして、あの二人を守れるのはあいつしかない。

「ノラ…………ツ！」

最後に、その名前を呼ぶ。そう言えば、面と向かってあいつの名前を読んだ事つて一度も無かった気がする。まあいい。どうせ俺はここで終わりなんだから。

死ぬ前にあと一回だけ、あの金髪とバカ面を拝みたかった。

それも、もう叶わないけれど。

そんな似合わない事を考えた時。

「お待たせしましたカイトさんっ！」

あのバカの声が、静かな屋上に響いた。

◇

「な——姫様ツ!?!」

グラウスの焦る声が聞こえ、それと同時に固まっていたこの身体が突然動き方を思い出したように自由になる。俺はその隙を見逃さず、よそ見をしているグラウスの右手首を蹴り上げて奴が握っていた銀色の剣を手離させた。

「しまっ」

「よそ見してんじゃねえこのクソ野郎ツ!」

間髪入れず、全力の右ストレートを整った顔面に叩き込む。

やられっぱなしで忘れかけていた、拳から伝わる誰かを殴った時の、あの感触。

グラウスは鼻血を出しながらぶっ飛ばされ、勢いよく屋上のフェンスにぶつかつた。

一発も当てられなかつた相手をぶん殴る快感。



最つ高の気分だぜ。見たかこの色男。

「ぐふ、つ……………こ、この魔法は、まさか」

「そのまさかですよ、グラウス。私が犯した罪は、この世界にやって来る事とワスレダマを持ち出した事だけじゃありません。あなたのような騎士が追って来た時のために、もうひとつの大禁術をマスターしてから来たんです」

グラウスは驚愕の表情を浮かべながら、宙に浮いている魔法少女を見めている。奴の腕の中には、屋上から落ちて行つたはずのみかんがいた。どうやらあの女に受け止められていたらしい。よかった。

「バカなっ!! この魔法は、何千年も前に封印されていた禁術だったはずっ!」

「だから、私はそれを破つたんですよ。どうせひとつの罪で罪人になるのなら、他に罪を犯しても同じです。そうでしょう?」

「い、いやだがしかしつ。この魔法を発動させるには対象者の血液が必要になるはずだつ。私は血など一滴も流していないつ。なのに何故っ!?!」

そう言われ、魔法少女は腕に抱くみかんの小さな前足を掴んでみせる。それを見たグラウスは、ハッと何かに気づくような表情を浮かべた。

「忘れたんですか？ この子がちゃんとして、あなたの血を持ってきてくれましたよ？」

「……………嘘だ。ひ、姫さま」

「さあ、覚悟しなさいグラウス。これであなたはもう魔法が使えない。私の命令に背いた罰です。あなたが嘲った人間に負ける屈辱を、思う存分味わいなさい」

魔法少女はそう言って、こちらを見つめてくる。

「カイトさん、もう恐れる事は何もありません。今の彼は魔法も剣も失くした、言ってみればただの人間です。遠慮はいりません。正々堂々、殴り合いで決着をつけてください」

「……………はっ。よく分からねえが、こっからは純粹な喧嘩ってわけか。面白れえ」

魔法少女にそう言われ、拳の骨を鳴らしながらグラウスの方へと歩み寄る。それ以上後ろに下がる事はできないのに、奴はフェンスの向こうへと後退ろうとしていた。

「や……やめろ。来るな人間」

「てめえ、今まで散々俺を虚仮にしてくれたよなあ。今度はこっちの番だぜ色男」

「近寄るなつ、これ以上近づけば——」

「良い言葉を教えてやる。この世界にはな、やられたらやり返せ、つつー最高の格言があるんだよ」

右手の拳を握り締め、恐怖に染まる表情を浮かべながら喚くグラウスに向かって言う。

「あんま人間をなめんじゃねえ、クソ魔法使い」

そして、俺は腕を振り下ろした。

## 第二十六話



「——魔核潰し。魔法使いが魔法使いを殺す封印された大禁術、ですか。確かに恐ろしい魔法ですね。これで魔法使いではなくなつたあなたはもう、どう頑張つても向こうの世界には帰れません。ですが、命までは奪わなかつた事を感謝しなさい、グラウス」

喧嘩が終わつたのを見て、魔法少女はフェンスに凭れている男へと近づいていく。

「あなたには、私の代わりにこの世界で生きる権利を与えます。でも、心配ありません。ここは思ったよりも居心地が良い場所ですから」

「……………姫、さま」

「生きるのに困つたなら、公園の近くに住んでいる主藤という人間の家を訪ねなさい。そこに住む人間ならばきっと、捨てられた魔法使いを受け入れてくれるでしょう」

俺がボコボコにしたグラウスの前に立ち、魔法少女は声をかける。

詳しい事は分からないが、とりあえず俺たちはこいつに勝つたらしい。

「これで、私がこの世界にいる理由は無くなりました。あの校庭にいる魔物たちを倒した後、私は潔く元の世界に帰ります。グラウス、あなたも達者でいてください」

奴らの後ろでその会話を聞いていると、足元からにやあとという鳴き声が聞こえてくる。目を向けると、みかんが右足に頭を擦りつけていた。

『よくやった』なんて、褒められている気分になったのはやっぱり気の所為だろう。

「お互いさまだ。お疲れさん」

みかんを抱き上げ、小さな頭を撫でてやる。こいつがいなかったら俺は今ごろ消し炭になっていた。帰りにコンビニで猫缶でも買ってやろう。

「ふ……っ」

「? どうしました、グラウス」

そんな事を考えながらみかんを戯れていると、黙っていたグラウスが急に笑い始めた。その意味が分からないらしく、魔法少女も首を傾げながら奴を眺めている。

それから屋上に響く、静かな笑い声。やがてそれが治まると、奴は顔を上げて前に立つ魔法少女を見上げた。そこにはまだ、歪んだ微笑みが浮かんでいる。

「姫さま。今回はあなたの勝ちです。ですが、やはりあなたは詰めが甘い」

「……どういう意味です?」

「秘策を用意しているのが自分だけであると、なぜ思うのです?」

グラウスはそう言って、パチンと指を鳴らした。だが、何も起こる様子はない。俺に負けたシヨックでおかしくなったのか、と思っている時、地上の方から何かの音が聞こえて来た。

「私とて、あなたと戦って確実に勝てるなど思っていないませんでした。最悪の事態をまず最初に考え、そこから作戦を練る。これが騎士の戦い方です」

俺はフェンスへと駆け寄り、校庭の様子を確認する。

そこには。

「……………なんだ、ありや」

「あなたたちは、どうしても私をあの世界に連れて帰らなかったのですね」

「当たり前です。あなたを失ったあの国に、もはや未来は無い。口には出さずとも、国王様も女王様も姫さまを必要としているのです。それは、政治や戦争のためだけではなく、自分の娘としても、あなたに……………近くにいて、ほしかったのです」

「そこまで言って、グラウスは気を失うようにがくりと首を前に垂らす。

魔法少女は気絶した金髪の男を見つめながら、ただその場に立ち尽くしていた。

だが、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

「おいつ、なんかやべえぞあれ！　なんであいつら急に一か所に集まり出したんだっ!？」

下の異常を見ながら言うと魔法少女は我を取り戻し、こつちに近寄ってくる。

「あれは、グラウスが仕掛けた時限魔法です。おそらく彼は保険を掛けていたんでしよう」

「時限魔法？」

「詳しい説明は後です。一旦おとーさんとおかーさんと合流して作戦を立てましょう」

魔法少女がそう言った直後、校庭の真ん中に集まった魔物たちの大群から禍々しい黒の光のようなものが発せられる。そして数秒後、その光が治まると、魔物の群れは校舎よりもデカい超強大な一匹の化け物に変身していた。

「うおっ、なんだこいつ!？」

「日曜朝の戦隊ヒーロー番組でもよくあるでしょう。倒したと思ったら敵が巨大化する、みたいな。とりあえずあんな感じだと思っってください。さ、行きますよ」

「超分かりやすいけど、なんでそんな冷静なんだお前っ」

即座にツツコミを入れるが、奴は既に屋上の出口の方へと向かって走り出していた。

その後を追う前に、校庭に現れたその巨大な化け物を見つめる。地響きを鳴らしなが



ら校庭を歩いている黒いモンスター。遠くからだと完全にゴジ〇にしか見えない。

「訳わかんねえけど……行くぞ、みかん」

にゃん、という返事を聞いてから、お釈迦になったバイクの破片を飛び越えて校舎の中へと戻る。出口をくぐる直前、フェンスに凭れるグラウスを一瞥した。

あいつがこれからどうなるのかは知らない。だけど、もしまたどこかで会う事があつたならその時は敵としてではなく、ただの人間として接してやろう。

そんな事を考えながら踵を返し、みかんを抱えたまま階段を下り始めた。



「魁人っ、よかった。無事だったか」

「ああ、でもこんなにくささん怪我をしてるわ。大丈夫？ 痛くない？」

そうして一階に着くと、親父と手提げバッグを抱えた母親が魔法少女と合流していた。

両親は俺の顔を見た瞬間、異常なまでの心配をしてくる。見た目は無傷だけれど、この二人だって相当無理をしながら魔物たちと戦っていたはず。なのに、なんで真っ先に俺の心配なんてしてくるのか。その神経が俺は昔から理解できなかった。

「大丈夫だ。それより、次はあいつをどうにかしなきゃいけないんだろ。どうすんだよ」

二人の心配を無視して魔法少女へと訊ねると、奴は昇降口の方に顔を向けて、今もなお校庭を歩いている化け物を見つめながら口を開いた。

「私のプランではグラウスを倒した時点でこの戦いは終わると思っていたので、この状況はかなり予想外なんです。むしろどうすればいいのか私が訊きたいくらいです」

トーンを落とした声が昇降口に零される。すると、それを聞いた親父が反応した。

「なら、打つ手はないのかい?」

「完全に無いわけではありません。ですが、今はかなり厳しい状態なんです」

「それは、どうして?」

続いて母親が問いかけると、魔法少女は数秒の間を置いてから深刻そうな顔をして答えた。

「実は、先ほどの魔法を使った所為で魔力が尽きました。だから、今のままではあの魔物には勝てません」

「ごめんなさい、と最後に付け足す魔法少女。その言葉を聞いて、俺たち四人と一匹は校舎の中で黙り込んだ。夜中の学校にはあの化け物が鳴らす足音だけが響いている。

「……………どうする事も、できねえのかよ」

「はい。Manaが無いこの世界では、魔法使いは魔力を回復させられません。……ですが」  
俺の問いに魔法少女はそう答える。だが意味深な接続詞を残し、奴は続けた。

「ひとつだけ、私の魔力を回復する方法があります。ただし、それにはまた皆さんの手助けが必要なんです。おそらく、これは一番難しいお願いになります。さつき私が出した

指示など比べ物にならないくらいに」

魔法少女は真面目な顔をして語る。その表情を見れば、それがどれくらい困難なのはすぐに察しがついた。魔物やグラウスと戦うよりも難しい？

それは、一体どんな事なんだ。

「正真正銘、これが最後の戦いです。どうか私にその力を貸してください」

魔法少女はそう言って、こちらに頭を下げて来る。俺たち三人はお互いの顔を見合わせ、覚悟を決めるように頷き合ってから声をかけた。

「……………分かったよ、ノラちゃん。ここまで来たんだ。最後まで君のお願いに従おう」  
「そうね。お母さん、ノラちゃんのお願いならどんな事でも聞いてあげるって決めたの」  
「最後までてめえの我が儘に従うのは癪だけだよ、特別に手伝ってやる」

最後にみかんがにゃー、と鳴き、奴の頼みに全員が賛同する。

それを聞いた魔法少女は顔を上げ、潤んだ瞳で俺たち一人ひとりの顔を見つめてき

た。

「ありがとうございます。ごさいます。あなたたちが助けに来てくれて、本当によかった」  
「そういうクセエのは後にしろ。で、何をすりゃいいんだ」

感極まりそうになる魔法少女の言葉を遮り、俺は訊ねる。今は隠れられているが、あの化け物が校舎の方に来たら俺たちには逃げ場は無い。悠長に話をしている時間は無いはずだ。

魔法少女は袖で目をごしごしと拭ってから真剣な顔つきに戻り、再び口を開く。

「はい。ならば、早速説明しましょう。一度しか言わないのでよく聞いていてください」  
そんな前置きを置いてから、奴は語り始める。

「——魔力とは本来、マナという空気中の酸素に結合している原子を吸い込む事によって魔法使いの体内に蓄積し、それを魔核と呼ばれる臓器が還元する事で魔法という力に変える事が可能になるんです。ですが、この世界の空気には酸素はあれどマナはありま

せん。だから本当は、この世界に來た魔法使いは魔法が使えないはずなんです」  
「なら、どうしてノラちゃんは魔法を使えているの？」

母親がそう言うと、魔法少女は頷いてから続ける。

「向こうの世界から持ってきた魔力が無くなれば、私は魔法が使えなくなつたはずですが、でも、私はこうして魔法を使えている。その理由は誰でもない、皆さんのおかげです」  
「？ それは、どういう？」

「……これは私も予想外でした。まさか、呼吸でマナを取り込む以外に魔力を回復させる方法があつただなんて、たぶん向こうの世界にいる魔法使いは誰も知りません。というより、常にマナに満ちた世界で暮らしているからこそ、知る由も無かつたんだと思います」

魔法少女は俺たちの顔を見て、それから再び口を開く。

「どうやら魔法使いは、他者から愛情をもらうと魔力が回復するみたいなんです」

「……………はっ？」

「分かります。私が何を言っているのか、カイトさんが分からないのは重々承知です。でも、これは事実なんです。私が今ここにいるのが、その証拠です」

急に訳の分からない事を言い始める魔法少女。

だが、その顔は真面目なままだった。

「愛情を、もらおう?」

「具体的に言おうと、喜びの感情を感じると自動的に魔力は回復されて行きます。庭のお掃除をしておかーさんに褒められたり、おとーさんの肩を揉んだ後に頭を撫でられたり、みーちゃんと猫じゃらしで遊んでいたりと、何故か魔力が回復するんです」

「ちよつと待てこのクソガキ。なんで俺とのエピソードが入ってねえんだよ」

「だって、カイトさんは私に愛情をくれた事が無かったんですもん。だから何回も言っただじやないですか。私をもっと甘やかしてくださいー、って」

咄嗟に抗議するが逆に睨まれる。確かに、こいつは事あるごとにそう言っていた気がする。だが、それとこれとが繋がるだなんて誰も思わない。

「あとは大好きなものを大好きな人たちと一緒に食べる事で、私の魔力は急速に回復します。毎朝毎晩、どれだけおかしさんやおとーさんが忙しくてもみんなと一緒にご飯を食べていたのは、そのためだったんです」

「……………で、結局お願いってのはなんだ？」

「ここまで説明すれば分かりますよね？ 私がお願いしたい事はただひとつ。私の事を喜ばせてください。ちよつとやさつとじや足りません。あの魔物を一撃で倒すくらいの莫大な魔力を——私にください」

魔法少女は曇りの無い眼で俺たちを見つめながら、そう言った。



「……………ノラちゃんを、喜ばせる」

「そうです、おかしさん。それがどれだけ難しい事かは私も分かっています。ですが、それをしなければ私たちはあの魔物に勝てません」

母親が呟いた声に、魔法少女は反応する。



だが、俺の頭ではその言葉の意味を解読できなかった。

「なんだそりや。訳わかんねえ」

「だからそう言ったじゃないですか。このお願いは今までで一番難しいです、って」  
「そんなもん、この状況でできるわけ」

否定的な意見を述べようとすると、隣に立っていた親父は徐に首を横に振った。

「……いや、できる。やろう、ママ、魁人。俺たちならきつとできるはずだよ」

「そうね、パパ。ふふ、お母さんこんな時のために、とっておきのものを作つて来たの」

何故かやる気満々の親父と母親。そして二人は廊下の上に腰を下ろした。

その意味不明な行動に、魔法少女も首を傾げて両親を見つめている。

「ノラちゃん、お腹空いてないかしら？」

「え？ あ、そうですね。戦いっぱなしでしたから、言われてみればお腹ペコペコです」

「じゃあこれ、一緒に食べましょう？ 魁人も、みかんちゃんも一緒にね」

母親はそう言って、持っていた手提げバッグの中からあるものを取り出した。

それは、母親特製のオムライスおにぎり。うちでは通称、オムぎりと呼ばれている食べ物。言われてみればこの女を助けに来る前、母親は台所に立って超速で何かを作っていた気がする。

「ほら、座りなさい二人とも。みんなで夜ご飯を食べよう」

「そうよ。今は全部忘れて、まずはお腹をいっぱいにしなないとね」

そう言って両親は微笑む。俺と魔法少女は一度顔を見合わせ、それから二人と同じように夜中の暗い廊下の上に腰を下ろした。

それから、母親はラップに包まったオムぎりを俺たちに渡してくる。

まだほんのりと温かいそれを握り締めながら、親父は俺の横に座る魔法少女に言った。

「じゃあノラちゃん。いつものをお願いできるかな」

親父にそう言われ、何かを思い出すような表情を浮かべる魔法少女。奴はこくりと頷き、俺たちを見渡してから口を開いた。

「はい。それじゃあ——いただきますっ！」

奴の声を聞いて、全員でいただきます、と復唱する。

ラップに包まれたエサを与えられたみかんも、にやあと鳴いてからそれを食べ始めた。

そして、俺たちはそのオムگیریを黙々と食べ進める。

………なんでこんな時間にこんな所で、家族で一か所に集まりながら夜飯を食っているのか。改めて考えると意味が分からなかった。

でもこんなに美味しい飯を食ったのは、本当に久しぶりな気がした。

「……………っ」

「……………おい」

そうしてそのオムگیریを食べていると、魔法少女の口が止まっているのに気づく。

目を向けると、奴は下を向きながら微かに震えていた。それが何を意味するのかは、すぐに気づいた。

「ノラ、ちゃん」

「ごめん、なさいっ。わたし、嬉しいんです。みんなでこうして、大好きなものを食べるのが。これだけで泣くなんて、おかしいのは分かってます。でも、今……」

魔法少女は嗚咽を隠さず、透明な滴を流しながらオムگیریを咀嚼する。その泣き顔を見た両親も、涙を堪える事ができなかつたらしい。

「ノラちゃんっ」

「……………おかーさんが作ったオムライスは、世界一美味しいです。こんなに美味しい食べ物、生まれてから一度も私は食べた事がありません。国で一番腕がいい料理人で、おかーさんのオムライスには敵いません。本当に……本当に、美味しいです」

涙を流しながら、またオムگیریにかぶりつく魔法少女。

そんな小さな身体を、両親はそつと抱き締めていた。

こいつらはなんで泣いているのか、なんて。そんなもん分かってる。

これが四人で食う最後の夜飯だって、気づいてるからだ。

「でも、私一人じゃ一番にはならないんです。世界で一番の料理を、一人で食べたって美味しくない。どれだけ美味しくても、大切な誰かと一緒にやなきゃダメなんです。大好きな人たちと食べるから、おかーさんのオムライスは世界一美味しいんです。そうでしょう?」

「……そうだね。きつとそうなんだよ、ノラちゃん」

「そうよ。みんながいなきや、ご飯は美味しくもないの。どこにいても、どんな世界にいても……それだけは忘れないで」

両親の言葉を聞いて、泣きながら頷いた魔法少女。

「忘れるわけ、無いじゃないですか。こんなに素敵な食事の作法を、私は一生忘れません」

彼女はそう言って、最後の一口を口に放り込んだ。

## 第二十七話



オムギリで腹を満たした後もまだ、俺たちは輪になったまま下駄箱近くの廊下に座っていた。

理由はもちろん、この魔法少女の魔力とやらがまだ回復していないから。

「ノラちゃんが喜ぶ話かあ。改めて考えてみると難しいね」

「そうねえ。普段なら簡単にできるのに、意識しちゃうと全然浮かんでこないわあ」

俺たちはアプローチの仕方を変え、この女が喜ぶ話をする、という方法でこいつの魔力の回復をさせようとしていたが、それもなかなか上手くいかない。面白い話をしろ、と言われた時ほどそれができないのは、この世界の理みたいなものなんだろう。

「どうしましょう。まだ魔力が足りません」

「ならどうすりゃいいんだよ。つーか、こんなもん無理に決まってるだろ」

「だから、この方法は難しいと言ったんです。こうなると無理をしても魔物と戦う他ありません。勝てる可能性は低くなりますが、魔力が回復しないのでは仕方ありません」

魔法少女のめずらしい後ろ向きの言葉を聞き、再び廊下に沈黙が落ちる。

「ねえ、ノラちゃん」

そんな時、親父が静寂を破り、奴の名前を呼んだ。

「どうしました、おとーさん」

「ノラちゃんが喜ぶ話っていうのは、例えばノラちゃんとは関係ない話でもいいのかい？」

「？ 私の感情が動いてくれるのならば、それでも問題ないと思います」



魔法少女が首を傾げながら答えると、親父は頷いてから確信を持ったような顔で言う。

「それならちようどいい。ノラちゃんが喜びそうな話があるんだ。聞いてくれるかい？」

「んだよ。そういうのあんなら最初から言えつーの」

「魁人が嫌がりそうだから言えなかつたんだよ。でも、今はそんな事を気にしている場合じゃないだろ。だから我慢して聞きなさい、魁人」

「あ？　なんで俺が」

この話の流れでなぜ我慢などしなければならぬのか。それに、俺が嫌がりそうな話ってなんだ。

「それで構いません。おとーさん、聞かせてください」

「分かった。じゃあ、次はママにも話してもらおうから考えておいてね」

「あら、分かったわ。それってどんな話？」

「それはね」

親父は隣に座る母親に何かを耳打ちする。それを聞いた母親はまあ、と口に手を当てながら嬉しそうな顔でこちらを見つめてきた。なんだ。すげえ気になる。

「いいわよパパ。お母さん、この話題ならいくらでも話せる気がするわあ」

「だよ。きつと、ノラちゃんも気に入ってくれるはずだ。魁人は嫌がるだろうけど」

「だから何なんだよ。もったいぶらずに早く話せつての」

「いいんだな、魁人。絶対後悔するなよ」

「前置きの意味が分からねえが、いいぜ。絶対に後悔しねえつて約束してやるよ」

しつこい親父に早く話をさせるため、考える間もなくそう言ってみせる。

すると両親は途端に笑顔を浮かべ、魔法少女の方を向いた。

「魁人にもオーケーをもらえたし、始めようかノラちゃん」

「はい。何の話でしょう。すごく気になります」

「ふふ、そうだよ。ノラちゃんが喜びそうな話っていうのは」

ワクワクした面持ちで見つめる魔法少女に向かい、語られる言葉。

「——魁人が小さかった頃の話、だよ」

「ちよつと待ってクソ親父」

しかし、その試みは一瞬で頓挫した。

「ダメよ魁人。約束したでしょ？ 絶対に後悔しないって」

「確かにしたがそれだけはダメだ。息子がいる前で息子の昔話をする？ 俺を殺す気か」

そんなもんを聞かされたら俺は間違いなく自殺の一途を辿る。そんな未来しか見えない。

「……………たい、です」

「あ？」

「私、その話を聞きたいですっ！ カイトさんの小さい頃の話？ ああ、その手がありま

したっ。なんで気づかなかったんでしょう!? おとーさんはやっぱりすごいですっ!」

俺の逃げ場を失くすように、ハイテンションで親父と母親の前に移動する魔法少女。こんな状況だというのに、そのこめかみに全力のアイアンクローを食らわせてやりたい衝動に駆られた。

「だよね。ノラちゃんならそう言ってくれと思うたんだ」

「はいっ! そんな面白そうな話を聞かずに向こうの世界に帰るだなんて、私にはできませんっ!」

「いいから早く帰れ」

「カイトさんは黙っててください! さあ、おとーさんおかーさんっ。今すぐ私にカイトさんが小さかった頃のお話をしてくださいっ! それを聞けば魔力が満タンになる気がしますっ!」

そうして急に鼻息荒くなるクソガキ。その様子を見て、両親は再び魔法少女へと視線を戻した。

「もちろんいいよ。じゃあ、何から話そうかな」

「ふふ、たくさんあり過ぎてお母さんも悩んじゃうわあ」

「お前ら、マジでいい加減に」

「煩いですカイトさん。ジツとしていてください」

「何い!? 身体が動かねえっ! てめえ何しやがった!」

バカな両親に物申してやるために立ち上がった時、突如として動かなくなる俺の身体。戦犯は間違いなくこのクソ魔法少女。全力でぶっ飛ばしてやりたいが、今はそれも叶わない。

「そうだね。なら、まずは魁人が生まれた時の話をしようか」

親父はそんな前置きを置いてから語り出す。動かない身体代わりに声で邪魔してやろうと思ったが、今度は口までも開かなくなった。この女。マジで後で覚えてろよ。



「……魁人が生まれたのはね、ちょうど桜が咲き始めた季節だった。ノラちゃんは桜の花を見た事が無いかもしれないけど、ママが入院していた病室から見えた桜は、本当に鮮やかで綺麗だったんだ。きつと、一生忘れられないくらいに」

静かな口調で語り始める親父。魔法少女も母親もみかんも、黙ってその声に耳を傾けていた。

「今はこんな怖い見た目をしてるけど、生まれたばかりの魁人は天使みたいに可愛かった。ママと結婚して、何年も経ってからようやく生まれ来てくれた子どもだったからね。それはもう、可愛くて可愛くてしようがなかった。たぶん口の中に入れたって痛くなかったよ」

「いや、お口の中はさすがにダメだと思います、おとーさん」

目じやねえのかよ、と心の中でツツコミを入れた後、魔法少女が代わりに言ってくれ

「でもそれくらい、魁人は可愛かったんだ。目はママとそっくりで、鼻の形はお父さんによく似ていた。大きくなって行く度に、それがもつと分かるようになった。歳を重ねるごとにね、この子は本当に自分の子どもなんだ、って魁人から言われている気がしたよ」

親父は一度言葉を区切り、すぐに続ける。

「小さい頃、魁人はとっても泣き虫でね。何かあるとすぐ泣いてたんだ。ママとお父さんとちよと離れただけでふにやあって泣いていたし、公園で大きな犬に顔を舐められて大泣きした事もあったなあ。あの頃はママもお父さんも心配していたんだよ。こんなに泣き虫だったら、大人になってもひ弱なままなんじゃないか、って。それは杞憂だったけどね」

「カイトさんが泣き虫……………ぷふっ」

口に手を当てながらこちらを見てくる魔法少女。だが、俺は何も言えなかった（物理的に）。

「確かあれは、魁人が小学生になってすぐの事だったかな。ある日の夕方、魁人は身体中泥だらけになって家に帰ってきたんだ。ママとお父さんは驚いて何があつたのか訊いたんだけど、魁人は答えてくれなかった。黙って部屋に戻って、一人でしくしく泣いてたんだよ」

「っ！」

このクソガキに聞かれたくない話が始まり、俺は咄嗟に親父の喋りを止めようとした。

だが、魔法にかけられた身体はそれを許してはくれず、話は前へと進んで行く。

「まさか誰かに虐められたのかと思って、魁人と仲の良い女の子のお父さんに訊いてみたんだ。そしたら、その理由はすぐに分かったよ」

「ん？ その仲の良い女の子って、もしかしなくてもあかりさんですか？」

「そうだよ。今も昔も、魁人はあかりちゃんが好きだからね」

身体が動くようになったらぶっ飛ばすリストに、親父の名前が刻まれた。



「そのとき魁人は、上級生たちに虐められていたあかりちゃんを助けていたんだ。体格が全然違う年上の男の子たちに立ち向かって、泥だらけにされながらもね。何度も立ち上がって、苛めっ子をやっつけようとしていた。そのしっこさに負けた苛めっ子はどこかに行つて、魁人はあかりちゃんを守つたんだ。そう、あかりちゃんのお父さんから教えてもらったんだよ。ついでに、あかりちゃんが魁人を好きになつちやつたって事もね」

「うわあ、本当に小さい頃から同じ事やつてたんですね、カイトさんとあかりさん」

頼むから死んでくれ。それか俺を殺せ。

「それで、ママとお父さんは分かつたんだ。この子はとても優しい子なんだって。優しくて、何があつても諦めない、強い男の子だって。喧嘩をするのはいけない事だけれど、ママもお父さんも何も言わなかった。褒めもしなかったし、叱りもしなかった。そうしていたらしいの間にか、見事な不良に育ちちやつたけどね」

親父は微笑みながら、動けない俺の前でしゃがみ込む。

そして、この目を見ながら口を開いた。

「……………あの子がいなくなってから、魁人が苦しんでるのは分かった。でもね、それはお父さんたちも同じだったんだ。どうすればいいのか分からなくて、ずっと悩んでいた。またいつも通りに戻そうと頑張るほど、魁人は離れて行って、やがて不良になってしまった。魁人とはもう二度と面と向かって話せない。そう思ってた時、ノラちゃんがやって来たんだ」

「……………」

「ノラちゃんのおかげでまた魁人と話ができるようになって、お父さんは感じたんだ。魁人はやっぱり、小さい頃の魁人のままだ、って。見た目が変わっても、髪型が変わっても、魁人は魁人なんだ。不良になって問題を起こしていても、俺の息子である事は変わらない」

だから、と親父は言った後、この身体をそっと抱き締めてくる。

「強くて優しい男の子に育ってくれて、ありがとう」



そして、そう語りかけてから温もりは離れて行った。その目が潤んでいるように見え  
たのは、気の所為なんかじゃない。隣に座る魔法少女も、きつとそれに気づいている。

「……………おとー、さん」

「さあ次はママの番だよ。ノラちゃんのために、とつておきの話を聞かせてね」

「もちろんよ、パパ」

今度は親父の話を黙って聞いていた母親が前に出てくる。母親はいつも通りの温かい  
笑顔を浮かべて、俺たちに向かって口を開く。

「じゃあ、お母さんはパパが話さなかった魁人の恥ずかしい話をしちやおうかしら」

「ホントですか?!? じゃあカイトさんが真っ赤になるような話をお願いしますっ!」

「うふふ、分かったわ。でも、魁人がかわいそうだから少しだけね」

その前置きを聞いてヒートアップする魔法少女。フォローが無かったらリストに母

親の名前も載るところだった。しかし、話の内容次第ではそうなる可能性も十二分にあり得る。

「なら、まずは魁人とあかりちゃんのお話からね」

ぶつ飛ばすリストが更新された。もうダメだ。死のう。

「魁人とあかりちゃんはね、同じ病院で生まれたの。あかりちゃんのお父さんとお母さんは家のご近所さんだったから、魁人が生まれてくる前から仲良しだったのよ」

「なるほど、カイトさんとあかりさんが結ばれるのは生まれる前から決まっていたのですね」

なるほどじゃねえよこのクソガキ。決まってねえっつーの。

「それで、あかりちゃんが生まれた次の日に魁人が生まれて、二人は小さい頃からずーっと一緒だったの。お姫様と王子様ごっこをしたり、手をつないで幼稚園に行ったりしてね。ああ、あの頃の二人は本当に可愛かったわあ」

「うわあ見たいたっ！　すごく見たいですその光景っ！　考えるだけでドキドキしますっ  
！」

そのまま破裂しろ心臓。

「でも、小学生になった頃くらい、かしら？　魁人はあかりちゃんにツンツンするようになつちやつてねえ。魁人からはあかりちゃんを遊びに誘わなくなつちやつたのよ」  
「……………カイトさん」

母親の話を聞いた魔法少女は動けない俺にステツキを向けてくる。昔の話なのになんで今の俺をしぼこうとしてんだよ。意味分かんねえ。

「魁人は恥ずかしがり屋だから、大好きな女の子を自分から誘えなくなつちやつたの。けど、あかりちゃんもああいふ積極的な子だから魁人を色んな所に連れて行ってくれている。本当、あかりちゃんには感謝してるわあ。早くお嫁に来ないかしら？」

「分かります、その気持ち。カイトさんはさっさとあかりさんにプロポーズしてください」

好き勝手言いながらこちらを見てくる女二人組。こいつらはなんで俺が進む人生の方向を勝手に選択してるんだろう。馬鹿なんだろうか。

「お母さんはね、ちゃーんと知ってるのよ？ あかりちゃんの誕生日にプレゼントあげるためにお菓子を買うのを我慢してお小遣いを貯めてた事も。毎年バレンタインデーの時にあかりちゃんからもらうチョコにラブレターが入ってて、それを魁人が楽しみにしてる事も」

「え。マジですかおかーさん。おいしすぎるんですけど、その話」

なんで知ってたんだこのクソババア。俺の部屋には監視カメラでも仕掛けられてんのか。

「お母さんには分かるのよ。子どもが誰を、何を好きになるのか。魁人みたいに素直な子じゃなくても、自然と分かるの。それは、なんで分かる？」

何も言えずに固まっていると、母親は俺の頬に手を伸ばし、その答えを言った。

「それはね魁人。お母さんが、あなたを世界で一番愛しているからよ」

「……………」

「お母さんは誰よりもあなたを見ているの。きつと、魁人が思っている何十倍もね。あなたがどれだけ大きくなっても、それだけは変わらないわ」

母親は目を細めて語る。頬に触れている手からは、どこか懐かしい温かさを感じた。

「この世界はね、何かを愛する気持ちがすべてなの。それさえあれば、どれだけ悲しい事があってもまた頑張ろうって思えるの。あの子がいなくなった事は、本当に悲しかった。それでもお母さんが大丈夫だったのは、魁人がいてくれたからよ。あなたが不良になった事なんて、そんなのどうでもいい。お母さんはね、ただ魁人が生きていてくれればそれでいいの。あなたがいてくれるなら、どれだけ悲しみがあろうとも生きていくのよ。だから」

それから母親は親父と同じように俺の身体を抱きしめてくれる。

「愛してるわ、魁人。パパとお母さんの所に生まれて来てくれて——ありがとう」

なに言ってるんだ、こいつら。

なんで、こんな時に。

本当に、このバカ親共は。

「……………あ。魔力が」

母親が離れて行くと同時に、魔法少女の身体に薄っすらと白いベールのようなものが現れ、やがてその全身を包み込んだ。

「すごい、です。二人のお話のおかげで、いつの間にかとんでもない量の魔力が回復します。これだけあれば間違いなくあの魔物を倒せます!!」

「そうか。それならよかったよ」

「そうね。やっぱりパパの言う通りだったわあ」

驚く魔法少女に声をかける両親。



二人の話により、どうやら奴が必要としていた魔力とやらは満ちたらしい。だが、まだ満たされてないものがある。

「では、これから早速」

「……………待て」

◇

気づけば自由になっていたこの身体。ようやく話せるようになった口で、俺は魔法少女を止めた。両親も不思議そうな顔でこちらを見てくる。みかんはにゃん、と鳴いた。満たされてないのは、この心。他の誰のものでも無い、俺の心にはまだ隙間が空いたまま。

自分たちだけ言いたい放題言いやがって。そんなの、俺が許すわけねえだろ。

「カイトさん？」

「……………ぎげんな」

「え？」

「ふざけんじゃねえって言うてんだ、このバカ親共」

精いっぱい拳を握り締めながら込み上げてくる何かを我慢し、目の前にいる両親を睨みつけた。

それでもしなければ、俺は。

「魁人？」

「どう、したの？」

「どうしたのじゃねえ。何なんだよ、あんたらは。なんで、俺にそんな事を言えんだよ」

震える声で訴える。本当に意味が分からず、感情が迷走していた。

「好き放題わけわかんねえ事ばつか言いやがって。なに考えてんだ。なんでこんなグレた息子に向かってそこまで言えんだよ。俺は、あんたたちを突き放したんだぞ？ あんたらが困んのを知ってて不良になったんだぞ？ なのに、なんで」

思っている事を打ち明けると、両親は少し驚いた様子でこちらを見て来た。

「なんでだよ。どうして親不孝者にそこまで優しくできんだよつ。感謝してる？　ありがとう？　そんなもん、俺の方がしてるに決まってるんだろっ!？」

込み上げてくる感情をそのままに、俺は迷わず吐き捨てる。

それ以外の方法で、行き場を見失った気持ちを抑える事が出来なかつた。

どう足掻いても無視をしても、この二人に対する感謝なんていうとうに忘れ去つたはずの想いだけが、消えない。消えてくれない。

だから、俺は。

「あんたははずつとそうだったよな。俺が誰かと喧嘩して帰ってきてても、何も言わずにいつも通り接してくれた。どんだけ夜中に帰ってきてても、俺より先には寝なかつた。仕事で忙しいくせに、何がなんでも朝飯だけは作って置いてった」

潤み始める視界。だが絶対にそれを外に出さないよう、グツと唇を噛んだ。

「知ってんだよ、俺は。喧嘩してボコボコになって帰ってきてから救急箱を開けると、前に使ったはずの包帯やら絆創膏やらが毎回新品になってんのも。傷に沁みねえように風呂がぬるめに入れられてんのも。そういう時に限って俺の好物ばっか机に置いてあんのも！」

それでも、その温水は理性の壁を越えて溢れてくる。  
耐えようとすればするほど、それは頬を流れて行つた。

「あんたははずつとそうだ。俺がどんだけ間違つた事をして、絶対に怒鳴つたり殴つたりしなかつた。こんな訳わかんねえ女を拾つてきても、それを一瞬で受け入れてくれた」

「魁、人っ」

「感謝してんのは俺の方だつーのっ！俺はな！こんなバカみてえに優しい親の所に生まれて来なかつたら、とつくにただの腐つた不良にしかならなかつた。こんな家じゃなかつたら、一生つまんねえ毎日を生きるクソ野郎になつてたっ！」

泣きながら想いを叫ぶと、同じように涙を流した両親はまたこの身体を包み込んでく

る。

本当に、この家族は。

「俺は、あんたらの息子に生まれて来てよかつたつ。言いてえ事はそれだけだ、バカ野郎っ！」

——救いようもないくらい、バカな家族だ。

## 第二十八話

◇ I n t e r l u d e

校舎の脇に停めてあった黒いセダンにエンジンがかかる。運転席に座るのは、サングラスを掛けた中年の男。彼はアクセルを軽く踏みながら、目線の先にいる黒い魔物に目を向けた。

「……………あれの注意を惹いて、校舎の前まで誘い込む」

ステアリングを指で擦り、先ほど金色の少女に課された指示を呟く。

それから彼は窓の外に顔を出し、ルーフの上に乗る女性に向かって言った。

「何だか懐かしいね、ママ。追ってくる何かから車で逃げるのなんて、何年振りだろう」

「そうね、二十年くらい経ったかしら。ついこの間の出来事みたいに思えるけどね」  
中年の女性はそう答え、巨大な魔物を見つめた。彼女の手には一挺の弓矢が握られている。

「……………パパが引き寄せたら、あの両目を矢で射る」

それから、運転席にいる男性と同じように少女に課された指示を唱える。  
夫婦は互いに深呼吸をし、再び魔物へと顔を向けた。

「行くよ、ママ。振り落とされないように注意してね」  
「分かったわ、パパ。いつでもどうぞ」

ハイビームを点灯し、発進する車。

そうして校庭に姿を現し、百メートルほど離れた魔物へと高速で接近していった。

「さあこつちだでつかいの！ その遅い足でついてきなっ！」

魔物の足元に接近し、運転手は車体を百八十度回転させ、クラクションを鳴らす。必然、その存在に気づく魔物。

「気づいたわパパっ！」

「了解！　じゃあ飛ばすよっ！」

ルーフの上に立つ弓使いからの指示を受け、運転手はギアを入れて再度車を発進させる。

向かうは校舎の中央。そこに魔物を惹きつけるために。

先ほどまではゆっくりと歩いていただけの魔物。だが、ターゲットである車を見つけて叫び声を上げた瞬間、ただの歩行から走行へと移動の速度を切り替えた。

「速いっ!?!」

「追いつかれちゃうわパパっ!?!　もっとスピードを上げてっ！」

徐々に近づく魔物と車の距離。このままでは数秒もせずにあの大きな足で踏み潰さ



れてしまう。運転手はそんな最悪なイメージを頭に浮かばせた。

「……………ははっ、じゃあ。やるしかないか」

しかし、運転手はそう眩き、既に六速に入れたシフトノブへと左手を伸ばす。

これ以上のギアはこの車に存在しない。アクセルをべた踏みしても、速度は変わらない。だが。

「パ。パ。もうダメ！ 限界よっ！」

弓使いの声が運転手の耳に届き、彼はふう、と一度息を吐いた。

そして、タコメーターの針が九千を指した瞬間。

「——入れッ！ 幻の七速ッ！ スピードの向こう側アッ!!!」

左足で勢いよくクラッチを踏み込み、シフトノブを手前に傾けた。

がこん、という音とともに急加速する黒のセダン。

速度メーターは限界を振り切り、接近していた魔物からみるみると距離が空いていく。

「すごいわパパ！ やつぱりパパはカッコいいっ！」

「ふふっ、惚れなおすのは早いよ。今度はママの番だからね」

肩で息をしながら妻の声に応える夫。その言葉を聞いた弓使いは車体の上に立ち、弓を後ろから追いかけてくる魔物に向けて構えた。

「……………そうね。なら、次は私がパパを惚れなおさせてあげる」

弦を引き、迫ってくる魔物の両眼に狙いを定める。チャンスは一度。一本を当ててから次の弓を弾くまでの猶予は残されていない。魔法少女の指示は、一度の射で魔物の両眼を潰せ、というもの。そんな離れ技を、彼女は不安定なルーフの上で成さなければならぬ。

「……………ノラちゃんのためよ。大丈夫、できるわ」

静かな声で自分に言い聞かせる弓使い。

現役時代、流鏑馬の名手として知られた彼女は、巨大な赤い目を狙って弓を引いていた。

そうして車と魔物が校舎へと近づく。その距離、三百メートルほど。

車の速度が限界突破した今、それだけの距離を詰めるのにそう時間はかからない。

「ギリギリまで引き寄せるよママ！ あと三秒っ！」

運転手の声を聞き、弓使いは心の中でその秒数を数える。

ルーフの上に吹く強い夜風。靡く黒髪と、震える指先。

心身を集中させ、数十年という年月が忘れさせた弓の感覚を呼び覚ます。

普段の状態ならば、普通の人間ならばそんな事は容易では無いだろう。しかし、彼女が持つ弓には文字通り魔法がかかっている。それをかけてくれたのは他でもない、愛する居候の魔法少女。

彼女のために、家族のために。

弓使いは全身全霊をかけてその弓を射る。

「——今よっ！」

そして車が校舎に激突する寸前、矢は放たれる。

闇を切り裂き高速で魔物の目へと向かったその二本の矢。

それは思惑通り、眼球を貫いた。

「……………あら」

しかし、弓使いに見えたのは、矢が片目にしか刺さっていない光景。

それを見て、彼女は困ったような微笑みを浮かべた。

「お母さんも腕が落ちたわね。やっぱり歳かしら？」

そして、痛みに暴れ悶える魔物の腕が、車に向かって振り下ろされた。



「親父っ、お袋オ——っ！」

母親が放った矢が目突き刺さった瞬間、突如として暴れ始めた魔物。屋上からではよく見えなかったが、魔物が暴れ出して数秒経った後、あの二人が乗る車は爆発し、校舎の前にある花壇を燃やした。確実に分かるのはあんな状況で二人が無事ではない、という事実だけ。

「くそッ！」

「ダメですカイトさんっ。あなたが下に戻ったら私を守る人がいなくなりますっ！」

屋上から降りて二人のもとへと向かおうとした時、白い魔方陣の中で呪文のようなものを詠んでいた魔法少女がそう言うってくる。

「でもっ!」

「あの二人なら大丈夫ですっ! 今はとにかく私の所から離れなくてくださいっ。カイトさんはおとーさんとおかーさんの努力を無駄にしたいんですかっ!」

その言葉を聞いて、少しだけ冷静になる思考。俺は動こうとする両足をなんとか踏み止まらせた。

「ならてめえも早くしろっ!」

「無理言わないでくださいっ。あの大きさの魔物を倒すのに、どれだけの魔力を練る必要があると思ってるんですかっ!」

焦る俺に向かって叫んでくる魔法少女。あいつもあいつなりに焦っているのがその声を聞いて分かった。

余程ひどい痛みを感じているのか、けたたましい叫び声を上げながら暴れている魔物。目の辺りを押さえながら、奴は遂にそのデカイ片方の手で校舎の一角を吹き飛ばした。必然、屋上にいる俺たちにもその振動は伝わってくる。

「……………少しマズいですね。あの魔物はまだ片目が見えている。両目を潰せれば、この魔法を絶対に当てられる自信があつたんですが。このままでは」

魔法少女は両手を前に突き出しながら悩むような声を零す。

こいつが両親に頼んだのは、あのデカブツをこの校舎の付近まで引き寄せた上でその視界を奪う事。そうすれば確実に倒せる、と言つた。

だが結果的に片目だけが残つてしまった。その所為で魔物は暴れ、両親が乗る車は破壊された。

「どうすりゃいい」

「仕方ありません。このままいきます。皆さんのおかげで魔力は十分です。これを当てれば、どれだけ大きな魔物であっても一撃で倒せます」

魔法少女は俺の方を見て、前髪を触りながらそう言ってくる。

そのいつも通りの仕草を見て、こいつがそれに対して不安を抱いている事に気づいた。

「でも、絶対とは言えねえんだろ」

「……………どうして分かるんです」

「バーカ。てめえの嘘は分かるつつつたろ。で、俺は何をすりやいい。いいから早く言え」

そう言うと、魔法少女は凶星といった顔を浮かべた。

それから少し時間を空けて、奴はその小さな口を開く。

「……………先ほども言った通り、あの魔物の残った目を潰せば絶対に倒せます。これは嘘じゃありません。ただ、どこに当ててもいい、というわけじゃないんです。狙うのは、心臓。そこにこの魔法を当てる事ができればいいんです」

「そうか。んなら」

「え……………カイトさん？」

俺は足元に落ちていたグラウスの剣を拾い上げる。



「用は俺があいつの目ん玉をぶつ潰してくりやいいんだろ？　　んだよ、超簡単じゃねえか」

思いついた考えを軽い感じで口にしてみる。俺にはこれくらいしか思い浮かばなかった。割とマジで言ったのに、後ろからは否定的な意見が飛んで来る。

「な、何を言ってるんですかつ。そんな事ができると、本気で思ってるんですかつ!？」  
「思ってたから言ってるんだよ。それとも、それ以外にあの化けモンに勝てる手段があるのか？　あんなら言ってみろ」

振り向き、真面目な顔を浮かべて俺を見ていた魔法少女に問いかける。  
すると奴は少し目を見開き、それから黙ったまま左手で前髪を触った。  
ほら見ろ。やっぱ無いんじゃないかよ。

「いいからてめえはその魔法とかいうのを使う事に集中してろ。行くぞ、みかん」  
「なつ、待つ——！　　カイトさんっ！」

頭に載つてるみかんのにやー、という返事を聞き、俺は剣を握り締めて走り出す。後ろから聞こえて来た魔法少女の静止の声はもちろん無視した。

フェンスが吹っ飛んでいた箇所を見つけ、そこから飛び降りる。その真下にあるのは未だに暴れている魔物のデカイ腕。この行動の結果がどうなるかなんて考えない。行き当たりばったり？ 上等だよ。とにかく、今はあの化け物の目を潰す事だけを考える。

「っ、と」

魔物の腕に着地する。だが、母親が放った矢で片目を穿たれた魔物はその痛みに悶え続けているため、足場がなかなか安定しない。

視線を上げると、かなり上方に赤い玉のようなものを見つけた。たぶん、あれがこいつの目玉。振り落とされないように気をつけながら、魔物のごつごつした肌の上を走り出した。

「暴れんじゃねえ！」

魔物の暴れ方には波があり、時おり握った剣を足元に突き刺して振り落とされぬように踏ん張った。その揺れが治まったのを見計らい、目に向かつて腕を駆け上がる。

それを何度か繰り返し返して何とか肩の付近まで辿り着き、赤い瞳をすぐそばに見た。よし、これなら何とかなる。

そう自分に言い聞かせた時、頭の上から聞こえてくるみかんの鳴き声。

「な——っ!？」

その瞬間、俺の両腕以外の体幹は魔物の手に握り締められた。

身体を捻じつてどうにか脱出を試みるが、こんな馬鹿デカイ奴に掴まれてそう簡単に抜け出せないのは自明の理。案の定、徐々にその握力は強くなってくる。

身体が軋む音が聞こえ、同時にどこかの骨が折れる感じがした。魔法をかけられているおかげで何とか生きているが、それでもこの状況はマズい。いくらあいつの魔法でも限界はある。

だったら、どうすりゃいい。どうにかしなければ俺はこのまま握り潰されて死ぬだけ。せつかくここまで来たつのに、それで終わってたまるか。

「みか、ん……っ！」

俺は自由な右手で頭の上に載った三毛猫の首の後ろを掴み、顔の前に持つてくる。こうなりや一か八かだ。何度も命を救ってくれたこいつに、もう一度頼むしかない。俺が考えている事が、ただの捨て猫に伝わるかどうかは分からない。

でも、あのクソガキに育てられたこいつなら、この意思が伝わってくれると信じる。

「あのクセエ口ん中に、これを放り込んで来い！」

それから胸ポケットに入れていた小瓶を啜えさせ、みかんを魔物の腕の上に置いた。すると三毛猫は俺に言われた通り、くるりと踵を返して黒い肌の上を駆けて行く。

あれがこのデカブツに効く保証は無いけれど、今は賭けるしかない。

『私がいた世界に住む生物はみんな、辛いものが食べられないんですっ！』

あの女を後悔させるために持ち歩いていた、悪魔のスパイス。

これを口の中にぶち込めば、きつとどうにかなってくれるはず——！

「みかんっ！」

叫んだと同時に、魔物の口角に着いたみかんはその口の中に小瓶を放り込む。そして、途端に動きが止まる。

数秒の沈黙。

心の中でダメか、と思いかけた時、魔物は再び動き出した。

「うお——ッ!？」

魔物は掴んでいた俺を上空へと放り投げ、口から火を吹きながら暴れ始める。

あの小瓶が効いたのかどうかは知らない。だが、この位置なら間違いなく当てられる。

空中で体勢を整え、落下していく場所へと握り締めた剣の切っ先を向ける。

重力に逆らわず落下し、その勢いのままながら空きの目玉に剣を突き刺した。

直後、悲鳴のような声を出しながら後退って行く魔物。

視界を奪われた所為で平衡感覚すらおかしくなったのか、奴は両手で目を押さえたま

ま校庭の中心へと下がって行く。

宙に浮くこの身体。

暴れ出した魔物に振り払われ、あえなく地面に向かって落ちて行く途中だった。でも、役目はしつかり果たした。

あとは。

屋上に立つあのクソガキに、すべてを託すだけ。

「行けえ——ノラアツ!!!」

空中で叫んだ瞬間、魔物に向かって白い光線のようなものが屋上から放たれた。続いて聞こえてくる魔物の悲鳴。  
そして。

「――<sup>judgment</sup>終局判決――。上出来ですよ、カイトさん」

誰かの偉そうな声が耳に届き、ちよつとだけムカついた。



「——魁人っ、起きて魁人っ！」

「あ。見てママ！ 魁人が気づいたよっ」

耳元で名前を呼ばれながら身体を揺さぶられている。

それに気づき、俺は目を開けた。

「魁人おっ！ よかったわあっ！」

「んお!？」

直後、寝そべっているこの身体を母親が抱き締めてくる。

「よかったっ、生きていてくれてよかったっ」

傍らで泣いている親父。

それを見て、なんとなくこの状況を理解できた。

「……………あぁ」

俺たちはあの魔物に勝って、その上でみんな生きています。  
それだけ分かれば、今は十分だった。



## 第二十九話



それから俺たち三人は屋上へと向かう。

起きた時、近くにみかんがいなかったのは気になったけれど、屋上に着いたらすぐにその理由も分かった。

「……………ノラちゃん」

遠くの山から顔を出した朝日と、その方向を向いて立ち尽くしている一人の女。彼女  
の頭の上には一匹の猫が乗っている。

母親が名前を呼ぶと、奴はゆっくりとこちらを振り返った。

数秒間、静寂が明け方の屋上に流れる。

しばらくの間、俺たち主藤家三人と、その一員になり損ねた魔法少女は、何も言わず

に見つめ合った。

「お疲れさまでした。これでもう、あなたたちが命を狙われる事はありません」

そして、魔法少女は静けさの中に言葉を零す。

「あなたたちには、最後の最後まで迷惑を掛けてしまいましたね。ありがとうございます」  
「勝つ事ができたのは、間違いなく皆さんのおかげです」

逆光で顔を隠す魔法少女は、そんな風に感謝をしてくる。

でも、俺たちにとってはそんなのどうでもよかった。

「これで何も思い残す事はありません。皆さんが私を忘れれば、私は元の世界に帰れます」

魔法少女はそう言ってベルトに付いた三つのワスレダマを外し、それを自分の前に浮かべる。

「ノラちゃ」

「皆さんと過ごす時間は、とても楽しかった。元の世界にいたままでは、一生かかってもあんな日々を手に入れる事はできなかったでしょう。それくらい………充実した毎日でした」

親父の声を遮るように、自分の言葉を並べる魔法少女。

「でも、これ以上ここにはいられません。私は、本当のお父さんとお母さんの所へ帰らなくちゃいけないんです。それを、おとーさんとおかーさんなら分かってくれますよね？」

魔法少女がそう口にした途端、俺の両脇に立つ両親が息を呑むのが分かった。

「だから、これでさようならです。皆さんは私のすべてを忘れて元の生活に戻り、私は元の世界へと帰る。これは、たったそれだけの事です。何も悲しくはありません」

魔法少女はそう言って、風に揺れる金色の前髪を触った。

「本当にありがとうございます。……………では」

「ノラちゃん——っ！」

魔法少女が何かをしようとした時、右隣に立っていた母親がその名を呼んで一步前に出る。

まだ朝日の影になって奴の顔は見えないが、奴が驚いているのは何となく理解できた。

母親は少しの間、言葉に詰まっていた。

それはきつと、地面に零れ落ち続けている涙の所為。

「行かないで……………ノラちゃん」

それから絞り出すような声で母親は言い、手で顔を覆ってその場に崩れ落ちた。

気づくと、左隣に立っていた親父も腕を目に押し付けていた。

母親の涙声を聞いて、魔法少女は下を向く。

その時、ちようど太陽に雲がかかった。

「どう、して」

そして、次に奴が顔を上げた時。

「どうしてそんな事を言うんですかっ!?!」

魔法少女はやっぱり——泣いていた。

「私だって本当は帰りたくない！ 皆さんとずっと一緒にいたいっ！ 私を忘れてほしくないっ！ そんなの当たり前じゃないですかっ!?!」

涙を隠さずに叫ぶ魔法少女。

悲しんでいるのが自分たちだけだと思ひ込んでいた俺たちに、その思いをぶつけてく

る。

「姫としての責務？ どうだつていいんですそんなものつ！ 私は、あんなくだらない世界になんて帰りたくないっ。この素敵な世界で、皆さんといつまでも一緒に生きていたいんですよ……っ」

魔法少女はそこで言葉を切り、零れてくる涙を拭いた。

そうして何度か嗚咽を繰り返し、それが落ち着いてから静かに声を零す。

「……………分かってください、おかーさん。私も同じ気持ちなんです。でも、それは許されない。私はやつぱり、帰らなくちゃならないんです」

目を潤わせて唇を噛みながら語る魔法少女。彼女が本当にこの世界で俺たちと暮らしたいと思っているのは、その表情から痛いくらい読み取れた。

それでも、奴は最後まで自分の意思を貫いた。

「皆さんと出会えてよかった。皆さんが私の事を忘れても、この世界で過ごした日々を、

私は忘れません。だから、これでいいんです」

そう、自分自身に言い聞かせるように言ってから、魔法少女は振り返った。再び顔を出した朝日を見つめて、奴はその場に立ち尽くす。

「カイトさん」

そして、前を向いたまま俺の名前を呼んで来た。

「……………んだよ」

「そういえば、私がカイトさんを主に選んだ理由、伝えていませんでしたよね？」

俺は何も言わず、聞こえてくる続きを待った。

「あの日。通りすがりの人間の中からあなたを選んだのは、あなたの在り方が私と似ていたからです。数多の人間の中で、カイトさんは誰よりもこの世界の物事をくだらなそうな目で見ていた。それは、他人が生きている事も、自分が生きている事でさえも」

「……………」

「だからこそ、あなたとなら分かり合えると思った。私と同じ目でくだらない世界を見ている、私と同じ——捨くれ者の、あなたとなら」

ただ、と魔法少女はその言葉に言葉を付け加える。

「この世界はあなたが思うほど、くだらなくありません。これは異世界からやって来た私だから言える事です。ここはまだまだ捨てたものじゃない。あなたが生きる価値は、確かにあるんですよ」

賛同するように、奴の頭に乗るみかんにやんと鳴いた。

「だから、カイトさん。あまり世界に向かって中指ばかり立てないでください。あなたの指は、そんな事をするためにあるんじゃないんです」

魔法少女は少し間を置き、半身になってこちらを向いた。



「それは、おとーさんとおかーさんがくれた——かけがえのない、宝物なんですか  
ら」

そして、優しく微笑みながらその言葉を紡いだ。

「……………最後に。カイトさんに、ずっと言いたい事があつたんです」

魔法少女はこちらを見つめながらそう言ってくる。

俺は頷き、奴に訊ねた。

「なんだよ」

その問いを聞いて、魔法少女は満面の笑みを浮かべた。

——柔らかな風が吹き、金色の髪が揺れる。

——同時に、三つの透明な玉から俺たちに向かって白い光が放たれる。

——ひととき大きな光に包まれて行く、三毛猫と魔法少女。

——その姿が消える直前、奴は俺に向かって言った。

「その髪型、あんまり似合ってますんよ？」

「うるせえバーカ」

そして、眩い朝日がくだらない世界を照らし出した。

## E p i l o g u e / 捨て魔法少女とリーゼント

## 第三十話

## ◇ E p i l o g u e

「……………ん」

朝、起きる。自室のベッドの上。閉め切られたカーテンの隙間から細い朝日が差し込み、暗い部屋の中に微かな光を与えていた。

何でもない一日の始まり。今日も面倒くさい学校に行つて、何もせずに時間を浪費する事だけが決まっている。その時間を出来るだけ短くするために、朝はゆつくり目覚めるのが俺の習慣。

「あ?」

だというのに、壁に掛けられた時計の針は六時半を指し示している。意味が分からない。なんで俺がこんな規則正しい時間に目覚めなければならないのか。

それと、腹の上に何も乗って無い事に対して違和感を覚える。

「……訳わかんねえ」

たまにはこんな日もあるか、と自分に言い聞かせ、ベッドから起き上がる。起きたばかりの部屋に誰もいない事が、何故か久しぶりなような気がした。



それから階段を下り、顔を洗っていつもの髪型を作る。

これは俺が俺である証。誰に何を言われようとも、この髪型リセットを変えるつもりは無い。

「あら、おはよう魁人。今日は早いのね」

髪型を作り終わり、時間を潰すためにリビングへ向かった。するとそれに気づいた母親が声をかけて来る。

だが、何も言わない。親とは口を利かない。これも俺の習慣だから。

「ああ、おはよう………ん？」

なのに、自然と口が動いて母親に挨拶を返してしまう。

今のは完全に無意識だった。それを聞いた母親も、驚いた様子でこちらを見てくる。

「な、何でもねえよ。こつち見んなクソババア」

「そ、そう。ごめんね、魁人」

そう言っついても通り距離を取り、俺はソファに腰を下ろしてテレビを点ける。なんだ、今日は。いつも通りの自分じゃない気がする。こんなの、まるで。

「おはようママ……つて、え？」

天気予報を眺めながらそんな事を考えていると、リビングに親父が入ってくる。

親父は俺の姿に気づくなり、おかしなものを見つけたような目をこちらに向けて来た。

「か、魁人もおはよう。今日は早いんだな」

親父に声をかけられるが、今度は意識的に無視をする。

だが、無視をする事に意識を向けている時点で、自分がいつもとは違うのは明らかだった。

親父はそれ以上何も言わず、食卓の席に腰を下ろす。

「あれ、新聞が無いな……」

途端、自分の周りをきよろきよろと見渡しながら独り言を言い始める。

その意味不明な動きを眺めていると、視線に気づいた親父は咳払いをしてから口を開

く。

「魁人。早起きしたならお母さんの手伝いくらいしたらどうだ」

「は？ うるせえな。話しかけてくんじゃねえよバーカ」

「なんだその口の利き方は。お前も少しはあの子を見習って——」

と、親父はそこまで言っただけで言葉を止めた。

その会話を聞いていた母親が台所から顔を出し、親父に向かって問いかける。

「パパ。あの子って？」

「あ……ああ、なんでもないよママ。少し寝ぼけてた。眠気覚ましに新聞取ってくるよ」

親父は母親の質問を誤魔化し、空笑いしながらリビングから出て行った。

その奇妙な様子を見て母親は首を傾げ、気を取り直すように微笑みを浮かべる。

「朝ご飯できたわよ。じゃあこれを持って行ってくれる？ ——ちゃん」

「……………」

「……………つて、あれ？　いま私、なんて」

今度は母親が訳の分からない独り言を言い出した。

口に出してから自分の不審さに気づいたのか、母親は口に手を当ててその場に立ち尽くしている。

そうしていると、新聞を持った親父がリビングに戻ってくる。

「ん？　どうしたんだい、ママ」

「え？　あ、ううん。なんでもないわ、パパ。それより、朝ご飯を食べましょう」

親父に声をかけられて我を取り戻す母親。その姿は誰が見たって不自然に思っただろう。

両親は二人で朝食を並べ、それから母親がこちらに向かって声をかけて来る。

「魁人、よかつたら一緒に食べない？」

「あ？　なんで俺が」

「ママの言う通りだ、魁人。たまには一緒に食べよう」



母親の提案を拒否しようとする、親父も俺を誘ってくる。普段ならば無理やり拒んだところだが、今日は誰かに『早くしてください！』と急かされている気がして、何故か立ち上がってしまった。

「仕方ねえな。今日だけだぞ」

「ふふ、よかったあ」

舌打ちをしながらそう言い、食卓に座る。

それから嬉しそうな顔をしている母親は、誰もいない俺の隣の席に向かって言った。

「じゃあ、いただきますをしなきゃね」

その言葉がリビングに零された時、それがおかしい事に気づいた。

いや、ちがう。

こんなやり取りがおかしいのは、最初から分かっていた。

「……………なん、で」

この主藤家には三人しかいない。  
それはみんな分かつてる。

なのに何故、四人分の朝食がこの食卓には並んでいるのか。

「あれ？ ……………おかしいわ」

「ママ……………」

「どうして、泣いちやうの…………？ 何も、何もおかしくないのに……………なんで？」

そう言って、涙を流しながら机の上に顔を押し付ける母親。

横で突然泣き崩れた母親の肩を優しく擦る親父の目にも、同じ滴が光っていた。

「分かってる。分かってるよ、ママ」

「昨日まで、誰かがそこに座ってたのよ？ でも、それって誰なの？ ねえ、誰なのよおっ」

声を上げて泣く母親を見て、俺の目からも自然と水が零れて来た。嘘だろ。なんで、こんな奴らを見て泣かなきゃならねえんだ。なんでだよ。

なんで、俺の横には誰もいねえんだよ。

「……………俺も、覚えてる」

それが誰だったのかは、もう思い出せない。

でも、ひとつだけ思い出せる事がある。

俺は立ち上がり、泣き崩れる母親の横に移動する。

そして、親父の真似をしてその肩に手を置き、言った。

俺たちは、その誰かを拾ったんじゃない。

「俺たちはそいつに——拾われたんだ」

そうして俺たちは、昨日までそこにいた誰かの事を思い、ただひたすらに泣き続けた。



「じゃあ、行ってくる」

玄関を開けて振り返り、並んで立っている両親に向かって俺は言った。

「いってらっしゃい」

二人は口を揃えてそう言い、涙の線が残ったままの顔で微笑んでくれた。

「……………あー」

その表情を見て少しだけ考え、それから似合わない勇気を出す事にする。

この髪型にしてから一度も口にしなかった彼らの呼び方。確かに恥ずかしさはある。でも、今はそれより二人の事をそう呼びたくて堪らなかった。

だから、俺は言う。

知らない誰かが教えてくれた。

家族を大切に思う気持ちを笑顔に乗せて。

「行ってきます。お父さん、お母さん」



——この心情を映し出すように、夏空は晴れ渡っている。その美しい晴天を見上げながら、学校まで続く道を歩いた。

「待ってよお兄ちゃんっ」

「早く行くぞっ、学校まで競争だあ！」

そうして、いつか見た仲の良い兄妹とすれ違う。

立ち止まり、遠ざかって行くその二人の背中を見つめて微笑んだ。

どうせまた、くだらない毎日が続くのは分かっている。くだらない人間が住むこの世界で、その誰よりもくだらない自分も例外なく、くだらない人生を送って行く。

ただ今は、こんな景色が少しだけ綺麗に見える。

それはきつと、自分がほんの少しだけこの場所を許せたからなんだと思う。  
なぜ許せたのかは、よく分からないけれど。

この世界はくだらない。それでも、生きる価値はある。

そう自分に言い聞かせて、今日も不良として生きてやろう。

そんな事を考えながら公園を歩いていると、近くからとある女の声が聞こえてきた。

「——まったく。誰ですか、人間の記憶だけ消せれば元の世界に帰れるとか本に書いたの。姿を見られた動物の記憶まで消さなきゃいけないなんて、そんなの知りませんで

したよ、もう」

「……………」

「せっかく素敵な家族に巡り合えたっていうのに、これじゃあまた捨て魔法少女に逆戻りじゃないですかあ。ねえ、みーちゃん？」

にやあ、という猫の鳴き声。

その方向に顔を向けると、また声が聞こえてくる。

「あーあ、どこかに可愛い魔法少女と猫を拾ってくれる優しい人間はいませんかねえ。別に、目つきの悪いやんきーさんでもかまわないんですが」

そこには段ボール箱の中に足を突っ込んで立っている金髪の女と、一匹の猫がいた。

その女は視線に気づき、こちらを向いて口を開く。

「ああ、その変な髪型のお兄さん」



これは本当につまらなく、且つ普遍的な一日の始まり。

そんなありきたりで代わり映えのしない日々が発生した、ただひとつのイレギュラー。

ここから始まる日常は、きつとウザいくらいに騒がしくて、それと同じくらい楽しいのかもしれない。何故かは分からないけれど、この第六感がそう叫び続けていた。

俺はそこにいる金髪に向かつてメンチを切った。

だがやはり、奴が動じる事はない。

そして、その全身ピンク色の女はムカつく笑顔を浮かべて、言った。

これは——くだらない日々の中に訪れた、心底くだらない物語。

「よかつたら、私を拾ってくださいませんか？」

「あ？」



その日、俺は捨てられていた魔法少女に出会った。

捨て魔法少女とリーゼント

終